

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第327集

# 佐野原遺跡発掘調査報告書

主要地方道水沢・米里線改良事業関連調査

(財)岩手県文化振興事業団

埋蔵文化財センター



# **佐野原遺跡発掘調査報告書**

**主要地方道水沢・米里線改良事業関連調査**

# 序

本県には縄文時代の遺跡を初めとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、8,500か所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和は今日の課題であり、当岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、「県道水沢・米里線道路改良事業」に関連して、平成9年度、10年度にわたって発掘調査を行った水沢市佐野原遺跡の調査結果をまとめたものであります。同遺跡からは平安時代の集落跡をはじめ中世の集落、縄文時代の住居跡など貴重な遺構、遺物が検出されました。調査に引き続き、出土資料の整理を進め、個々に報告書として発刊する運びとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず広く埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査及び報告書作成にご協力、ご援助を賜りました水沢地方振興局、水沢市教育委員会を始めとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成11年11月

財団法人岩手県文化振興事業団  
理事長 船 越 昭 治

## 例　　言

- 1 本報告書は岩手県水沢市佐倉河字佐野原35番地ほかに所在する佐野原遺跡の調査結果を収録したものである。
- 2 本調査は県道水沢・米里線道路改良事業にともない遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は岩手県水沢地方振興局と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳に登載されている遺跡番号は、ME16-0365、遺跡略号はSH-97、SH-98である。
- 4 調査面積は2,347m<sup>2</sup>、野外調査期間は平成9年度が8月18日～10月31日、平成10年度は10月1日～11月5日である。
- 5 室内整理期間は 平成9年度が平成10年2月1日～3月31日、平成10年度が平成11年2月1日～3月31日である。
- 6 野外調査は 平成9年度金子佐知子・山口俊規、平成10年度晴山雅光・平澤里香が担当した。
- 7 I章調査に至る経過を高橋與右衛門、II章遺跡の立地と環境、III章調査方法と整理方法、IV章検出された遺構と遺物 1 平成9年度調査を金子佐知子、2 平成10年度調査を晴山雅光が執筆した。
- 8 分析、鑑定、鉄器の保存処理は次の方々、機関に依頼した。

石質鑑定	花崗岩研究会
木材樹種同定	木工者「ゆい」高橋利彦氏
鉄器保存処理	新日本製鐵㈱釜石文化財処理センター
- 9 本報告書では、国土地理院発行の50,000分の1の地形図、岩手県水沢地方振興局作成の500分の1の地形図を1,000分の1に縮小したものの2種類を使用した。
- 10 土層の色調観察には、農林水産技術協会事務局監修の「新版標準土色帳」を用いた。
- 11 発掘調査及び室内整理に際しては次の方々、機関のご協力とご教示、ご指導を賜った。(敬称略)

阿部一	伊藤博幸	佐々木千鶴子	佐藤良和	佐藤嘉広	鈴木明美	高橋千晶	千田幸生	本澤慎輔
八重樫忠郎	水沢市埋蔵文化財調査研究センター							
- 12 調査にかかわる諸記録及び遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 目 次

序  
例 言  
日 次

## [本 文]

I 調査に至る経過	1	2 出土遺物	
II 遺跡の立地と環境	3	(1) 遺構内出土遺物	45
1 位置		(2) 遺構外出土遺物	46
2 地形		3 平成9年度調査のまとめ	60
3 周辺の遺跡		参考文献	63
4 基本層序と検出、出土状況	12	V 平成10年度調査	
III 調査方法と整理方法		1 遺構	64
1 野外調査	13	竪穴住居跡	64
2 室内整理	14	土坑	65
IV 平成9年度調査		柱穴	67
1 遺構	19	2 出土遺物	76
竪穴住居跡	19	(1) 遺構内出土遺物	
竪穴建物跡	22	(2) 遺構外出土遺物	
掘立柱建物跡	23	3 平成10年度調査のまとめ	81
井戸跡	23	参考文献	84
住居状遺構	24	VI 各種分析	85
カマド状遺構	24	1 1号井戸跡の縦枠材	86
土坑	24	2 4号土坑内杭・種実	88
集石	31	報告書抄録	128
焼土遺構	31	職員一覧	129
溝跡	32		
柱穴状土坑	33		

## [図版]

岩手県全図	2
第1図-1 遺跡位置図	4
第1図-2 岸辺地形分類図	5
第2図 周辺の遺跡図	11
第3図 遺跡地形図	15
第4図 遺構配置図	17
第5図 竪穴住居跡 (1) (1~3号・5号 土坑)	36
第6図 竪穴住居跡 (2) (4~7号)	37
第7図 竪穴建物跡	38
第8図 挖立柱建物跡・井戸跡・カマド状遺構・1号土坑	39
第9図 住居状遺構・土坑 (2~4・6~8号)	40
第10図 土坑 (9~18号)	41
第11図 土坑 (19~22号)・集石・焼土遣構・溝跡	42
第12図 柱穴状土坑	43
第13図 遺構内出土遺物 1 (1・4号 住居)	49
第14図 遺構内山上遺物 2 (4・5号住居、16号土坑)	50
第15図 遺構内出土遺物 3 (16号土坑・1・15・19・22号 土坑、8区P 8、1号井戸跡)	51
第16図 遺構内出土遺物 4 (1号井戸跡)	52
第17図 遺構内山上遺物 5 (1号井戸跡)	53
第18図 遺構外出土遺物 1 (縄文土器)	54
第19図 遺構外出土遺物 2 (縄文土器、弥生土器、土師器、須恵系土器)	55
第20図 遺構外出土遺物 3 (須恵器)	56
第21図 遺構外出土遺物 4 (陶磁器、金属製品)	57
第22図 遺構外出土遺物 5 (石器)	58
第23図 遺構外出土遺物 6 (石器、石製品)	59
第24図 竪穴住居跡 (98'-1号住居跡)	70
第25図 土坑・柱穴群 (98'-3~5号土坑、98'-3~5・18・19号柱穴)	71
第26図 上坑 (98'-1・2・6・7号)	72
第27図 上坑・柱穴 (98'-8~10号土坑、98'-2・6~11号柱穴)	73
第28図 柱穴・焼土遣構 (98'-12・13・16・17号柱穴、98'-1焼土)	74
第29図 柱穴状小ピット群	75
第30図 遺構内山上遺物 6 (98'-1号住居)	77
第31図 遺構内出土遺物 7 (98'-1号住居、98'-2~4号土坑)	78
第32図 遺構内出土遺物 8 (98'-7~9号土坑、98'-2・5号柱穴)	79

第33図 遺構内・遺構外出土遺物（98-6・9・10・13号柱穴、柱穴状小ピット）	80
第34図 地形と遺構	82
第35図 重複土坑群	83

## [写真図版]

写真図版1 遺跡遠景・航空写真	93
写真図版2 1号住居跡	94
写真図版3 2号住居跡	95
写真図版4 4号住居跡	96
写真図版5 4号住居跡(2)・5号住居跡・6号住居跡(1)	97
写真図版6 5号住居跡・6号住居跡(2)・7号住居跡(1)	98
写真図版7 7号住居跡(2)・1号堅穴建物跡	99
写真図版8 1号堅穴建物跡(2)・2号堅穴建物跡(1)	100
写真図版9 2号縦穴建物跡(2)・住居状遺構・井戸跡・カマド状遺構(1)	101
写真図版10 カマド状遺構(2)・土坑(1号)	102
写真図版11 土坑(2号～6号)	103
写真図版12 土坑(7号～13号)	104
写真図版13 土坑(14号～16号)	105
写真図版14 土坑(17号～20号)	106
写真図版15 土坑(21号～22号)・集石・1号焼上遺構	107
写真図版16 2号焼土遺構・溝跡	108
写真図版17 2区-2・3区 柱穴状土坑	109
写真図版18 遺構内出土遺物 1(遺物番号 1～16)	110
写真図版19 遺構内出土遺物 2(遺物番号 17～31)	111
写真図版20 遺構外山上出土遺物 1(遺物番号 32～68)	112
写真図版21 遺構外出土遺物 2(遺物番号 69～84)	113
写真図版22 遺構外出土遺物 3(遺物番号 85～102)	114
写真図版23 平成10年度 調査区全景	115
写真図版24 98-1号堅穴住居跡	116
写真図版25 土坑・柱穴群	117
写真図版26 土坑(98-1～3・5・6号)	118
写真図版27 土坑(98-7～10号)	119
写真図版28 柱穴(98-2・6～11号)	120
写真図版29 柱穴(98-9～15号)	121

写真図版30 柱穴（98'-16～18号）・出土状況・焼土	122
写真図版31 柱穴状小ピット・空撮	123
写真図版32 遺構内出土遺物 3（遺物番号 103～108）	124
写真図版33 遺構内出土遺物 4（遺物番号 109～122）	125
写真図版34 遺構内出土遺物 5（遺物番号 123～135）	126
写真図版35 遺構内・遺構外出土遺物（遺物番号 136～148）	127

[ 表 ]

第1表 周辺の遺跡	7
第2表 柱穴状土坑一覧表	33
第3表 石器分類表	48
第4表 遺構内出土遺物観察表	
1・4号住居跡（遺物番号 1～8）	49
4・5号住居跡、16号土坑（遺物番号 9～16）	50
1・15・16・19・22号土坑、1号井戸跡、8区P8（遺物番号 17～26）	51
1号井戸跡（遺物番号 27～29）	52
1号井戸跡（遺物番号 30～31）	53
第5表 遺構外出土遺物観察表	
縄文土器（遺物番号 32～52）	54
縄文土器、弥生上器、土師器（遺物番号 53～61）	55
須恵器（遺物番号 62～74）	56
陶磁器、金属製品（遺物番号 75～84）	57
石器（遺物番号 85～97）	58
石器、石製品（遺物番号 98～102）	59
第6表 遺構内出土遺物観察表	
1号住居跡（遺物番号 103～109）	77
98'-1号住居跡（遺物番号 110～122）	78
98'-1号住居、98'-2～4号土坑（遺物番号 123～134）	79
98'-7～9号土坑、98'-2・5・6・9・10・13号柱穴、柱穴状小ピット （遺物番号 135～143）	80
第7表 遺構外出土遺物観察表	
9区（遺物番号 144～148）	80

## I 調査に至る経過

佐野原遺跡は「主要地方道水沢米里線 桜沢地区道路改良工事」の施行に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査することとなったものである。

「主要地方道水沢米里線 桜沢地区道路改良工事」は、本路線が水沢市街と江刺市街を最短で結ぶ幹線道路であるが江刺市側が既に4車線化されているのに対し、水沢市側は2車線のままであり朝夕の交通渋滞が著しいことから、水沢市側も4車線に拡幅し円滑な交通を確保するために実施するものである。

当事業の施行にかかる埋蔵文化財の取扱いについては、岩手県土木部水沢土木事務所から平成5年9月9日付け水土第570号「道路改良工事に伴う埋蔵文化財の分布調査について(依頼)」の文書によって、岩手県教育委員会に対し分布調査を依頼したのが最初である。

依頼を受けた岩手県教育委員会では平成5年9月21・22日に分布調査を実施したが、その結果は平成5年11月22日付け教文第705号「道路改良工事に伴う埋蔵文化財の分布調査について(回答)」で水沢土木事務所へ回答され、その際工事施工範囲が佐野原遺跡の範囲内であることが付記された。

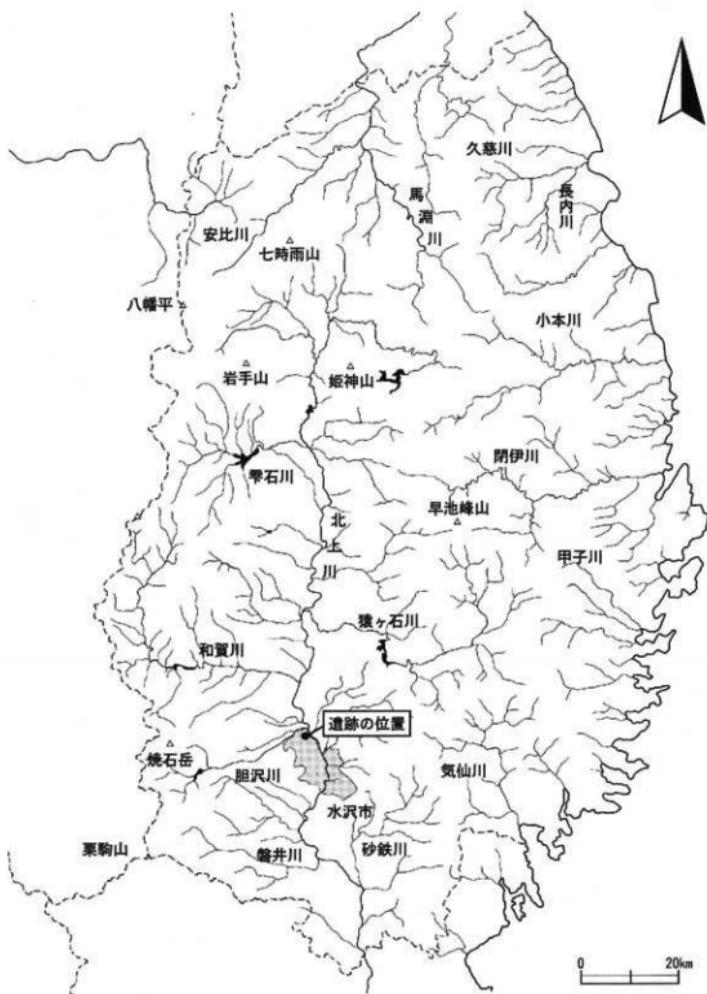
回答を受けた水沢土木事務所では、平成7年10月13日付け水土第1484号「埋蔵文化財発掘の通知について」で文化庁長官あてに発掘通知を行ったところ、平成7年10月16日付け教文第7-145号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」により確認調査(試掘)を実施するよう、教育長から通知があった。

これを受け、平成7年12月8日付け水土第1485号「埋蔵文化財の試掘調査について」により、水沢土木事務所長から文化課長あて試掘調査の依頼を行っている。

平成8年4月17日に試掘調査が行われ、平成8年5月2日付け教文第80号「主要地方道水沢米里線桜沢地区道路改良工事に係る埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により埋蔵文化財が確認された旨の回答を受けている。

平成9年7月30日に㈱岩手県文化振興事業団理事長と水沢地方振興局長との間で契約を締結し、同年8月1日から平成10年3月31日まで第1期分として2,347m<sup>2</sup>の発掘調査が行なわれた。

平成10年度は残る539m<sup>2</sup>について発掘調査を行うものである。



岩手県全図

## II 立地と環境

### 1. 位置（第1図、写真図版1）

佐野原遺跡は、岩手県内陸南部の水沢市佐倉河字佐野原35番地ほかに所在する。東日本旅客鉄道東北本線水沢駅の北方約2.2kmにあり、遺跡の東方約100mには北上川が南流する。北緯39度09分23秒、東経141度09分16秒付近である。

今回の調査区は遺跡の南東を通る県道水沢米甲線の両側で、幅3~12m、長さ約155mに渡る。

遺跡の所在する水沢市は岩手県の県南部に位置しており、北は胆沢川をはさんで金ヶ崎町、南は松ノ木沢川付近を境に前沢町、東は江刺市、東山町、西は胆沢町に隣接している。市のほぼ中央を北上川が南流し、西岸は胆沢川が形成した胆沢扇状地の東端、東岸は幅の狭い冲積地と北上山地の西端である。西岸は平坦な中位～低位の段丘で、市街地の周辺には水田が広がり、県内でも重要な穀倉地帯である。面積は96.92m<sup>2</sup>、人口は約6万人で、胆沢地区の中心的な都市である。

### 2. 地形（第1図-2）

水沢付近では、胆沢川が形成した北上川流域最大の扇状地地形が発達しており、一般に胆沢扇状地と言われている。扇状地は南側から北へいくつかの段丘に細別され、大別すると高位の一首坂段丘、中位の胆沢段丘、低位の水沢段丘となる。

本遺跡は胆沢扇状地の東端にあたり、低位段丘である水沢段丘の縁辺に立地している。水沢段丘の縁辺はおおむね北上川に平行して南に向かっているが、木造跡の南側付近から乙女川が形成した冲積面が大きく西側に入り込み、南北に二分される。そのため遺跡の東から南東側は1段低い冲積地であり、遺跡の範囲は調査区より南東には大きく広がらないものと思われる。北側は水沢段丘面が続くが、小規模な川で区切られており、その川が遺跡の北の限界である可能性が大きい。遺跡の周囲には水田が多いが、遺跡部分は宅地及び畠地となっており、周囲よりもわずかに標高が高い。調査区の標高は約43.5~47.5mである。

### 3. 周辺の遺跡（第2図）

水沢市内には平成8年3月末現在287か所の遺跡が登録されているほか、佐野原遺跡の北上川をはさんで北東の江刺市にも北上川、人首川が形成した冲積地の微高地に数多くの遺跡が確認されている。

佐野原遺跡周辺は北方約2.5kmの802年に造営された古代城柵の胆沢城や、南方約1.8kmの弥生時代の遺跡として有名な常磐広町遺跡、南東約2.5kmの縄文時代晚期の杉の堂遺跡など著名な遺跡が多く知られている地域である。

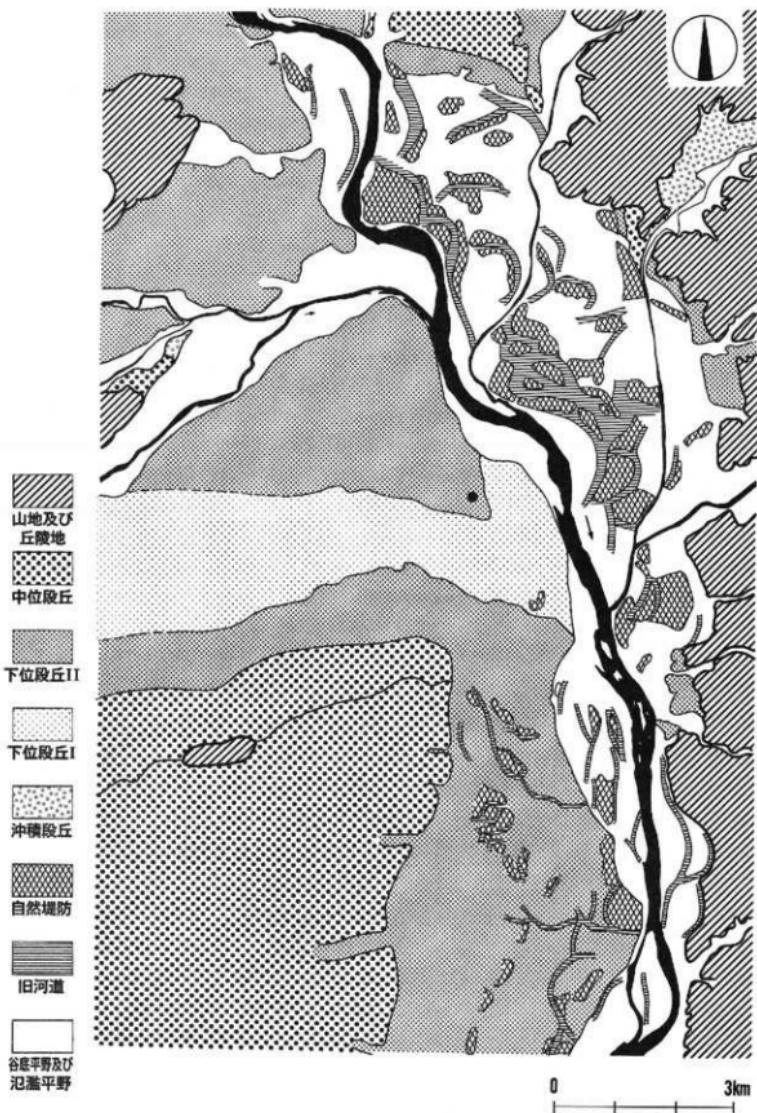
昭和50年代より東北縦貫自動車道や東北新幹線、国道4号線バイパスなどの大規模な公共事業に伴って、付近の遺跡の発掘調査が進み、国の史跡となつた胆沢城も継続して発掘調査が行われていてこともある、この地方の歴史資料が次第に蓄積されつつある。

ここでは佐野原遺跡の主体となる奈良・平安時代の遺跡と、中世の遺跡の2点にしづり、それらの立地について、述べる事とする。

北上川との合流地点に近い胆沢川の北岸及び南岸の低位段丘縁辺部には、古墳時代から集落が営まれていたが奈良時代にはいっても、墓跡、玉貢遺跡、今泉遺跡、宿遺跡などが立地し、次いで8世紀中ごろに水沢段丘の内部（石田遺跡、寺領遺跡）や佐野原遺跡から南の冲積面をはさんで対面する水沢段丘東部縁辺



第1図-1 遺跡位置図



第1図-2 周辺地形分類図

部（杉の堂遺跡、跡呂井陣場遺跡）に進出する。

また、佐野原遺跡の北東、北上川東岸の江刺市には8世紀中葉から後葉にかけて、沖積地の微高地上に落合Ⅲ、兎Ⅱ、力石Ⅱ、宮地遺跡などが形成され、中には9世紀代まで継続して集落が営まれるものもある。

平安時代になると佐野原遺跡の北方約2.5kmに胆沢城が造営され、この地方の集落構造に画期を迎えることになる。胆沢扇状地では、石田、杉の堂坂口、などに加え、膳性、東大畑、今泉など奈良時代までの集落がいったん途絶え、9世紀代に再び成立するものや、新たに中位段丘である胆沢段丘の縁辺部や沖積面の自然堤防上にも集落が営まれる。林前、中林、真城ヶ丘閉地、朴の木、浦の堀館などである。佐野原遺跡の南側に広がる沖積面にも横枕Ⅰなどの集落が何か所か成立する。江刺側ではこれまでの立地に加え、谷沿いの丘陵地・山地にも集落が営まれる。

胆沢城と深い関連があると推定される遺跡に江刺市瀬谷子窯址群、前沢町の明後沢遺跡がある。瀬谷子窯址群は280基を超える窯があると推定され、うち130基は発掘調査が行われている。須恵器のほか胆沢城や明後沢遺跡出土のものと同様の瓦が出土しており、これらの施設へ須恵器や瓦を供給する官営的な窯址群と推定されている。明後沢遺跡からは胆沢城と同様の瓦が多数出土している。しかし、本格的な発掘調査は行われていないことから遺跡の性格はいまだ不明である。

そのほか江刺市落合Ⅱ遺跡では旧河道から皿や下駄、農具などの木製品のほかに、墨書き土器、付札とみられる木簡も出土しており、胆沢城との関連が想定されている。

この時期の集落の立地、集落構造の変遷については伊藤（1980、1997、1998）による詳しい論述があるので参照されたい。

中世になると、白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡、束館、上柿休城などの城館が多く築かれる。城館の分布や立地については岩手県教育委員会による『岩手県中世城館跡分布調査報告書』、当事業団の埋蔵文化財調査報告書第248集『白井坂Ⅰ・Ⅱ』に詳しい。それによると、本遺跡が立地する水沢段丘北端の縁辺部には中世の城館が継続して並んでいるが、それらの性格や館主・年代は不明な遺跡が多い。

城館以外の遺跡では前述の膳性遺跡から中世の堅穴建物跡1棟、溝、土坑などが検出されており、てづくねやろくろ成形のかわらけが遺構内から出土しているほか、金ヶ崎町の永徳寺遺跡で堅穴建物跡2棟、かまど状造構が検出され、住居跡内から青磁碗破片が出土している。

第1表 周辺の遺跡

参考用「岩碑文」は岩手県埋蔵文化財調査報告書または岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書。  
 「縣報告」は岩手県文化財調査報告書

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
1	天竺老婆	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器
2	沼館	鉢跡	中世	井干丸人
3	別当	散布地	古代	土師器
4	沼の上II	散布地	古代	土師器
5	東岡	集落跡	古代	須恵器
6	北天國I	散布地	古代	土師器
7	駒込	鉢跡	古代	土師器
8	北天國II	散布地	古代	土師器・須恵器
9	阿努陀堂跡	祭祀跡	古代	土師器・須恵器
10	林	散布地	古代	土師器・須恵器
11	宝性寺跡	寺院跡	縄文・古代	縄文土器(中・晚期)・須恵器・土師器・石巖・布日瓦
12	耳取	散布地	古代	土師器
13	男石	散布地	古代	須恵器・瓦跡
14	岩谷武城	城館跡	中世	木丸・二の丸・三の丸・帯郭
15	二木木I	散布地	古代	土師器
16	二木木II	散布地	古代	土師器
17	小境I	散布地	古代	土師器
18	小境II	散布地	古代	土師器
19	新川I	散布地	古代	土師器
20	新川II	散布地	古代	土師器
21	北八日市	散布地	古代	土師器・須恵器
22	馬場先	散布地	古代	土師器・須恵器
23	馬場先II	散布地	古代	土師器・須恵器
24	観音堂沖I	散布地	古代	土師器・須恵器・ハケ目の骨壺
25	宮地	集落跡	古代	土師器・須恵器
26	杉ノ町	散布地	縄文・古代	縄文(後期)・土師器
27	中堀	散布地	平安	土師器
28	栄町	散布地	平安	土師器
29	観音堂沖II	集落跡	古代	土師器・須恵器
30	後中野	集落跡	縄文・古代	縄文土器・土師器・須恵器
31	池向城(川屋城)	集落跡・城館跡	古代・中世	城跡・須恵器・土師器
32	池向	散布地	古代	土師器・須恵器
33	朴ノ木	般ら地	古代	土師器
34	下郷田	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器・須恵器
35	寺田II	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器
36	豊田城	城館跡	古代	土師器・須恵器
37	三百刈田	集落跡	縄文・古代	縄文土器・土師器・須恵器
38	落合	集落跡	古代・中世	土師器・須恵器・木製品・陶磁器
39	寺田	散布地	弥生・古代	弥生土器・土師器・須恵器
40	内丸	散布地	古代	土師器
41	田中	散布地	古代	土師器
42	岩谷堂橋本I	散布地	古代	土師器
43	力石II	散布地	縄文・古代・中世	土師器
44	力石	散布地	弥生・古代	弥生土器・土師器・砥石
45	後田I	散布地	古代	土師器
46	力石III	集落跡	縄文・弥生・古代	縄文・弥生土器・土師器・須恵器
47	力石・兔I	集落跡	弥生・古代	弥生土器・土師器・須恵器
48	大畠	散布地	古代	土師器・須恵器
49	鴻ノ巣跡	城館跡・集落跡	古代	土師器・須恵器・住居跡・烟
50	後田II	散布地	古代	土師器
51	西前田	散布地	古代	土師器・須恵器
52	中屋敷	散布地	古代	土師器・須恵器
53	前広田	散布地	古代	土師器

No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
54	川崎 I	散布地	古代	土師器
55	川崎 II	散布地	古代	土師器
56	鹿野	散布地	縄文・平安	縄文土器
57	鹿田	散布地	平安	
58	新井田小西	散布地	縄文・平安	縄文土器・土師器・須恵器
59	旧羽田中	散布地	縄文・平安	縄文土器・土師器・須恵器
60	沼尻南	散布地	縄文・平安	縄文土器・土師器・須恵器
61	北鶴 / 木方八丁	城館跡	縄文・中世	縄文土器・壇・複郭・平場
62	北鶴 / 木	散布地	縄文・平安	縄文土器(後・晚期)・石獅・石斧
63	鶴ノ木筋	城館跡	中世	空堀・複郭・古塚・平場
64	鶴ノ木新田	散布地・集落跡	縄文・平安	縄文土器(前期)・土師器・須恵器
65	鶴ノ木新田法師塚	埋葬	中世	壇
66	鶴ノ木新田南	散布地	縄文・平安	縄文土器
67	本宮	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
68	西根板街道古墳群	古墳群	奈良	円墳
69	西根	集落跡	奈良・平安	土師器・古墳文第16集
70	鳥海橋(弥三郎船)	城館跡	平安	土師器・須恵器・郭・堀
71	八ツ口	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
71	上船(古跡・渡瀬跡)	城館跡	中世	平場・堀
72	粗沢城(方八丁)	城館跡	平安	土師器・須恵器・郭
73	土貢前	集落跡	奈良	土師器・須恵器
74	土貢	散布地	奈良	土師器・須恵器・岩垣文第16集
75	膳	集落跡	古墳～平安	土師器・須恵器・フレーク
76	今泉	集落跡	古墳～平安	寺穴住居群・土師器・須恵器 岩垣報告第60集
77	今泉II	集落跡	奈良・平安	土師器・須恵器
78	今泉III	集落跡	奈良・平安	土師器・須恵器
79	喜正坊	集落跡	奈良・平安	土師器
80	佐野館(タテバタチ)	城館跡	中世	平場
81	宿	集落跡	奈良	土師器・須恵器
82	富田(A)	散布地	縄文・平安	縄文土器・土師器・須恵器
83	舞子鼻	散布地	平安	土師器・須恵器
84	白浜寺	集落跡	平安	土師器・須恵器
85	長園	集落跡	平安	土師器・須恵器
86	樺代堂	集落跡	奈良	土師器
87	舞占	集落跡	縄文・平安	須恵器
88	白井坂I	城館跡	中世	空堀・複郭・岩垣文第218集
89	白井坂II	城館跡	中世	空堀・複郭・岩垣文第218集
90	吹張I	散布地	平安	土師器
91	吹張II	散布地	平安	土師器
92	杉本II	集落跡	平安	土師器・須恵器
93	東大畑II	散布地	平安	須恵器
94	東大畑I	集落跡	縄文・平安	土師器・須恵器・石錐
95	庵堂	散布地・祀社	平安	土師器
96	下河原跡	散布地・城館跡	縄文・中世	縄文土器(晚期)・平場
97	東館I	散布地・城館跡	中世	陶器
98	東館II	散布地	平安	土師器
99	仙人西	集落跡	平安	土師器・須恵器
100	佐野原	集落跡	縄文・平安・江戸世	縄文土器・土師器・須恵器・石器
101	利山屋敷	散布地・城館跡	縄文・中世	縄文土器(晚期)・石器・平場
102	難堂II	集落跡	奈良	岩垣文第41集
103	東大畑	集落跡	平安	土師器・須恵器・フレーク 岩垣文第44集
104	仙人東	集落跡	弥生・平安	土師器・須恵器・陶器 岩垣文第230集
105	沢田	散布地	縄文・平安	土師器・フレーク 岩垣文第230集
106	東駿治屋	散布地	縄文・平安	土師器・フレーク

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
107	蟹沢	集落跡	平安	須恵器
108	南桜沢	散布地	平安	土師器・須恵器
109	高谷	散布地	縄文・平安	土師器・須恵器・フレーク
110	下河原釜石	散布地	平安	土師器
111	谷中	散布地	平安	土師器・須恵器
112	惣前町	散布地	弥生・平安	土師器
113	杉ヶ崎	散布地	縄文・平安	土師器・フレーク
114	横枕	散布地	縄文・平安	土師器・須恵器・フレーク
115	中前田	集落跡	弥生・平安	弥生土器・土師器・フレーク
116	館(跡呂井跡)	城館跡	中世	土師器・須恵器
117	石橋	集落跡	平安	土師器・須恵器
118	東袖ノ口	集落跡	平安	土師器
119	久根妻	散布地	余良	非ロクロ土師器・須恵器
120	北田 I	集落跡	平安	須恵器
121	北田 II	散布地	弥生・余良・平安	土師器・鉄滓
122	北田 III	散布地	弥生・平安	弥生土器・内巻土器
123	野田	散布地	縄文・平安	土師器・石礫
124	常磐広町	集落跡	弥生・奈良・平安	弥生土器・石礫・アメリカ式笛玉
125	常磐小学校	散布地	余良	土師器・須恵器
126	跡呂井中陣場	城館跡	奈良・中世	土師器・須恵器
127	跡呂井	集落跡	奈良	土師器・須恵器
128	杉の堂	散布地	縄文・平安	縄文土器(後・晚期)
129	沼尻	散布地	平安	土師器
130	大学 I	集落跡	縄文・平安	土師器・須恵器・フレーク
131	大学 II	散布地	縄文・平安	土師器・フレーク
132	垣ノ内丘	散布地	縄文・平安	縄文土器・土師器・フレーク
133	迎塚	集落跡	古墳・奈良	土師器・須恵器
134	勝剣	散布地	平安	土師器・須恵器
135	道本	散布地	平安	土師器・須恵器
136	久田	散布地	平安	土師器・須恵器
137	元宿	散布地	平安	土師器・須恵器
138	南久田	散布地	平安	土師器・須恵器
139	鶴鉾西	散布地	縄文・平安	土師器・須恵器・フレーク
140	水沢城(雲寄)	城館跡	中世	
141	水沢女子校敷地	散布地	平安	土師器・須恵器
142	西大畠	散布地	古墳・平安	堀穴住居跡・土師器・須恵器 帰報告第60集
143	西船	散布地	平安	土師器
144	稻荷田	散布地	平安	土師器
145	築跡(塙古館)	城館跡	中世	平場
146	西光田 II	集落跡	平安	土師器・須恵器
147	西光田 III	散布地	平安	土師器
148	西光田 I	散布地	平安	土師器・須恵器
149	寺領	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
150	石川	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器 帰報告第61集
151	水山	散布地	平安	土師器・須恵器
152	後田	集落跡	平安	土師器・須恵器
153	要害館	城館跡	中世	平場
154	足袋針 II	集落跡	平安	土師器・須恵器
155	大明神 II	集落跡	平安	土師器・須恵器
156	足袋針 I	集落跡	縄文・平安	縄文土器・土師器・須恵器
157	木杉	散布地	平安	土器
158	浅野	散布地	縄文・古代	縄文土器(前・中期)・土師器・須恵器・土偶
159	鶴川 II	散布地	縄文・平安	縄文土器・土師器・須恵器・フレーク

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
160	鶴田古墳群	古墳群	奈良	
161	瀬川	集落跡	绳文・平安	縄文土器(前・晚期)・土師器・須恵器
162	鶴出I	散布地	平安	土師器
163	西Ⅲ I	集落跡	平安	縄文土器・土師器・須恵器
164	南矢中	集落跡	平安	土師器・須恵器 県報告第60条
165	南矢中II	集落跡	平安	土師器・須恵器
166	北畠	集落跡	绳文・平安	縄文土器・土師器・須恵器
167	高原敷	集落跡	平安	土師器・須恵器
168	西田II	集落跡	平安	土師器・須恵器
169	前谷地	集落跡	平安	土師器・須恵器
170	福原	集落跡	平安	土師器・須恵器
170	寿安館(御原館)	城館跡	中世	平場
171	神谷地 II	散布地	平安	土師器・須恵器
172	神谷地 III	集落跡	平安	土師器・須恵器
173	神谷地 I	集落跡	平安	土師器・須恵器 県報告第60条
174	神谷地 IV	集落跡	绳文・平安	土師器・須恵器・フレーク
175	小山崎	散布地	绳文・平安	縄文土器(中期)・土師器・須恵器
176	梨畑	散布地	绳文・平安	縄文土器(中期)・石器
177	片子沢館	城館跡	中世	平場
178	龍ヶ馬場	散布地	绳文・平安	縄文土器・土師器・須恵器
179	附野森	散布地	绳文・中世	縄文土器・陶磁器
180	須江	集落跡	平安	土師器・須恵器
181	須江館(四郎館)	城館跡	中世	
182	上野	散布地	平安	土師器・須恵器
183	雷神 I	集落跡	平安	土師器・須恵器
184	真城が丘田地	集落跡	平安	土師器・須恵器・砥石・炭化米・葉、クルミの実
185	浜田	散布地	绳文・平安	縄文土器・土師器・須恵器
186	大恒	集落跡	平安	土師器・須恵器
186	堤尻館(堤尻沢館)	城館跡	中世	平場
187	高田	集落跡	平安	土師器・須恵器
188	堤尻下	散布地	中世	陶器
189	北余目	散布地	平安	土師器
190	垣ノ内 I	散布地	中世	陶器
191	林前 I	集落跡	平安	土師器・須恵器
192	林前館	城館跡	中世	单郭
193	上野体城(籠)	城館跡	中世	飞塀・土器・模郭・平場
194	林前南館	城館跡	绳文・平安	土師器・石器
195	林前 II	散布地	平安	土師器・須恵器
196	水の口	散布地	平安	須恵器
197	向田	散布地	平安	土師器
198	北野 I	散布地	平安	土師器・須恵器
199	金田 I	集落跡	平安	土師器・須恵器
200	北野 III	集落跡	平安	土師器・須恵器
201	北野 II	集落跡	平安	土師器・須恵器・陶器
202	大内田前	散布地	平安	土師器・須恵器
203	寺西南	散布地	平安	土师器・須恵器
204	小水の口 I	散布地	平安	土師器・須恵器
205	水ノ口前東	散布地	平安	土師器
206	姉体平堂 II	散布地	平安	土師器・須恵器
207	姉体車堂 III	散布地	平安	土師器・須恵器
208	元天神前 II	散布地	平安	土师器・須恵器
209	上島	散布地	平安	
210	北白山 I	散布地	平安	土师器・須恵器
211	中島	散布地	绳文・古代	縄文土器(前・中期)・石器・装饰具・土师器



第2図 周辺の遺跡図

## <参考文献>

- 阿部 一 1997 『明後沢遺跡』岩手県立埋蔵文化財センター所報「わらびて」No.76  
伊藤 博幸 1980 『仙沢城と古代村落』日本史研究第215号  
1997 『律令期村落の基礎構造』岩手史学研究第80号  
1998 『北上盆地南辺の様相』第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料  
1998 『後半期の集落』岩手考古学第10号  
岩手県教育委員会 1980 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書IV(宮地遺跡)文化財報告書第48集  
1980 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書VI 文化財報告書第50集  
1981 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XII(水沢地区)文化財報告書第60集  
1981 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XIII(石田遺跡)文化財報告書第61集  
岩手県埋蔵文化財センター 1981 全ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書I 文化財報告書第18集  
1982 全ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書II 文化財報告書第94集  
1982 全ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書III 文化財報告書第41集  
岩手県文化振興事業団 1996 「沢田・仙人東遺跡発掘調査報告書」 文化財報告書第230集  
埋蔵文化財センター 1997 白井坂I・II遺跡発掘調査報告書 文化財報告書第248集  
金ヶ崎町教育委員会 1992 永徳寺遺跡 文化財報告書第26集  
水沢市教育委員会 1977 起沢城跡 -昭和51年度発掘調査概報--  
1979 林前遺跡発掘調査報告書 文化財報告書第3集  
1981 西光州遺跡 文化財報告書第5集  
1982 廉徳遺跡群詳細分布調査報告書 文化財報告書第9集  
1985~1998 水沢遺跡群範囲確認調査  
文化財報告書第14~16、18、19、21、22、25、29、30、31、32集  
水沢市埋蔵文化財 1997 杉の堂遺跡群 文化財報告書第9集  
調査センター

## 4. 基本層序と検出、出土状況

本遺跡の基本層序は次のとおりである。

- I (u) 層 10YR3/2~2.5Y3/1黒褐 粘性、縮まりなし 炭粒を含む 翳作土 あるいは客土  
I (l) 層 10YR2/2~3/2黒褐 粘性あり 縮まりなし 旧糞作土  
II 層 10YR3/1黒褐~2/1黒 粘性あり 縮まりややあり ところにより円礫10%、黄褐色粒3%程  
含む  
III 層 10YR3/3~7.7YR3/1黒褐 粘性、縮まりあり 1~3cm大の小礫を3~5%含む 漸移層  
IV 層 10YR5/8黄褐 粘性、縮まりあり 糜を3~5%含む 基盤層  
V 層 10YR5/8黄褐 粘性なし 縮まりあり 段丘礫層 4層の下位層で糜を40%含む  
VI 層 砂層

ほぼこのような堆積状況であるが、地点によって削平を受けており、2区-1と2区-2の間では表土除去後、IV層が露出する。II層は土に段丘の端部斜面に堆積しており、標高が下がるほど厚く堆積する傾向にある。11区北端付近は小河川の氾濫源であり、砂礫層が堆積している。また、6区北端は比較的新しいと見られる水田跡で、粘性のある泥層が堆積していた。基本層序には載せなかったが、2区-2の中央付近では暗褐色の鶴文土器を包含する層が薄く堆積している。

遺構は主にII層が堆積する個所ではII層、堆積しない個所ではIII層上で検出されたが、2区-2南半のようにV層で検出されたものもある。遺物はI層からII層及びIII層上の包含層から出土している。

### III 調査方法と整理方法

#### 1. 野外調査

##### (1) 調査区の設定（第4図）

今回の調査では県道の両側を細く、長く調査することとなった。そのため、広く面的に掘ることができないこと、グリットを設定するにも幅がないこと、排水を調査区外に置けないため、一挙に表土をはぐことができないことなどの制約があった。そこでこれらの点を考慮し、用地1件ごとに調査区とした。ただし2区は長大に渡り、1つの区として処理するのが困難と思われたので調査順ごとに南から2区-1、2区-2、2区-3と分割した。

遺構の実測や遺物の取り上げなどで必要なため、調査区に平面直角座標10系に合わせて次の2点を求めた。

基1 X = -93,600.000 Y = 27,750.000 H = 45.972m

基2 X = -93,600.000 Y = 27,725.000 H = 46.482m

これらの2点を結ぶ点を調査区の基準線とした。

##### (2) 遺構の呼称

遺構の種類ごとに検出順に番号と現場でつけた呼称であることがわかるようにFの字をつけて1F土坑、10F住居跡のように呼んだ。報告の際には時期順及び調査区順に番号を付け直し、1号土坑、2号土坑のように呼んでいる。

##### (3) 粗掘り

今回の調査では、上層の堆積状況や遺構の検出面を知るため、あらかじめ手振りでトレントを数か所入れている。I層が厚く、II層から遺物が含まれる状況だったので、I層を重機で除去した。そのためI層中の遺物は回収できなかったものも多いと思われる。その後人力によって、必要に応じ、II層、III層を振り下げた。

##### (4) 精査と実測

遺構の精査は住居跡や大型の土坑は4分法、土坑、焼上遺構は2分法を原則としたが、検出状況などによって、適宜方法を変えている。また、柱穴状土坑は精査時には2分したが、埋土の状況を文章で記録するにとどめ、断面図の図化はしていない。遺構の平面実測は簡易やり方測量で行った。平面図は基準線を元に1m間隔の水糸を遺構全体に張り、それを測量基線として実測した。断面図は水平水糸を張って、それを測量基線とした。

実測図の縮尺は平面図、断面図とも20分の1を原則とした。基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

##### (5) 遺物の取り上げ

遺構内出土遺物は層位が確認できる部分（トレントや半蔵した残りの部分など）では層位ごとに取りあげたが、ほとんどは埋土あるいは埋土上層、下層、床面（底）の別で取り上げた。遺構外出土遺物は調査区、基本層序ごとにとりあげた。

##### (6) 写真撮影

野外での写真撮影は35mm判2台（モノクロ、カラーリバーサル）と6×7判（モノクロ）1台を使用し、遺構の平面・断面と遺物の出土状況を中心に撮影した。調査期間が日没時間が短くなる8月中旬から約2ヶ月

間であったことや北上川に近く、秋口に霧が発生しやすいこともあって天候不順の際も作業の進行上撮影を行わなければならなかつたので、絞り、光量などの点で良好な条件下での撮影ができなかつた。

## 2. 室内整理

### (1) 遺物の処理

遺物は水洗、ラベルの記入、接合復元、土器拓影図作成、実測、トレース、計測、写真撮影、遺物図版作成の順に行った。石器の計測値は最大長・最大幅・最大厚を測定し、欠損している石器の数値はカッコ内に記した。

### (2) 遺物図版

図版は遺構から出土したものは遺構別に掲載した。遺構外から出土したものは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、石器、石製品に分類して掲載した。縮尺は磁器を除く土器、陶器類、疊石器、石製品、井戸枠を除く木製品が3分の1、磁器、鉄器、剥片石器が2分の1、井戸枠5分の1を原則とし、それぞれ図中にスケールを付した。

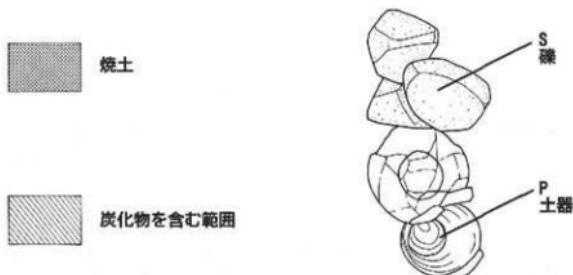
土師器、須恵器について48ページ遺物凡例のような呼称と表現方法を用いた。疊石器の磨き面には凡例のようにスクリーントーンを貼った。磨製石器と磨石類の磨ったことによって生じた稜線は実線で示し、擦痕が見えるものは実測図に入れた。

### (3) 遺構図面の処理

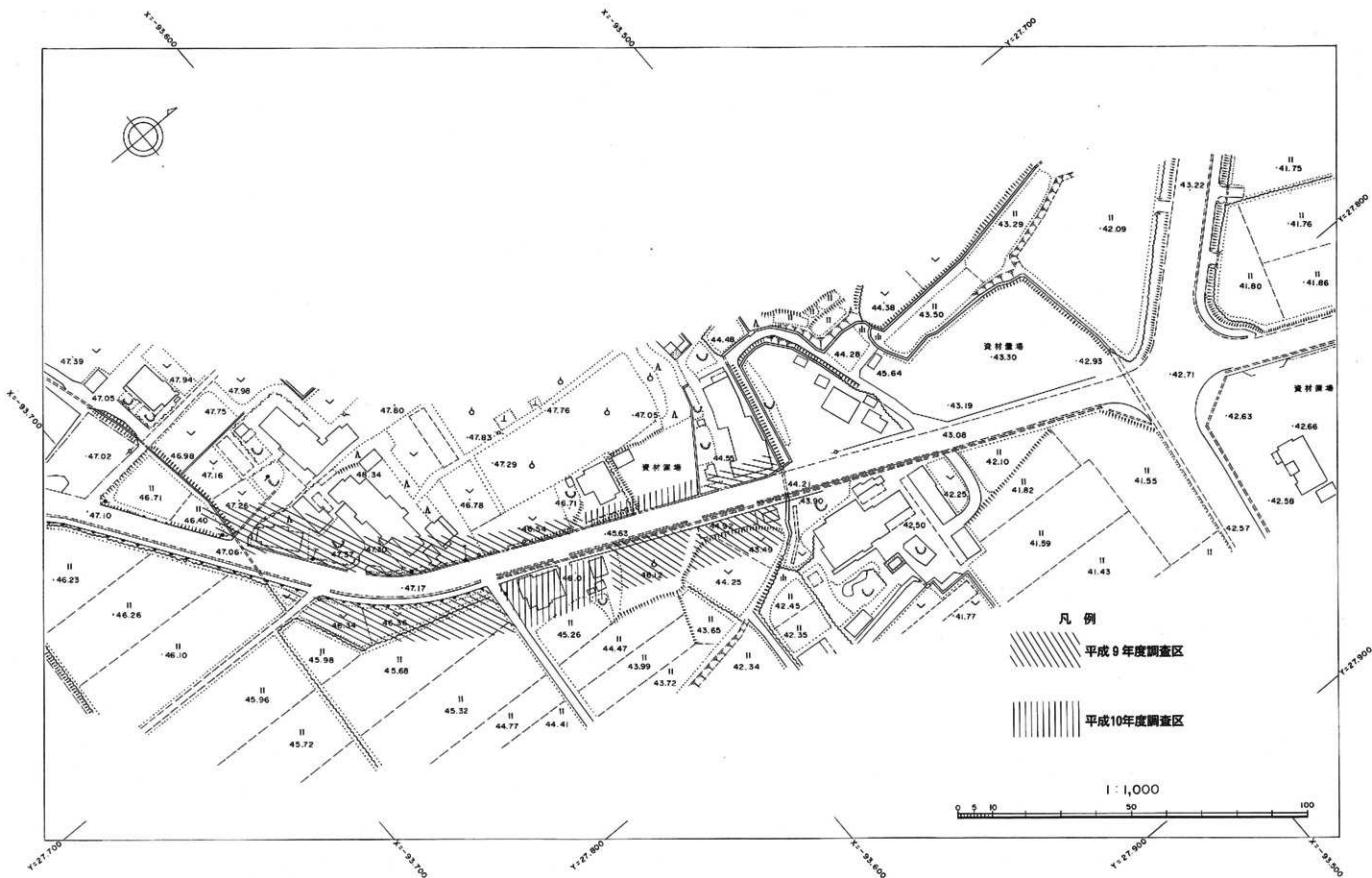
図面は第1原図の点検、修正、合成、トレース、遺構図版の順に整理した。焼土、炭化物には下記のようなスクリーントーン、疊、土器は下のようにS、Pで表した。

### (4) 写真図版

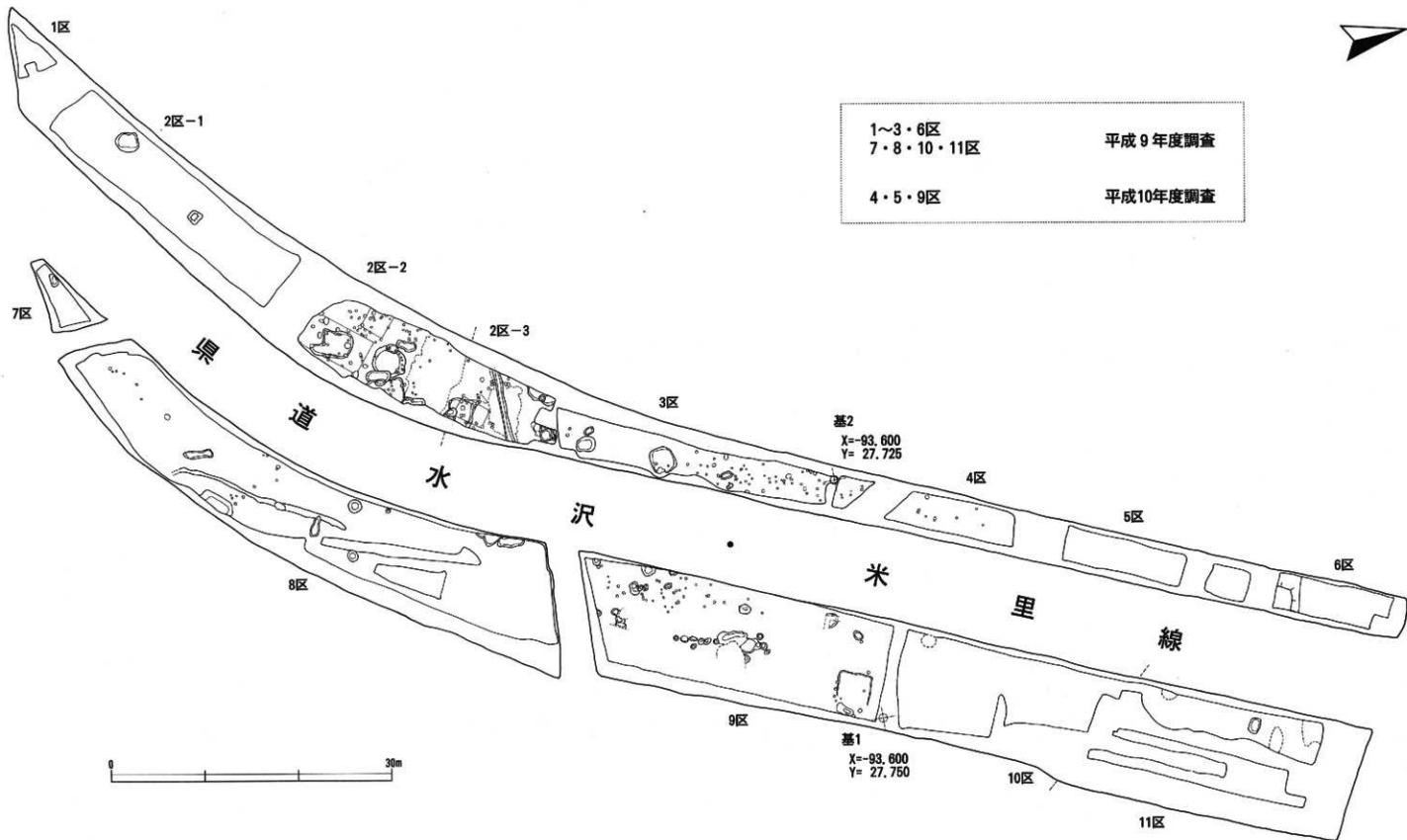
野外調査時に撮影した写真と遺物の写真で、写真図版を作成した。写真図版の個々の遺物番号は、遺物図版の番号と一致している。縮尺は各写真とも不定縮尺である。



遺構図 凡例



第3図 遺跡地形図



第4図 遺構配置図

## IV 平成9年度調査

### 1. 遺構

平成9年度調査で検出された遺構は縄文時代の堅穴住居跡1棟、古代の堅穴住居跡6棟、中世の堅穴建物跡2棟、中世以降の掘立柱建物跡3棟、そのほか住居状遺構1棟、井戸跡1基、土坑22基、カマド状遺構1基、集石1基、焼土遺構2基、溝跡2条である。

#### 1号住居跡（第5図、写真図版2）

＜位置・検出状況＞2区-2中央に位置する。東側が2号住居跡、南東が6号土坑、北西が4号土坑、3号土坑と重複し、本遺構の方が古い。検出面はⅢ層である。

＜平面形・規模＞円形を呈し、径3.64×3.52m、壁高23cmである。

＜埋土＞6層に細分され、炭を含む黒褐色土が主体である。

＜床面＞IV層に形成され、平坦で締まっている。

＜壁＞床面からやや外傾して立ち上がる。

＜柱穴・その他＞壁際には深さ10~20cmほどの壁溝が回る。柱穴は溝の中から検出された。主柱穴と思われるものは18基で、径が11~40cm、深さ15~35cmを測る。そのほか小規模で浅い柱穴を含めると52基を数える。

＜炉＞検出されなかった。

＜出土遺物＞（第13図、写真図版18）1はⅣ層から出土した深鉢の体部下半である。2は床面から出土した石鐵、3は埋土中位から出土した磨石である。そのほか小片で図化に至らなかったが、埋土上層から燃り糸文の施された縄文土器、埋土、周溝、床面から縄文土器が出土した。

＜時期＞出土遺物が少ないため明確ではないがⅣ層出土の土器から縄文時代前期中葉～後葉に属する可能性が高い。

#### 2号住居跡（第5図、写真図版3）

＜位置・検出状況＞2区-2中央東側に位置する。1号住居跡、5号土坑、6号土坑と重複する。1号住居跡より新しく、5号土坑、6号土坑より古い。3号住居跡とも重複しており、本住居跡の方が新しいかと思われるが、確かではない。遺構は調査区外に伸びている。検出面はⅢ層である。

＜平面形・規模＞隅丸方形を呈すると考えられる。計測できる1辺の長さは3.76m、壁高は28cmである。

＜埋土＞炭粒やロームブロックを含む黒褐色土が主体である。

＜床面＞平坦でやや締まる。

＜壁＞やや内湾気味に立ち上がる。

＜柱穴・その他＞柱穴と思われる小土坑が5基検出された。径14~40cm、深さ28~43cmで、2基に径約20cmの柱痕が認められた。埋土は炭やローム粒を含む褐色土や黒褐色土である。そのほかに浅い土坑P6も検出された。

＜カマド＞調査部分では検出されていない。

＜出土遺物＞床面から土師器の壺破片、埋土下層からロクロ使用の土師器で底部の周辺に調整を施した内窓の壺の破片、須恵器壺破片、壺の破片が出土したが、小片で、図化に至らなかった。

＜時期＞出土遺物から平安時代に属すると考えられる。

### 3号住居跡（第5図）

＜位置・検出状況＞2区-2東よりで検出された。ほとんどが調査区外に伸びており、調査部分は西辺のみである。また、上面も壁がほとんど削平されており、精査終了時まで住居跡とはわからなかつた。残存しているのは壁溝と柱穴であるが、柱穴は住居跡に伴わない可能性もある。2号住居跡と重複しており、本遺構の方が古いと考えられるが、断面及び平面では明確に判断できなかつた。検出面はIV層である。

＜平面形・規模＞隅丸の方形を呈する可能性が高く、計測できる辺の長さは2.78m、壁高は最も深いところで10cmである。

＜埋上＞ロームブロックを含む黒褐色土である。

＜床面・壁＞大部分削平を受けており、不明。

＜柱穴・その他＞壁際、壁溝中から4基検出されているが、確実に住居に伴うか明らかでない。径は16~46cm、深さ8~34cmを測る。

＜カマド＞調査部分からは検出されなかつた。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞不明なところが多いが平安時代以降に属すると考えられる。

### 4号住居跡（第6図、写真図版4・5）

＜位置・検出状況＞3区中央付近に位置する。カマドのすぐ東側は県道の側溝埋設のため攪乱を受けている。上面はかなり削平されていると見られる。

＜平面形・規模＞隅丸方形を呈する。辺の長さは2.68×2.58m、壁高は13cmである。

＜埋上＞4層に細分され、ごく細かい炭を含む黒褐色土が主体である。

＜床面＞平坦でやや締るが、あまり固くない。

＜壁＞ゆるやかに内溝して立ち上がる。

＜柱穴・その他＞柱穴は2基しか検出できなかつた。住居の掘り込み外も捜したが確認されていない。2基の柱穴は径26~32cm、深さ15~18cmで、上屋を支える柱としてはやや頗りない感がある。

＜カマド＞東壁の南寄りから検出された。黒褐色土を固め、円礫を貼りつけたり、芯材として構築している。焼上の形成は薄く、火を受けてややカリッとしている程度である。煙道は道路側溝埋設により、削平されているためか検出できなかつた。燃焼部分は浅い掘り込みとなっており、須恵器とロクロ使用の土師器の小型のカメが底面を底にして置かれていた。支脚として使用していたものと考えられる。

＜出土遺物＞（第13、14図、写真図版18）カマドから須恵器の壺(4)、土師器の小型の壺(5)、カマド袖上から須恵器の高台付杯(6)、埋土から長颈瓶(9)、広口壺(8)が出土した。そのほか小片で図化に至らなかつたが、壺土中層から内黒の土師器壺破片、須恵器、壺、甕、床面から土師器壺、須恵器壺の破片が出土している。カマド内からは須恵器の蓋、壺の破片が出土した。

＜時期＞出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

### 5号住居跡（第6図、写真図版5・6）

＜位置・検出状況＞8区北西端に位置する。6号住居跡と重複しており、本住居の方が新しいと見たが、ひとつ住居の可能性もある。住居の北半は調査区外に伸びている。上面は現代の畑の畝などで、かなり削平されている。検出面はII層である。

<平面形・規模>隅丸方形を基調としていると思われる。1辺の長さは2.56m、壁高は5cmである。

<埋土>3層に細分され、焼土粒、炭粒を含む黒褐色土が主体である。

<床面>IV層上面に形成され、あまり固くない。貼り床はない。

<壁>外傾して立ち上がる。

<柱穴・その他>2基検出された。幅25~28cm、深さ18cmである。

<カマド>カマドの袖の一部と思われるものが検出された。北東側壁に作られているようである。粘土を多く含む黒褐色土で締まりがある。

<出土遺物>(第14図、写真図版18)南側の埋土下位からロクロ使用の土師器の壺の破片(11)、カマド袖上と思われる土の上部から土師器の壺の破片(10)が出土した。そのほかに床面から内黒の鉢の破片、カマドと思われる粘土の周辺からロクロ使用の甕の破片が出土した。

<時期>出土した土器から平安時代に属すると考えられる。

#### 6号住居跡（第6図、写真図版5・6）

<位置・検出状況>8区北西端に位置する。5号住居跡と重複しており、本住居跡の方が古いと思われる。住居の西側は調査区外に伸びており、北側は道路側溝埋設時の掘り込みと烟の歯によって破壊されている。上面はかなり削平されているらしい。検出面はII層である。

<平面形・規模>削平と擾乱のため不明。壁高は7cmである。

<埋土>2層に細分され、炭粒や焼土粒を含む黒褐色土が主体である。南側で床から3cmほど浮いて厚さ3cmの焼土が、北側の崖際から柱状に残る厚さ8cmの焼土が検出されている。いずれも現地性の焼土であることから、本住居跡は火を受けて焼けた可能性がある。

<床面>平坦であるが、あまり固く締まっていない。貼り床はない。

<壁>外傾して立ち上がる。

<柱穴・カマド・その他>柱穴、カマドは調査部分では検出されなかった。壁溝もない。

<出土遺物>小片で図化に至らなかったが、床面からロクロ或形で内面を黒色処理している土師器壺の破片が出土した。

<時期>切り合い関係から平安時代に属すると考えられる。

#### 7号住居跡（第6図、写真図版6・7）

<位置・検出状況>2区-3北西隅に位置する。大部分が調査区外にあると見られ、床面すれすれまで削平されている。検出面はIII層である。

<平面形・規模>調査区外に伸びているため、不明である。計測できる最大の径は3.28m、壁高は24cmである。

<埋土>ローム粒、炭粒を含む黒褐色土の单層である。

<床面>貼り床が施されている。やや凹凸があるが、締まりがあり、固い。大小のロームブロックを含む黒褐色土を貼って床としている。

<壁>やや内湾気味に立ち上がる。

<柱穴・その他>柱穴と思われる小土坑が1基(P1)、土坑(2P)が1基検出された。いずれも床面から掘り込まれている。壁溝はない。

<カマド>調査部分では検出されなかった。

<出土遺物>埋土から土師器甕、内黒の壺の破片、P 2から土師器甕の破片、貼り床から土師器甕、甕の破片が出土している。

<時期>出土遺物から平安時代に属すると考えられる。

#### 1号堅穴建物跡（第7図、写真図版8）

<位置・検出状況>2区-2南側に位置する。1号掘立柱建物跡と重複するが柱穴と本建物跡が切り合っていないため、新旧関係は不明である。検出面はIV～V層である。

<平面形・規模>隅丸の長方形を呈し、南側に張り出しをもつ。辺の長さは3.14（張り出しを含めると4.23m）×2.78m、壁高16cmである。

<埋土>2層に細分されるが、やや砂質の、礫を含む暗褐色土が主体である。この土はI層にかなり類似しており、1号住居跡や2号住居跡に比して、締まり具合や色調などの点において新しい印象がある。また、礫が比較的多く含まれているのは礫層を掘り込んでいるためと思われる。

<床面>礫層であるV層に形成され、小さい凹凸があるが、平坦で締まっている。

<壁>崩冠内溝して立ち上がる。張り出しの部分は非常にゆるやかに立ち上がる。

<柱穴・その他>主に壁際に大小の柱穴が並び、ごく小さいものも含めると31基を数える。これらのうち、対応する柱穴はP 1とP 22、P 5とP 22、P 10とP 20が考えられる。

<カマド、炉>いずれも検出されていない。

<出土遺物>ない。

<時期>遺物が出土していないので、不明であるが、遺構の形態から中世の堅穴建物跡と考えられる。

#### 2号堅穴建物跡（第7図、写真図版8、9）

<位置・検出状況>2区-3南側に位置する。南東部分は調査区外に伸びている。7号土坑、8号土坑と重複しており、木造構の方が新しい。また、3号掘立柱建物跡とも重複しており一部の柱穴は木造構と切り合っている（3号掘立柱建物跡P 121）が、新旧関係を明らかにすることはできなかった。本造構は当初、かなり削平された埋土をIIと思って取り除いてしまい、その結果壁溝を溝の切り合いとして精査を開始したため、新旧関係に不明な点が残ってしまった。

<平面形・規模>若干ゆがんだ隅丸形を基調としているようである。南側に張り出し（？）を有する。辺の長さは3.3m、壁高25cmである。

<埋土>ローム粒を少量含む黒色土である。

<床面>平坦である。

<壁>外傾して立ち上がる。張り出しの部分はゆるやかに立ち上がる。

<柱穴・その他>壁際から7基検出された。径19～34cm、深さ19～29cmを測る。

<カマド、炉>カマドは調査部分からは検出されなかった。北壁寄りの床面に地床炉が検出された。焼土の厚さは7cmである。炉の北側は浅い掘り込みがあり、埋土は固い。当初貼り床と考えたが、炉の一部であったかもしれない。

<出土遺物>ない。

<時期>出土遺物はないが、遺構の形態から中世に属すると考えられる。

### 1号掘立柱建物跡（第8図）

＜位置・検出状況＞2区-2南側に位置する。1号堅穴建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。本建物は南東側に伸びるかもしれない。

＜平面形・規模＞桁行3間（以上？）（総長6.98m-西）、梁行1間（以上？）（4.0m-東）の建物である。建物の軸方向はN-41°-Eである。

＜平均柱間寸法＞桁行2.2m（7.3尺）、梁行4.0m（13.2尺）である。桁行はP9-P32間が3.55m、P62-P30間が3.4mと幅広となる。

＜出土遺物＞P10から土師器の小破片が、P5からロクロ使用の土師器の臺口縁部、底部、体部の破片が出土した。

＜時期＞遺構に真に伴うような出土遺物はないので不明な点が多いが、中世以降の建物跡の可能性が高い。

### 2号掘立柱建物跡（第8図）

＜位置・検出状況＞2区-2に位置する。建物の西側は調査区外に伸びる可能性が高い。

＜平面形・規模＞桁行1間（以上？）（1.45m-北）、梁行1間（2.45m-東）の建物である。建物の軸方向はN-50°-Wである。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞出土遺物がないので不明な点が多いが、中世以降の建物跡の可能性が高い。

### 3号掘立柱建物跡（第8図）

＜位置・検出状況＞2区-3南側に位置する。2号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。建物の東側及び南側に伸びる可能性が高いが調査区外であったり、削平されてたりするため、不明である。建物の軸方向はN-37°-Eである。

＜平面形・規模＞桁行2間（以上？）（総長3.45m-西）、梁行1間（以上？）（2.15m-北）の建物である。

＜平均柱間寸法＞桁行1.59m（5.2尺）、梁行2.15m（7.1尺）である。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞出土遺物がないので不明な点が多いが、中世以降の建物跡の可能性が高い。

### 1号井戸跡（第8図、写真図版9）

＜位置・検出状況＞8区中央に位置する。

＜平面形・規模＞円形を呈し、径は1.47×1.46m、深さ2.38mを測る。底面では円形というより隅丸の方形に近い。

＜埋土＞3層に細分される。上層は礫が少ないが3層は人頭大の礫を多く含む土で、埋め戻したものと思われる。

＜底面＞四隅に10~15cmの角柱を立て、横木を柱の外側に渡して井戸枠としている。横木は残存状態が悪く、実測できたのは2本のみである。

＜壁＞底から中位までは直に立ち上がり、後上端まで徐々に開く。

＜柱穴・その他＞周辺に柱穴を捜したが見つからなかった。

＜出土遺物＞（第15、16、17図、写真図版19）主に1層から土師器、須恵器が出土している。同層からは13

世紀の所産と見られる白磁の皿と見られる破片が出土した。底面からは井戸枠に使用されたと思われる材木の跡片が出土し、投げこまれたような遺物はなかった。そのほか須恵器の長頸瓶の破片、壺、土師器の壺破片が出土した。

＜時期＞出土遺物は主に埋め戻しと思われる1層からのもので、他に遺物はないので、特定できないが、少なくとも13世紀以降のものと思われる。

#### 1号住居状遺構（第9図、写真図版9）

＜位置・検出状況＞8区南東に位置する。遺構の南東側は調査区外に伸びている。

＜平面形・規模＞隅丸の方形か長方形を呈すると推測される。1辺の長さは3.68m、壁高は55cmを測る。

＜埋上＞3層に細分され、ロームブロックを含む黒褐色土が主体である。

＜底面＞平坦で、締まっている。

＜壁＞底面から内湾気味にゆるやかに立ち上がる。

＜出土遺物＞埋土から上部岩盤、体部下端に調整が施された内黒の壺の破片が出土したが、小片で図化に至らなかった。

＜時期＞出土遺物から平安時代に属する可能性が高い。

#### 1号カマド状遺構（第8図、写真図版9・10）

＜位置・検出状況＞8区中央に位置する。1号溝跡と重複し、本遺構が新しい。検出面はII層である。

＜平面形・規模＞やや細長い8の字形状を呈する。北側のかの本体と見られる部分は0.73×約0.8m、前庭部と見られる部分は1.03×約1.45m、全体では2.25×1.03m、深さ23cmである。

＜埋上＞埋土は締まりのない暗褐色土である。底面は使用面と思われる焼土形成面と、振り方に別れる。検出面ではが本体と思われる部分にドーナツ状の焼土が検出されたが、断ち割ったところ、崩落したらしいものであることがわかった。おそらく上部構造があったものと考えられる。焼土は主に上端付近と壁の一部、底の一部に形成されている。炉の底部と前庭部にかけて、カーボン層が見られる。前庭部ではその下に粘土が貼られている。

＜底面＞振り方では南側に傾斜するが、使用面では粘土を貼っているため中央部分が最も低い。

＜壁＞やや内湾気味に立ち上がる。

＜柱穴・その他＞柱穴は周辺に検出されなかった。なお、1号溝の中になるが、炉の部分の東側50cmに粘土塊が検出された。本遺構では底面に粘土を貼っていることから、何らかの関連があるかもしれない。

＜出土遺物＞ない。

＜時期・性格＞出土遺物がないことから不明な点が多い。埋土は1号溝と類似しており、溝よりは新しいものの、大きな時期差はないかもしれない。また、形態から製鉄関連遺構の可能性もあると考え精査したが、鐵滓、鍛造剥片など、関連する遺物も出土しなかった。時期も遺物がないことから不明であるが、検出面から平安時代以降に属すると考えられる。

#### 1号土坑（第8図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞8区南側に位置する。検出面はII層である。検出時は馬蹄形の焼上の南北に小土坑が団子状に連なっているように見えたが、精査の結果細長いひとつの土坑であることがわかった。土坑の中央部

分に燒土の形成があることから、炉として報告するべきか迷ったが、他に特別な構造は認められないことからここに報告することとした。あるいは焼き口の2つあるカマド状遺構かもしれない。

<平面形・規模>細長い長円形を呈し、径は $3.02 \times 0.71$ m、深さ25cmを測る。

<埋土>7層に細分され、燒土粒、炭粒を含む黒色土が主体である。埋土中位にカーボン層が形成され、中央部分の壁面に沿って、燒土が馬蹄形に形成されている。この燒土は比較的薄いものであるが、現地性の燒土であり、中央で火が焚かれたことは間違いないだろう。

<底面>平坦である。

<壁>内湾して立ち上がる。

<その他>その他の施設はない。

<出土遺物>（第15図、写真図版19）燒土の下の4層からロクロ使用の土師器の小型の壺口縁部、須恵器甕体部破片(18)、aからロクロ使用の甕の破片、bから甕の底部、cから土師器底部、ロクロ仕様の土師器の小型壺口縁部破片が出土した。

<時期>遺物の年代観から平安時代以降に属すると考えられる。

## 2号土坑（第9図、写真図版11）

<位置・検出状況>2区-1南側に位置する。この付近は段丘の端部にあたり、南東側に向かったゆるやかに傾斜し始める地点である。

<平面形・規模>ややいびつではあるが、隅丸の長方形を呈する。辺の長さは $2.46 \times 1.76$ m、深さ24cmである。

<埋土>4層に細分され主に斜面上方から流れ込んだ炭粒やローム粒を含む黒褐色土、及び暗褐色土が主体である。

<底面>平坦である。

<壁>北側はゆるい段を持つ。内湾気味に立ち上がる。

<柱穴・その他>検出されなかった。

<出土遺物>埋土から土師器甕の底部が出土した。

<時期>出土遺物が本遺構に伴うかわからないが、平安時代以降に属すると考えられる。

## 3号土坑（第9図、写真図版11）

<位置・検出状況>2区-2中央に位置する。4号土坑、1号住居跡、P4と重複する。4号土坑、1号住居跡より新しく、P4より古い。

<平面形・規模>隅丸の長方形を呈し、辺の長さは $2.24 \times 1.01$ m、深さ14cmを測る。

<埋土>ローム粒を含む黒褐色土の単層で、一気に埋め戻したような土である。

<床面>平坦である。

<壁>やや内湾気味に立ち上がる。

<副穴・その他>ない。

<出土遺物>埋土から土師器甕の破片が出土した。

<時期>出土遺物から平安時代に属する可能性が高い。

#### 4号土坑（第9図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞2区-2中央に位置する。3号土坑、1号住居跡と重複する。3号土坑より古く、1号住居跡より新しい。

＜平面形・規模＞長円形を呈し、径1.24×0.76m、深さ34cmを測る。

＜埋土＞3層に細分され、ローム粒、炭粒を含む黒褐色土が主体である。

＜床面＞やや凹凸がある。

＜壁＞外傾して立ち上がる。

＜副穴・その他＞ない。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞埋土が1号住居跡によく似ていることから、縄文時代に属する可能性が高い。

#### 5号土坑（第5図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞2区-2中央に位置する。6号土坑、2号住居跡と重複し、本造構の方が新しい。

＜平面形・規模＞いびつな長円形を呈し、径1.02×0.5m、深さ26cmを測る。

＜埋土＞ローム粒を少量含む黒褐色土の単層である。

＜床面＞内湾する。

＜壁＞内湾気味に立ち上がる。

＜副穴・その他＞ない。

＜出土遺物＞埋土から須恵器壺、甕の破片が出土した。

＜時期＞平安時代と見られる2号住居跡を切っていることから平安時代以降に属すると考えられる。

#### 6号土坑（第9図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞2区-2中央に位置する。1号住居跡、2号住居跡、5号土坑と重複する。1号住居跡より新しく、2号住居跡、5号土坑より古い。

＜平面形・規模＞隅丸で、南北辺が突出する突込長方形を呈する。長辺の長さは2.35m、深さ26cmを測る。

＜埋土＞3層に細分されるが、ロームブロックを多く含んだ暗褐色土で一気に埋め戻したような土である。

＜床面＞平坦である。

＜壁＞やや内湾気味に立ち上がる。

＜副穴・その他＞ない。

＜出土遺物＞埋土から土師器甕破片、内黒の壺破片が出土した。

＜時期＞平安時代に属すると見られる2号住居跡に切られていることや出土遺物から、平安時代と考えられる。

#### 7号土坑（第9図、写真図版12）

＜位置・検出状況＞2区-3南側に位置する。8号土坑、2号堅穴建物跡と重複する。8号土坑より新しく、2号堅穴建物跡より古い。

＜平面形・規模＞楕円形を呈し、径1.17×0.92m、深さ25cmを測る。

＜埋土＞2層に細分され、ローム粒を含む黒褐色土が主体である。

<底面>内湾する。

<壁>内湾して立ち上がる。

<副穴・その他>ない。

<出土遺物>ない。

<時期>出土遺物がないので不明であるが、切り合い関係から中世以前に属すると考えられる。

#### 8号土坑（第9図、写真図版12）

<位置・検出状況>2区-3南側に位置する。東半は調査区外に伸びている。7号土坑、2号堅穴建物跡と重複し、いずれの遺構よりも古い。

<平面形・規模>調査の不手際で、平面図をとらなかったが、円形を基調としている。径は1.1m、深さ30cmを測る。

<埋土>3層に細分され、締まりのない黒褐色土である。

<床面>内湾する。

<壁>内湾気味に立ち上がる。

<副穴・その他>ない。

<出土遺物>ない。

<時期>出土遺物がないので不明な点が多いが、切り合い関係から中世以前に属すると考えられる。

#### 9号土坑（第10図、写真図版12）

<位置・検出状況>2区-3北端に位置する。西側の一部は電柱が埋設してあるため、調査できなかった。10号土坑、11号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。

<平面形・規模>隅丸の方形を呈する可能性がある。辺の長さは1.29m、深さ34cmを測る。

<埋土>ローム粒を含む黒褐色土で、3層に細分される。木の根が多くはびこる。

<床面>平坦である。

<壁>外傾して立ち上がる。

<副穴・その他>ない。

<出土遺物>埋土から土師器、須恵器の小片が出土した。

<時期>不明な点が多いが、出土遺物から平安時代以降に属する可能性が高い。

#### 10号土坑（第10図、写真図版12）

<位置・検出状況>2区-3北端に位置する。9号土坑、11号土坑、13号土坑と重複する。9号土坑より新しく、他の遺構より古い。

<平面形・規模>ゆがんだ隅丸方形を呈する。径は1.33×1.31m、深さ55cmを測る。

<埋土>4層に細分され、ローム粒を多く含む。

<床面>平坦である。

<壁>やや内湾気味に立ち上がる。

<副穴・その他>ない。

<出土遺物>ない。

<時期>不明な点が多いが、埋土の状況が9号土坑に似ている点と、重複関係から平安時代以降に属する可能性が高い。

#### 11号土坑（第10図、写真図版12）

<位置・検出状況>2区-3北端に位置する。10号土坑、9号土坑、12号土坑と重複する。9号土坑、10号土坑より古く、12号より新しい。

西側は調査区外に述べている。そのため全体像は不明で、擾乱の可能性もある。

<平面形・規模>調査区外に伸びていることと、重複しているため不明。径は不明、深さは26cmを測る。

<埋土>ローム粒を含む黒褐色土の単層で、木根がはびこっている。

<床面>平坦である。

<壁>外傾してゆるやかに立ち上がる。

<副穴・その他>ない。

<出土遺物>ない。

<時期>埋土の状況から平安時代以降に属すると考えられる。

#### 12号土坑（第10図、写真図版12）

<位置・検出状況>2区-3北端に位置する。11号土坑、P125、13号土坑と重複する。11号土坑P125より古く、13号土坑より新しい。大部分が調査区外に伸びているため、全体像は不明で、単に擾乱である可能性もある。

<平面形・規模>円形を基調としていると思われる。径は不明、深さは22cmを測る。

<埋土>ローム粒、炭粒を含む黒褐色土の単層である。

<床面>平坦である。

<壁>外傾して急に立ち上がる。

<副穴・その他>ない。

<出土遺物>ない。

<時期>出土遺物がないので不明な点が多いが平安時代以降に属する可能性が高い。

#### 13号土坑（第10図、写真図版12）

<位置・検出状況>2区-3北端に位置する。10号土坑、12号土坑、P125、P126と重複し、いずれの造構よりも古い。土坑の東側、北側は調査区外に伸びている。そのため、全容がよくわからないことから単に擾乱である可能性もある。

<平面形・規模>重複関係や調査区外に述べているため不明である。深さは34cmを測る。

<埋土>炭粒とローム粒を含む黒褐色土の単層である。

<床面>やや凹凸がある。

<壁>内湾気味に立ち上がる。

<副穴・その他>ない。

<出土遺物>ない。

<時期>出土遺物がないので不明な点が多いが平安時代以降に属する可能性が高い。

#### 14号土坑（第10図、写真図版13）

＜位置・検出状況＞3区南側に位置する。P49と重複し、本遺構の方が古い。隣接して15号土坑がある。

＜平面形・規模＞隅丸長方形を呈し、辺の長さは0.96×0.76m、深さ16cmを測る。

＜埋土＞2層に細分されるが、ローム粒、炭粒を含む黒褐色土が主体である。

＜底面＞平坦である。

＜壁＞やや内湾気味に立ち上がる。

＜副穴・その他＞ない。

＜出土遺物＞縄文土器の小片が出土した。

＜時期＞埋土の状況が15号土坑と共通していることからほぼ同時期で、古代～中世の遺構と思われる。

#### 15号土坑（第10図、写真図版13）

＜位置・検出状況＞3区南側に位置する。14号土坑に隣接する。

＜平面形・規模＞隅丸長方形を呈し、辺の長さは1.99×1.44m、深さ26cmを測る。

＜埋土＞ローム粒を含む黒褐色土が主体で2層に細分したが、両者の違いは下層が上層より心もち暗く、締まりがない程度である。・気に埋め戻した土である可能性が高い。

＜床面＞やや内湾気味である。

＜壁＞外傾して立ち上がる。

＜副穴・その他＞ない。

＜出土遺物＞19は埋土上層から出土した古磁碗の口縁部破片、20は埋土から出土した須恵器甕の体部上半の破片である。そのほか埋土上層から内黒の土師器の破片が出土した。

＜時期＞出土遺物から古代～中世に属すると思われる。

#### 16号土坑（第10図、写真図版13）

＜位置・検出状況＞3区中央に位置する。

＜平面形・規模＞長円形を呈し、径は1.08×0.80m、深さ19cmを測る。

＜埋土＞4層に細分される。上層は焼土粒を多く含む黒褐色土、または褐色土で、下層は焼土を含まない黒褐色土である。焼土は2層に最も多く含まれるが、現地性か投げ捨てたものか判然としない。また、土器片も多く含まれている。

＜床面＞平坦である。

＜壁＞内湾して立ち上がる。

＜副穴・その他＞ない。

＜出土遺物＞（第14～15図、写真図版18、19）埋土から12～17が出土した。土師器甕の破片、須恵器長頸壺、壺の破片である。

＜時期＞出土遺物から平安時代に属すると考えられる。

#### 17号土坑（第10図、写真図版14）

＜位置・検出状況＞3区中央に位置する。遺構の南東部分は道路の側溝埋設時に失われている。

＜平面形・規模＞梢円形を呈するとと思われる。径は0.96m、深さ30cmを測る。

<埋土> 2層に細分され混入物のあまりない黒褐色土である。

<底面>内湾する。

<壁>やや内湾気味にゆるやかに立ち上がる。

<副穴・その他>ない。

<出土遺物>ない。

<時期>不明であるが、埋土の状況から古代以降に属する可能性が高い。

#### 18号土坑（第10図、写真図版14）

<位置・検出状況> 7区南側に位置する。遺構北西側の一部は調査区外に伸びている。

<平面形・規模>長円形を呈し、径 $0.61 \times 0.55$ m、深さ25cmを測る。

<埋土> 2層に細分され、ローム粒、炭粒、小礫を含む黒褐色土で埋め戻しの土である。

<底面>やや内湾する。

<壁>内湾気味に立ち上がる。

<副穴・その他>遺構のほぼ中央に $38 \times 29$ cm、深さ22cmの副穴を有する。

<出土遺物>ない。

<時期>不明である。

#### 19号土坑（第11図、写真図版14）

<位置・検出状況> 8区中央よりやや北側に位置する。約2.8m南に1号井戸跡がある。

<平面形・規模>円形を呈する。径は $0.64 \times 0.53$ m、深さ36cmを測る。

<埋土> 5層に細分され、炭粒や微細なローム粒を含む黒褐色土が主体である。1層に土器片が含まれる。

<底面>内湾する。

<壁>内湾気味に急に立ち上がる。

<副穴・その他>ない。

<出土遺物>（第15図、写真図版19）1層から土師器壺、3層から壺、甕の破片が出土した。

<時期>出土遺物から平安時代に属すると考えられる。

#### 20号土坑（第11図、写真図版14）

<位置・検出状況> 8区中央に位置する。

<平面形・規模>円形を呈する。径は $1.10 \times 1.05$ m、深さ22cmを測る。

<埋土> 2層に細分され、ローム粒をごく少量含む粘性に富む黒褐色土が主体である。

<底面>やや内湾する。

<壁>やや内湾気味に立ち上がる。

<副穴・その他>ない。

<出土遺物>ない。

<時期>不明である。

### 21号土坑（第11図、写真図版15）

＜位置・検出状況＞8区北端に位置する。5号住居跡、6号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。遺構の西半分は調査区外に伸びている。検出面はⅡ層下位である。

＜平面形・規模＞円形を基調としていると思われる。径は1.38m、深さ42cmを測る。上端は底面よりやや狭く、オーバーハングしている部分もある。

＜埋土＞3層に細分されるが、ローム粒、炭粒を含む黒褐色土が主体で、全体に褐鉄を含む。

＜床面＞平坦である。上端よりやや広がる部分もある。

＜壁＞北側、東側の壁は直に立ち上がってからいったんやや内傾し、後外反する。南側の壁は直に立ち上がって外傾する。

＜副穴・その他＞ない。

＜出土遺物＞クロロ使用の土師器壺の破片が出土した。

＜時期＞出土遺物から平安時代に属すると考えられる。

### 22号土坑（第11図、写真図版15）

＜位置・検出状況＞11区北側に位置する。検出面はV層である。

＜平面形・規模＞梢円形を呈する。計は1.76×1.19m、深さ10cmを測る。

＜埋土＞ローム粒と礫を含む黒褐色土の単層である。

＜床面＞平坦である。

＜壁＞内溝気味にゆるやかに立ち上がる。

＜副穴・その他＞ない。

＜出土遺物＞（第15図、写真図版19）埋土から土師器壺の破片が出土している。

＜時期＞出土遺物から平安時代に属すると考えられる。

### 1号集石（第11図、写真図版15）

＜位置・検出状況＞8区中央に位置する。1号溝と重複し、本遺構の方が新しい。

＜平面形・規模＞ごく浅い長円形の掘り込みに2~20cm大の凹疊が集中している。掘り込みは径1.28×0.80m、疊の集中の厚さ16cmである。なお、疊は焼けていない。

＜埋土＞2層に細分され、上層は黄褐色の粘土、下層は1号溝と類似する黒褐色土である。火を使用した形跡はない。

＜その他の施設＞ない。

＜出土遺物＞ない。

＜時期・性格＞出土遺物がないので不明であるが、1号溝よりは新しく、平安時代以降に属すると考えられる。性格は不明である。

### 1号焼土遺構（第11図、写真図版15）

＜位置・検出状況＞2区-2中央に位置する。北側に1号住居跡、南に1号竪穴建物跡、1号掘立柱建物跡、西に2号掘立柱建物跡が存在する。本遺構及び1号住居跡の周囲にはⅢ層上に最大厚10cmの黒褐色土～褐色土が堆積している。この層は炭を含んだ締まりのある土で、陶文土器片が出上する。当初住居跡かとも考え

られたが、ベルトを残して掘りあげたところ立ち上がりなどは認められず、ややくほんでいるところに堆積したものであることがわかった。この層を取り除いたところ、焼土の広がりを検出したものである。

＜平面形・規模＞いびつな楕円形を呈する。径は34×22cm、焼土の厚さは4cmである。

＜焼土＞固く締まる現地性の焼土で、レンズ状に堆積している。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞検出された層位から縄文時代に属すると考えられる。

#### 2号焼土遺構（第11図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞2区-2北西に位置する。南側をP40に切られている。この付近は住宅の一部が建っていたところで大きく擾乱を受けており、木造構もかなりの部分が削り取られている。また、周辺には柱穴や床面と思われる固く締まった部分があり、住居跡だった可能性がある。本遺構も住居跡と関連が深いのかもしれない。

＜平面形・規模＞全容は明らかでないが、楕円形を呈すると考えられる。

＜焼土＞部分的に固いブロック状の焼土である。拾てたもののかあるいは崩落したものかもしれない。移地性の焼土である可能性が高い。

＜出土遺物＞土師器壺破片が出土した。

＜時期＞出土遺物や周辺の状況から平安時代に属する可能性が高い。

#### 1号溝跡（第11図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞8区中央から南側にかけて位置する。1号炉跡、1号集石と重複し、本溝の方がいずれよりも古い。南側は調査区外に伸び、北側は徐々に浅くなり、消える。削平されている可能性もある。溝の方向はN-32°-Eである。

＜平面形・規模＞細い帯状を呈し、検出部分の長さは18.8m、幅65cm、深さ14cmを測る。

＜埋土＞2層に細分され、小礫をわずかに含む黒褐色土～黒色土である。

＜底面＞内湾する。

＜壁＞内溝して立ち上がる。

＜出土遺物＞埋土からロクロを使用していない内黒土師器壺の破片、上部器壺破片、須恵器壺破片が出土した。

＜時期＞出土遺物から古代以降の溝であり、新しい遺物が入ってこないことから近代までは下らないものと考えられる。

#### 2号溝跡（第11図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞2区-3から検出された。西側を除き、上面に削平を受けている。両端はそれぞれ調査区外に伸びる。溝の方向はE-0°-Wである。

＜平面形・規模＞帯状の溝で、検出部分の長さ7.8m、幅1.25m、深さ56cmを測る。

＜埋土＞4層に細分されるが、ロームブロックや炭粒を少量含む暗褐色土が主体である。

＜底面＞平坦であるが、やや内湾する。

＜壁＞底面からやや外傾して急に立ち上がり、上端付近で開く。

<出土遺物>埋上から内黒の土師器壺破片、縁を持つクロクロを使用しない土師器壺の破片、土師器甕、須恵器甕が出土した。

<時期>川土遺物から古代以降の清と考えられる。

#### 柱穴状土坑（第12図、写真図版17）

2区-2、2区-3、3区、8区西側から柱穴状土坑が検出された。2区が78基、3区が51基、8区が17基で、計146基である。規模は径が12~87cm、深さ7~59cmである。掘立柱建物跡の一部の可能性もあるが、柱筋を見つけることができなかった。個々の柱穴の計測値は次の表のとおりである。

第2表 柱穴状土坑一覧表

2区

No.	径	深さ	底面標高	柱痕・その他
2	20×18	17	46.19	
6	(36)	24	46.31	
8	54×41	15	46.42	
10	24×22	48	46.11	
11	34×24	27	46.33	あり 径14
12	26×23	19	46.47	
13	19×19	13	46.76	
14	26×24	15	46.72	
15	42×31	69	46.20	
17	42×43	26	46.65	
18	(30)	18	46.65	
19	26×25	15	46.69	
20	(34)	24	46.56	
21	39×30	23	46.43	
22	18×13	14	46.82	
23	29×25	41	46.53	
24	39×24	30	46.64	
25	35×33	18	46.60	
26	28×26	47	46.15	
27	39×25	41	46.24	
28	(34)	41	46.26	
29	28×27	36	46.40	
31	54×54	28	46.60	
33	22×51	25	45.97	
34	26×17	16	46.10	
35	28×22	17	46.04	
37	20×18	12	46.13	
38	30×29	19	46.05	

単位は径・深さがcm、底面標高がm

No.	径	深さ	底面標高	柱痕・その他
39	23×21	12	46.16	
51	34×29	26	46.51	
52	35×33	18	46.60	
53	41×29	23	46.53	
54	26×25	44	46.48	
55	40×37	22	46.35	
56	25×21	22	46.55	
57	25×24	21	46.47	
58	35×24	29	46.38	
59	35×30	19	46.54	
60	(21)	10	46.59	
61	87×65	59	46.33	
63	(32)	16	46.69	
64	43×35	26	46.59	
65	57×48	18	46.64	
66	60×44	29	46.39	
67	30×29	30	46.07	
68	30×27	9	46.28	
69	29×21	31	46.29	
70	18×16	14	46.10	
72	55×45	25	46.27	
74	20×18	16	46.66	
76	20×17	不明	不明	
78	30×26	23	46.57	
84	25×24	9	不明	あり 径16×13
86	26×24	18	46.65	
87	24×15	14	46.58	
90	18×17	12	46.45	

## 2区

No.	径	深さ	底面標高	柱痕・その他
91	30×28	37	46.44	
93	(34)	34	46.53	
94	30×22	31	46.22	
96	(20)	14	45.84	
97	46×36	31	45.96	あり 径21×20
98	16×12	25	45.76	
99	24×20	17	46.01	
100	38×30	46	45.84	
101	40×32	29	46.02	
102	34×31	37	45.95	
104	36×28	20	46.03	あり 径12×10

No.	径	深さ	底面標高	柱痕・その他
105	41×32	43	45.75	
107	32×24	20	46.19	
110	29×27	34	46.04	
112	22×19	20	45.99	
113	18×17	23	45.95	
115	34×26	32	45.70	
116	34×24	25	45.73	
120	30×29	22	45.84	
122	25×24	36	45.65	
124	43×38	30	46.12	
128	50×46	23	44.94	

## 3区

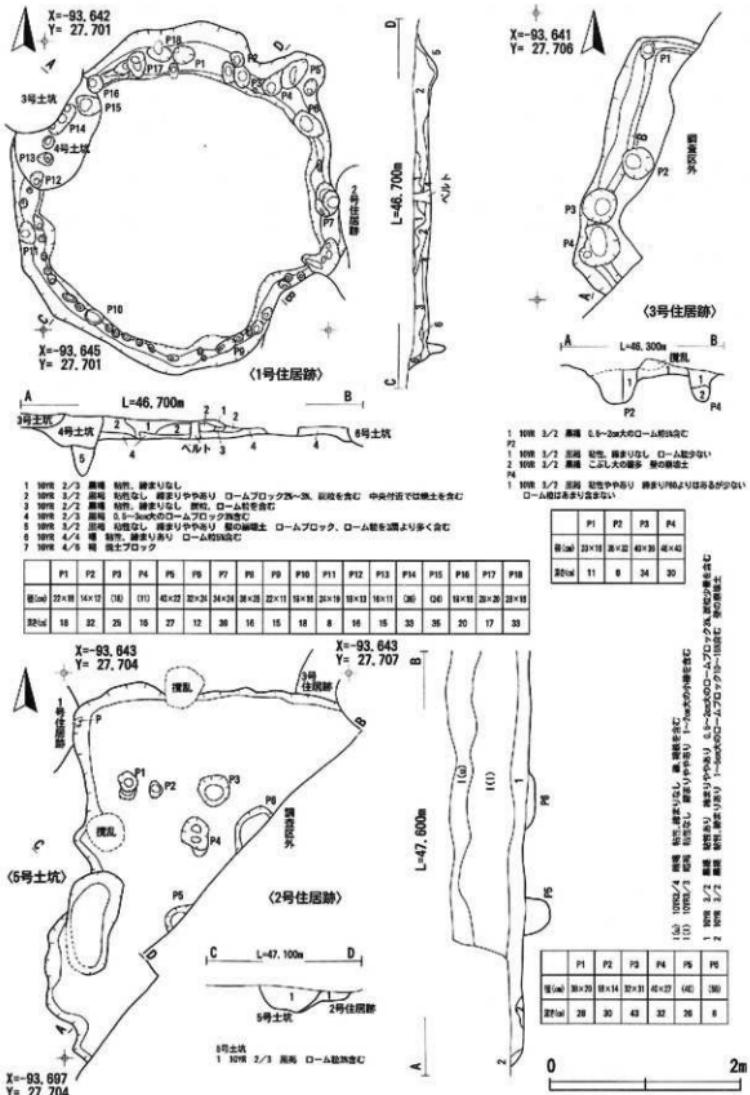
No.	径	深さ	底面標高	柱痕・その他
1	27×25	28	45.82	
2	28×26	12	46.01	
3	54×45	44	45.71	あり 径23×21
4	24×20	38	45.78	
5	17×14	27	45.85	
6	32×27	20	45.90	
7	(18)	26	45.84	
8	30×26	33	45.79	
9	24×22	21	45.92	
10	31×27	24	45.86	
11	28×22	26	45.86	
12	(19)	30	45.84	
13	28×22	31	45.82	
14	19×16	8	46.07	
15	23×22	25	45.89	
16	18×16	21	45.92	
17	30×30	13	45.99	
18	29×21	9	46.06	
19	23×22	17	45.99	あり 径12×10
20	32×22	16	45.99	
21	21×16	22	45.96	
22	23×22	18	46.00	
23	26×23	28	45.91	
24	26×20	13	46.08	あり 径12×9
25	30×28	16	46.03	
26	27×24	26	45.93	

No.	径	深さ	底面標高	柱痕・その他
27	68×39	35	45.89	
28	33×30	31	45.88	
29	22×20	27	45.90	
30	40×22	21	45.97	
31	42×30	26	45.93	
32	27×21	16	46.06	
33	35×34	27	45.94	
34	28×26	21	45.98	
35	31×29	18	46.06	
36	30×27	26	46.22	
37	25×23	24	46.24	
38	34×26	12	46.11	
39	40×36	20	46.04	
40	37×28	32	45.78	あり 径17×15
41	36×24	14	45.95	
42	23×21	34	45.75	
43	26×24	34	45.75	
44	28×24	48	45.68	
45	23×22	7	46.02	
46	(24)	14	45.97	
47	31×30	44	45.71	
48	28×28	39	45.75	
49	26×22	27	45.93	
50	30×25	25	46.01	
51	30×29	46	45.66	

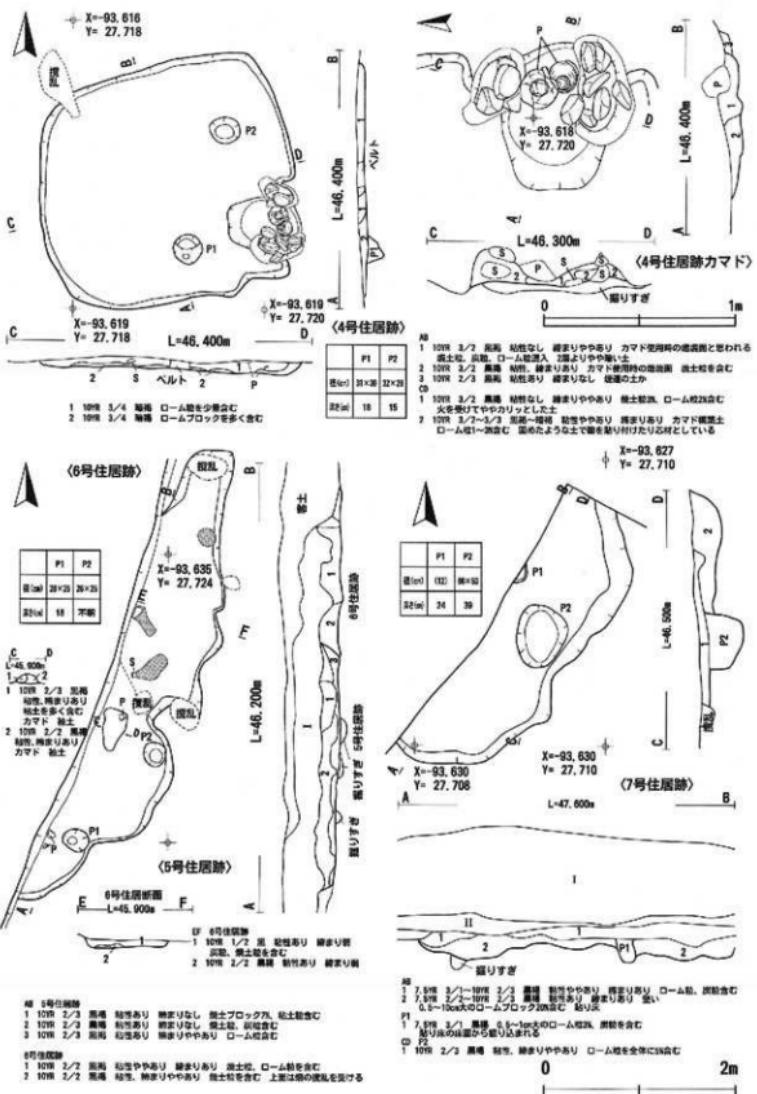
## 8区

No.	径	深さ	底面標高	柱痕・その他
1	23×22	42	45.47	
2	20×19	43	45.48	
3	26×24	34	45.53	
4	36×27	19	45.67	
5	41×35	50	45.40	
6	31×26	39	45.50	
8	32×30	25	45.64	
9	36×35	24	45.64	
10	46×36	25	45.29	

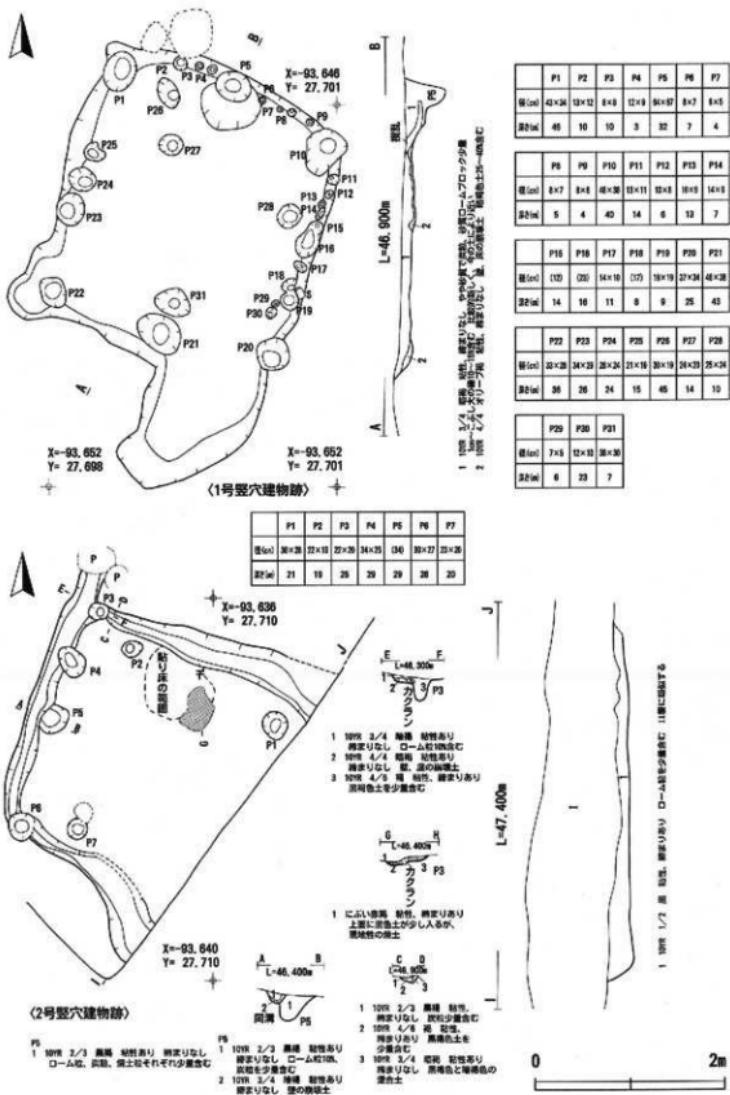
No.	径	深さ	底面標高	柱痕・その他
11	(36)	10	45.89	
12	30×29	13	45.87	
15	30×29	17	46.00	
16	33×28	13	46.17	
17	28×22	16	46.02	
18	20×16	14	46.06	
19	29×24	18	46.08	
20	75×68	13	46.14	あり 径28
21	30×29	12	46.11	



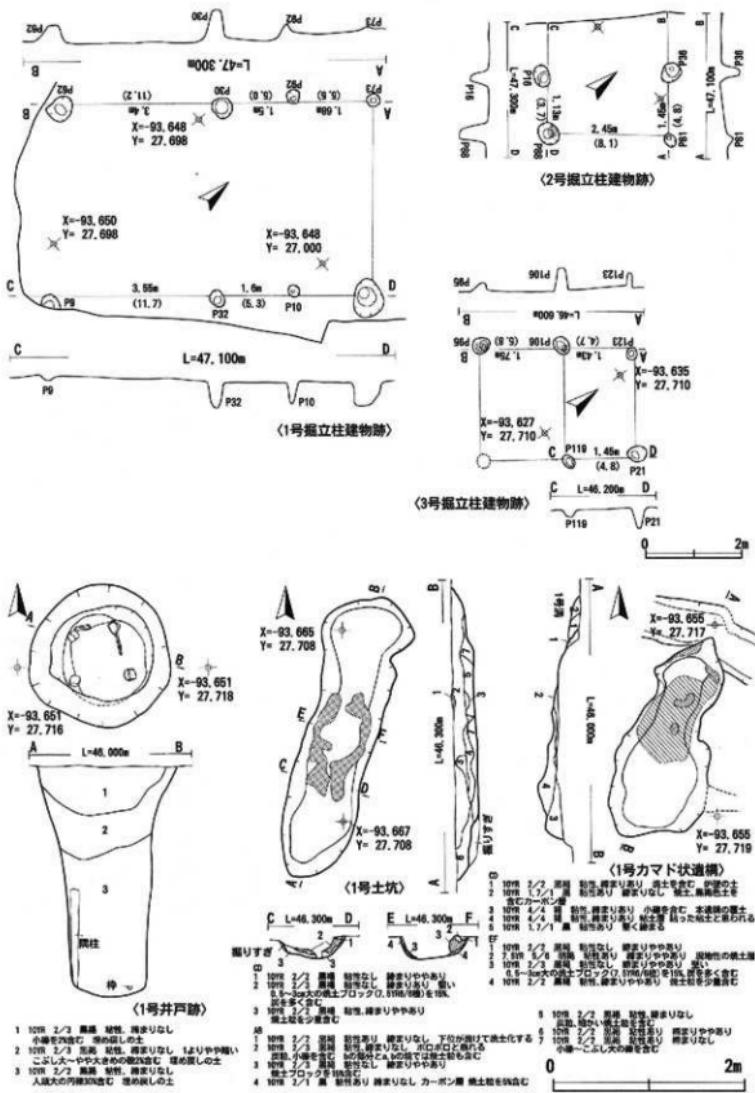
第5図 積穴住居跡 (1) (1～3号・5号 土坑)



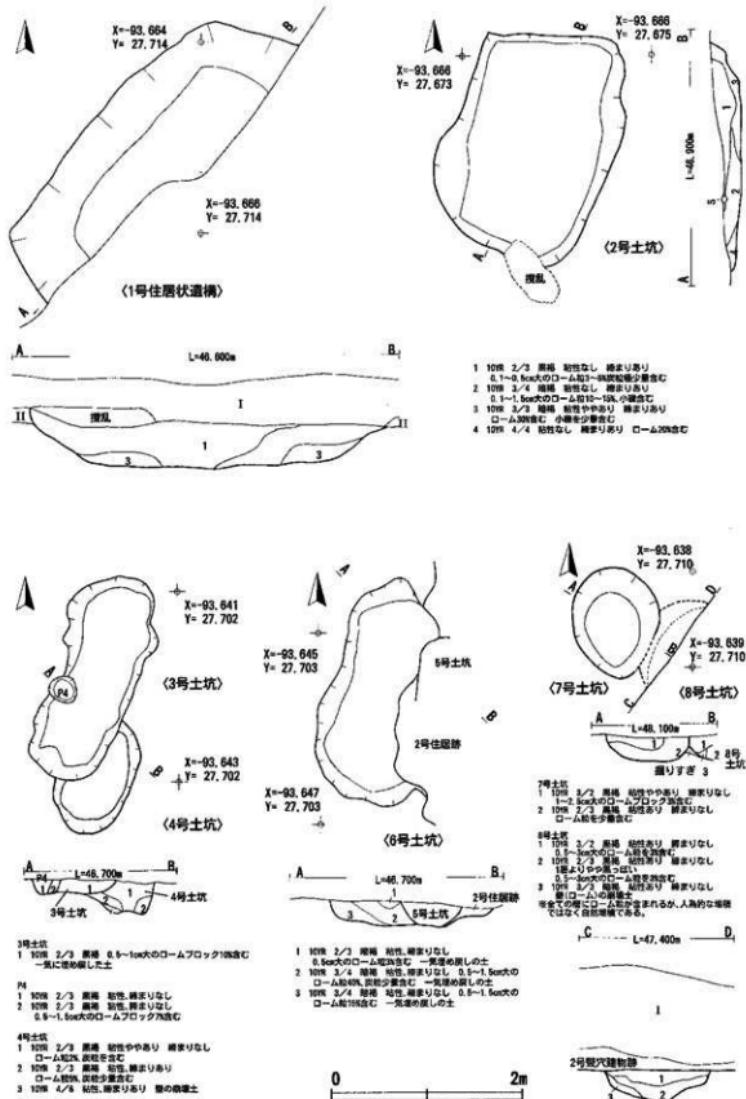
第6図 竪穴住居跡 (2) (4~7号)



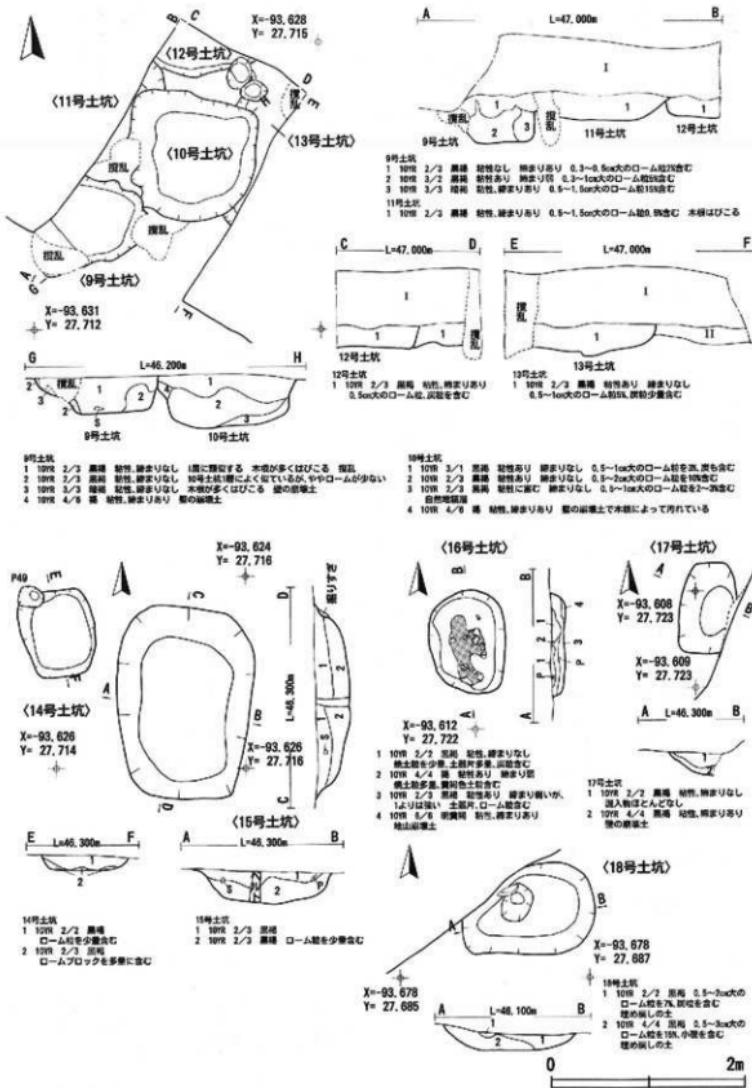
第7図 豊穴建物跡



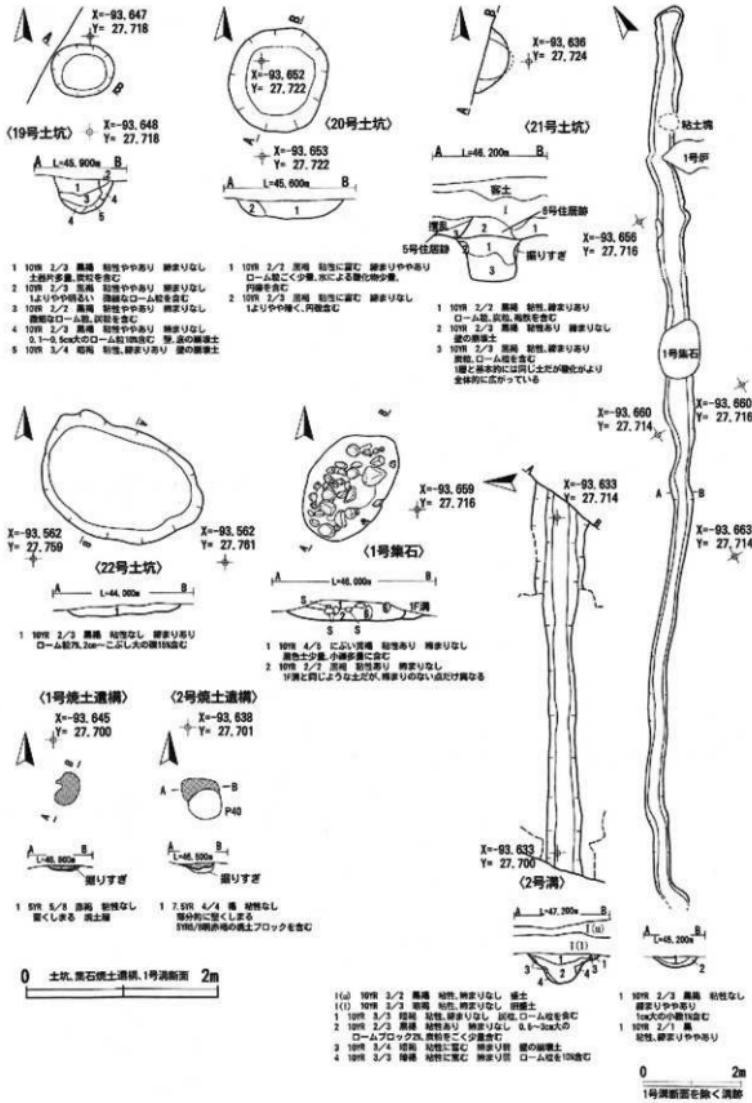
第8図 掘立柱建物跡・井戸跡・カマド状遺構・1号土坑



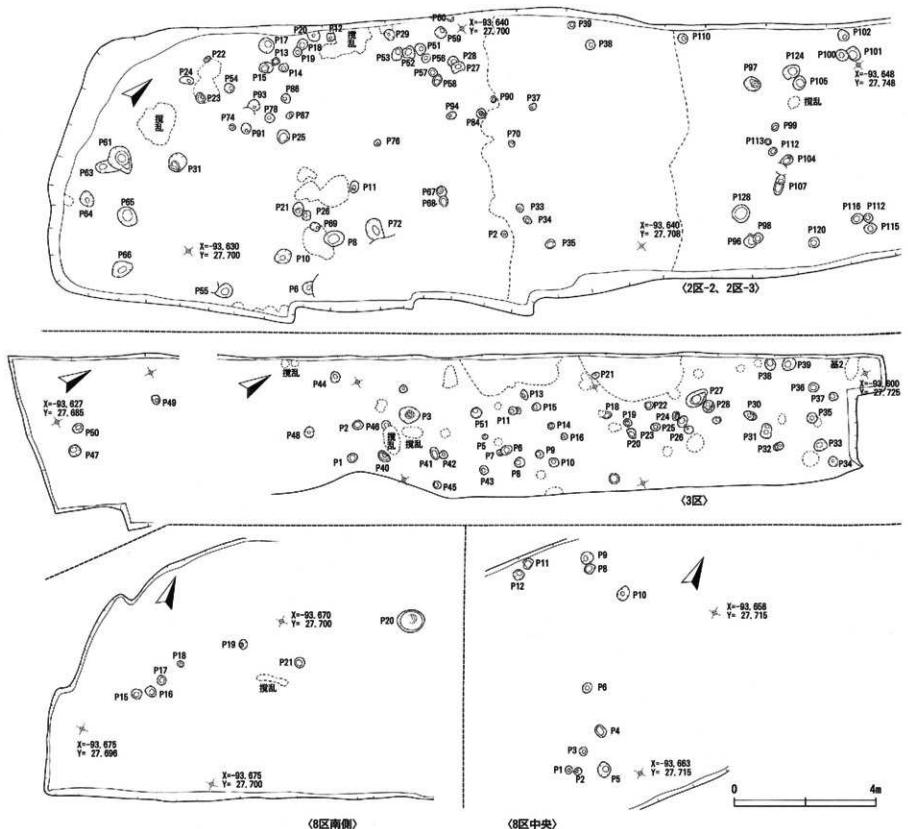
第9図 住居状遺構・土坑 (2~4・6~8号)



第10図 土坑 (9~18号)



第11図 土坑（19～22号）・集石・焼土遺構・溝跡



第12図 柱穴状土坑

## 2. 出土遺物

平成9年度の調査で出土した遺物は、縄文土器（コンテナ約0.5箱）、土師器（コンテナ約1箱）、須恵器（コンテナ約1箱）、陶磁器5点、石器・石製品（コンテナ約0.2箱）、金属製品4点である。

掲載した遺物の選択基準は、次のとおりである。縄文土器は基本的に5cm×5cmの大きさ以上のものを掲載したが、それ以下のものでも時期のわかるものについては載せた。土師器、須恵器についてはある程度器形が復元できるものを基準としたが、叩き目のある須恵器壺破片、長頸瓶の口縁部についてはその限りではない。石器は定形のものすべてと不定形のものは1辺以上にわたって調整の施されているものを掲載した。石製品はすべて（1点のみ）掲載、鉄製品はごく新しいと一見して判断された鎌を除いて掲載した。中世～近世の陶磁器についてはあまりに小片で図化できないものを除いて掲載した。

木製品は形状が判断できるものすべてを掲載した。表には各遺物の特徴などを記し、本文には表に表しきれなかったことを記載している。また、遺構内の遺物の出土状況は1. 検出された遺構を参照願いたい。

### (1) 遺構内出土遺物

1号住居跡出土遺物（第13図1～3、写真図版18）縄文土器、石器が出土した。1は体部下半は短い筒状で、上半は球状に張り出す器形である。縄は筋がやや角ばった形を呈しており、固い材質でできた縄を使用しているものと思われる。このような縄を使用した土器は他に遺構外の35である。3は全体に磨り面があるほか、短い擦痕が多く認められる。

4号住居跡出土遺物（第13、14図4～9、写真図版18）土師器、須恵器が出土した。器種は土節器の小型壺、須恵器壺、高台付杯、甕、長頸壺である。確実に住居に伴うと思われる遺物はカマド出土の4と5である。7は流れ込みと見られる。8、9も流れ込んだ可能性がある。

4はタタキを施した後、縦～斜め方向にケズリ。砂底須恵器（利部1995）である。外面の叩き目は木目に直交して刻みを入れた叩き具を用いている。火熱を受け赤褐色を呈している。5も火熱を受け、器面が薄く、脆くなっている。口唇部を上方に引き出している。8は格子状に見えるが、木目に直交して刻みを入れた叩き具を使用しており、刻みは平行である。9は頭部にリング状に突帯がつく。

5号住居跡出土遺物（第11図10、11、写真図版18）土師器が出土した。10は体部下端に糸かけ痕が残る。11は体部下半が球状に張っている器形の小型壺である。

1号井戸出土遺物（第15～17図23～30、写真図版19）須恵器、白磁、木製品が出土した。25は須恵器で壺の体部破片。24の白磁は皿かと思われる。26は桶などの底板で、残存率は約2分の1。表面がやや剥落する。27は井戸枠の横木で一方の短部は先端が尖るように削られている。28～31は井戸枠の隅柱で、もとは角材であったらしい。底面に接していた部分が比較的残りが良い。いずれの財もほぞ穴が2か所開いているが、検出状況から井戸枠として使用する際に開けられたものではなく、柱材を転用したものかもしれない。いずれにも工具痕と思われるものは認められない。

1号土坑出土遺物（第15図18、写真図版19）須恵器壺の破片が出土しており、叩き目は平行で、木目に直交して刻みを入れている。

15号土坑出土遺物（第15図19、20、写真図版19）19は青磁碗破片である。碗の口縁部破片と見られる。20は須恵器壺の破片である。叩き目は格子状の様に見えるが、叩き具の木目に直交して刻み目を入れたものかもしれない。あて具は無文である。

16号土坑出土遺物（第14、15図12～17、写真図版18、19）土師器壺、須恵器壺、長頸壺である。壺は切り離

し後、手持ちヘラケズリを行っているもの（12、13）と、回転ヘラ切り後、無調整のもの（14）が出土している。土師器の壺はロクロ使用のものと、使用していないものが出土している。

19号土坑出土遺物（第15図21、写真図版19）回転糸切り後無調整、内黒の土師器壺である。

22号土坑出土遺物（第15図22、写真図版19）ロクロを使用していない土師器壺の体部下端～底部の破片である。

8区P8出土遺物（第15図23、写真図版19）青磁破片が出土した。器種は碗かと思われるが不明。

## （2）遺構外出土遺物

ア. 繩文土器（第18、19図32～53、写真図版20）

I～II層、包含層、遺構の埋土や攪乱から出土している。位置は2区、8区が最も多いが、次いで10区の斜面に堆積したII層からも出土している。小片が多く、全体の器形を復元できるものはほとんどない。又、地文のみの破片が多く、時期が不明なものも多い。器種はほとんどが深鉢と思われる。

33は繩文を多く含む。羽状繩文の区画が比較的明瞭である。34は地文に撚り糸文（？）を施した後、波状の粘土ひもを貼り付ける。35はI縁部で外側に外反する器形。糸の節がやや角ばる。固い材質の繩らしい。

36は刷毛目状撚り糸文であるが、袖への繩のからめ方がやや乱れており、整った刷毛目状となっていない。撚り糸文は器面に深く施される。口縁部上端外側は横に撫でられる。37～45は地文のみの破片である。38の口縁部無文体は広い。46は撚り糸文。47と48は同一個体かもしれない。48は拓本では見えにくいが、鋸状の突起を口縁部に持つ。

イ. 弥生土器（第19図54～55、写真図版20）

10区から出土している。器種は鉢と高杯がある。54は内外面ともにミガキが施される。55は2個1対の粘土粒を持つ。ともに崩れたような変形工字文が施される。

ウ. 上土器、須恵系土器（第19図56～61、写真図版20）

2区、3区からの出土が多い。器種は壺、球胴壺、瓶、甕がある。まず、ロクロを使用していない土器。56、57はおそらく同一個体と思われる。56は赤彩球胴壺（杉本1998）である。内外面ともに口唇部に横位に一条、朱書きが施され、外面は3本の垂下する線描、内面は4～5本の垂下する線描が描かれる。内外面ともに横ナゲがていねいに施され、整った印象を受ける。頸部は指で押さえてある。57は外面に朱書きで鋸歯状の文様が描かれる。内面は黒色の煤状の付着物がある。外面は横方向に舟念なミガキが施される。58は体部に段を持つ壺である。次にロクロを使用している土器。59は甕と思われる土器で、もとの地権者の方が過去に調査区内から採取したものである。体部上半から上は失われており、体部下半は半分以下の残存率である。脚がついており、体部下端でハの字状に開く。外面はロクロナデの後、縦方向にヘラケズリされるが、下端はケズリが施されない。内面には下半のはぼ同じ高さのところに横木受け孔と思われる凹みが2か所認められる。酸化炎焼成によるものである。60は器面が荒れ、剥落している部分も多い。二次的に火熱を受けているかもしれない。

61はゆがんだ土器である。口縁部が肥厚し、内面に黒色処理は施されない。いわゆる須恵系土器に相当する。

エ. 須恵器（第20図62～74、写真図版20、21）

2区、8区から多く出土した。須恵器壺、長頸壺、蓋、甕、広口壺がある。67は内面端部に沈線が施される。立ち上がりの角度からおそらく台と思われる。64、70はもとの地権者の方が過去に調査区内から採取した土器である。65は底部外面に菊花状の調整が施される。64、69、70、71は内面あるいは内外面にカキ目が施される。72の叩き目は木目に直行した刻みを入れた叩き具を用いる。73の叩き目は外面は平行であるが木

口に斜交して刻みを入れた叩き具を用い、内面は木目に平行して刻みを入れたあて具を用いている。

オ. 陶磁器（第23図75～81、写真図版21）

遺構外から中世のものと思われる青磁破片、陶器片、近世から近代のものと思われる磁器破片が出土している。出土位置は中世のものが8区、近世～近代のものが以前宅地であった2区から出土している。

カ. 金属製品（第23図82～84、写真図版21）

鉄製品2点、銅製品1点を掲載した。82は8区中央の風倒木から、他は83が3区のI～II層間、84が6区のI層から出土したものである。いずれについても時期は不明であるが、83、84については出土層位から新しいものと思われる。

キ. 石器（第21、22図85～101、写真図版22）

今回の調査で出土した石器は、石鎚6点、石匙1点、石鎌2点、不定型石器5点、敲磨石類5点、磨製石斧1点である。これらのうち使用の痕跡が認められない剥片、調整が行われていない剥片を除き、掲載した。遺構から出土したものは少なく、ほとんどが遺構外からの出土である。地点は2区及び8区からが圧倒的で、他の区からはほとんど出土していない。

出土した器種は第3表のとおり分類した。

石材は剥片石器においてはほとんど珪質頁岩、礫石器においては溶岩や安山岩、砂岩などバラエティに富んでいる。

① 石鎚（2、85～88、90）

1号住居跡出土の2も含めると、大きく2種類に別れる。基部が凹んでいるもの（2、85～87）と平基のもの（88、90）である。凹基のものは最大幅が基部にあるものa（85、86、87）と身部下半にあるものb（2）に大別され、bの方が小さいようである。平基のものは細身で長い。

② 石匙（89）

縦型のものが1点出土している。

③ 石鎌（95、96）

背面の調整は丁寧に行われているが、腹面の調整はごく少なく、簡単である。

④ 不定型石器（91～94）

剥片の縁辺部に調整が加えられているものを一括した。92は石匙などが欠損したものかもしれない。

⑤ 磨製石斧（97）

小型で平たく、薄いものである。表面に擦痕が観察され、稜は明瞭である。

⑥ 敲磨石類（3、98～101）

97は敲石。98、99、は敲き抜も認められる磨石、100は円石兼用の磨石である。扁平で細長いもの、円錐の全面が磨り面であるもの、断面が隅丸方形で、長い確の一部を磨っているものがある。

ケ. 石製品（第24図102、写真図版）

石棒と思われる。断面は丸みを持ちながらもやや扁平で、両端は欠損している。擦痕が明瞭である。

＜参考文献＞

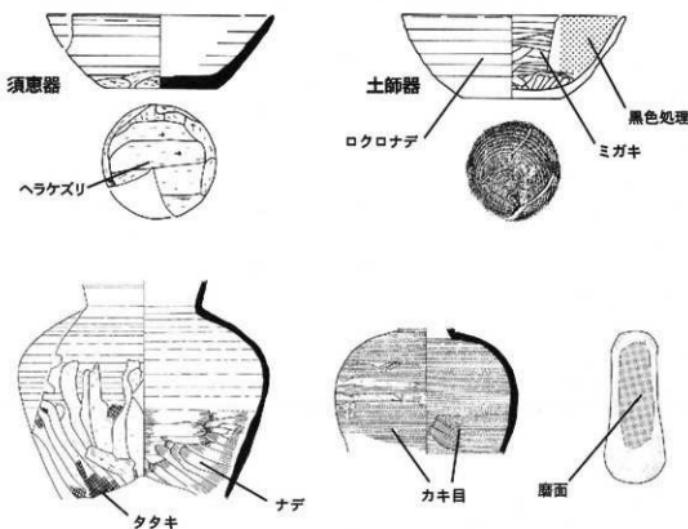
利部 修 1995 「砂須須器の考察」 秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第10号

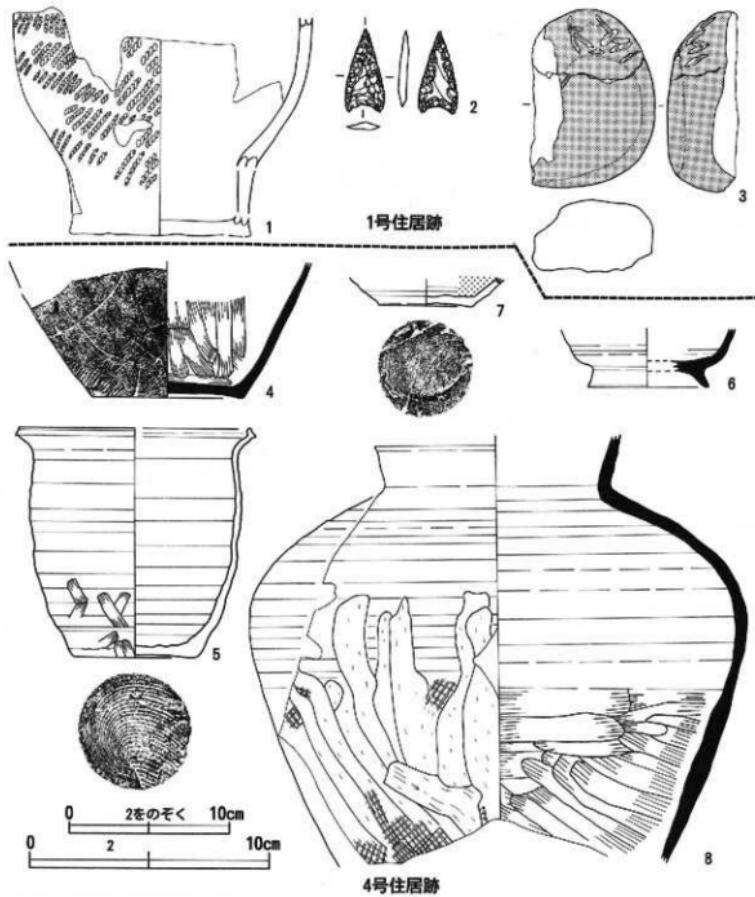
櫻田 隆 1993 「丁砂底」土器考 芦方論聚一久保哲三先生追悼論文集

杉本 良 1998 「岩手県北上盆地における鐵夷集団の動態」『考古学研究』第45巻第1号

第3表 石器分類表

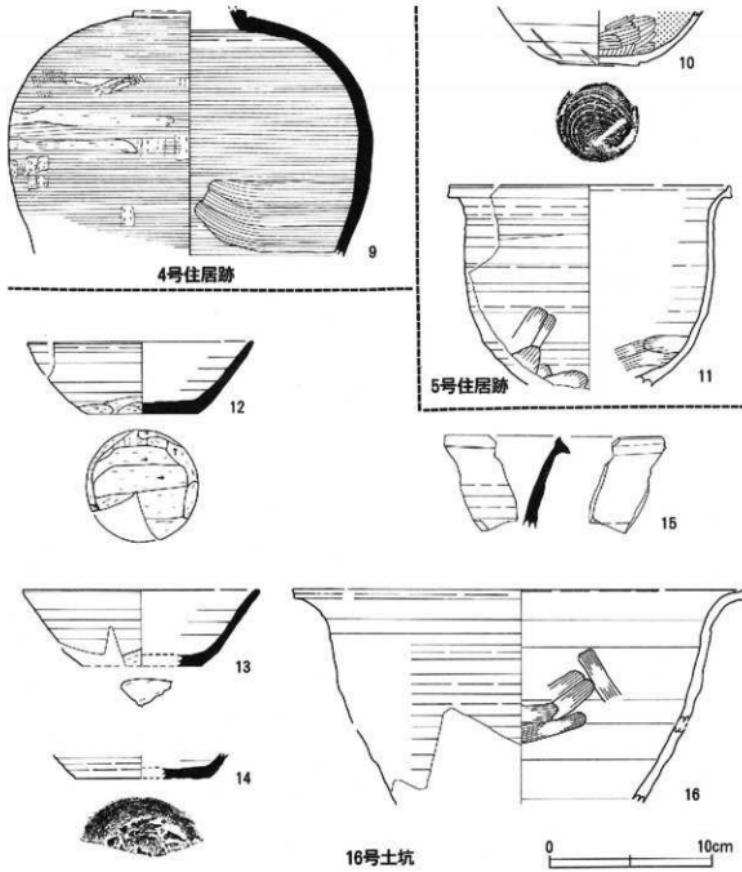
今回出土の器種のみに限定





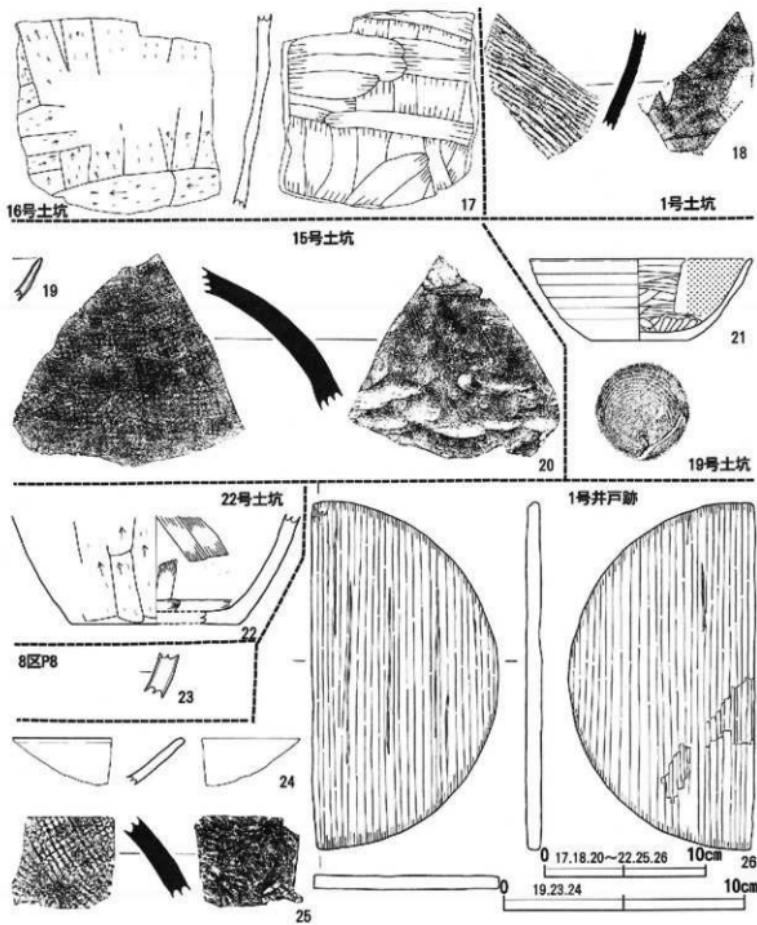
第4表 遺構内出土遺物観察表

### 第13図 遺構内出土遺物 1 (1・4号 住居)

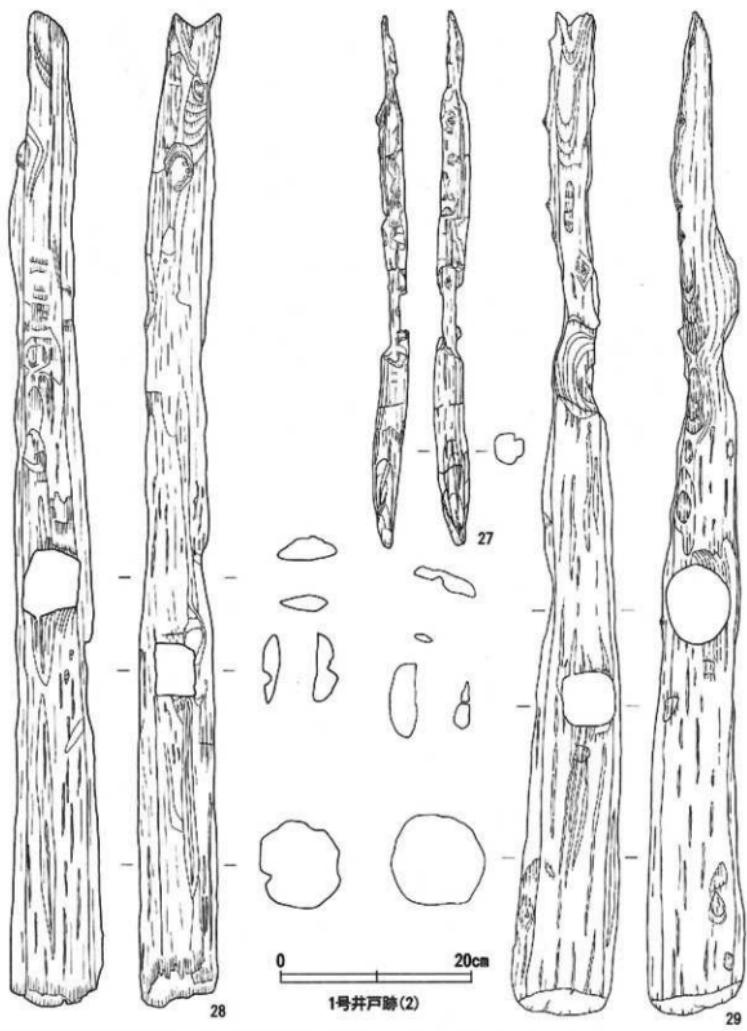


No.	出土地点・層位	埋器・鉢付	外形測定		内部測定		法身(mm)	身 高 (mm)	分類・備考	真 實 度
			口部幅	体 高	口部幅	体 高				
9-4号室・壁上中央	土加壓・漆器底	土加壓・漆器底 漆器底・底部下凹	同上、内腔向へケ テラス、左側	同上、内腔向へケ テラス、左側	同上、内腔向へケ テラス、左側	同上、内腔向へケ テラス、左側	有	B内面部上部にはテナ リ	A	18
10-6号室カド付袖上	土加壓・漆器底	コクロナダ	ミガト(縫)	-	5.0	-	有	A I 直室底部に内袋形状にしき 有内袋と外袋。底盤は丸みだり	18	
11-5号室・頂下位	土加壓・漆器底	ロクロナダ	ロクロナダ 上端ナダ	ロクロナダ ロクロナダ	17.5	-	有	A I	18	
12-16号室・1層	漆器底・环	ロクロナダ	ロクロナダ ロクロナダ	ロクロナダ ロクロナダ	14.1	6.5	有	B I 直切切り端に後、ヘタケ ス	18	
13-18号室・地上・漆器底・环	ロクロナダ	ロクロナダ ロクロナダ ロクロナダ ロクロナダ	ロクロナダ ロクロナダ ロクロナダ ロクロナダ	ロクロナダ ロクロナダ ロクロナダ ロクロナダ	14.8	-	有	B I	18	
14-15号室・漆器下	漆器底・漆器底	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	8.6	-	有	B II 直室底部へ直切り無底盤	18	
15-16号室・漆器下	漆器底・漆器底	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	-	-	有	A I	18	
16-17号室・漆器下	漆器底・漆器底	ロクロナダ	ロクロナダ ロクロナダ	ロクロナダ ロクロナダ	28.0	-	有	A I	18	

第14図 遺構内出土遺物 2 (4・5号住居、16号土坑)

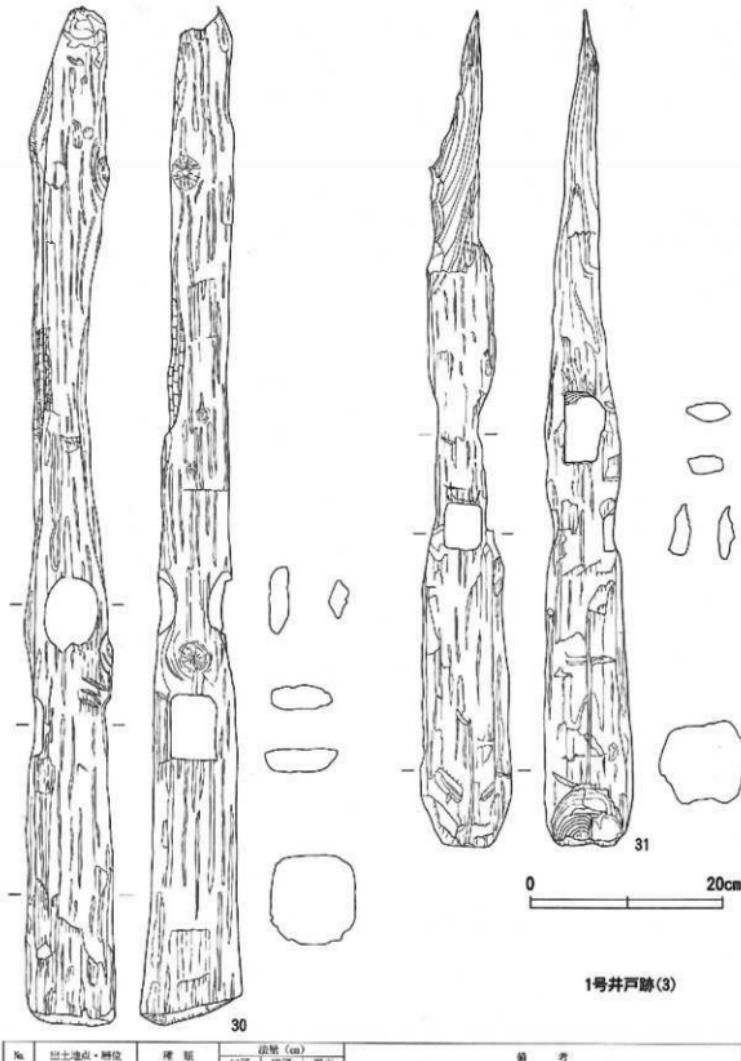


第15図 遺構内出土遺物 3  
 (16号土坑・1・15・19・22号 土坑、8区P8、1号井戸跡)



No.	出土地点・層位	種類	法面 (cm)	前名	文
27	1号井戸跡・表 井戸構築段	井戸構築木	106.2 8.3	中場等分に木の芯のみ残存、先端は芯によって削られている	13
28	1号井戸跡・表 井戸構築段	井戸構築木	106.6 8.4	井戸等分に木の芯のみ残存、先端は芯によって削られている	12
29	1号井戸跡・表 井戸構築段	井戸構築木	106.2 10.0	井戸等分に木の芯のみ残存、先端は芯によって削られている	13

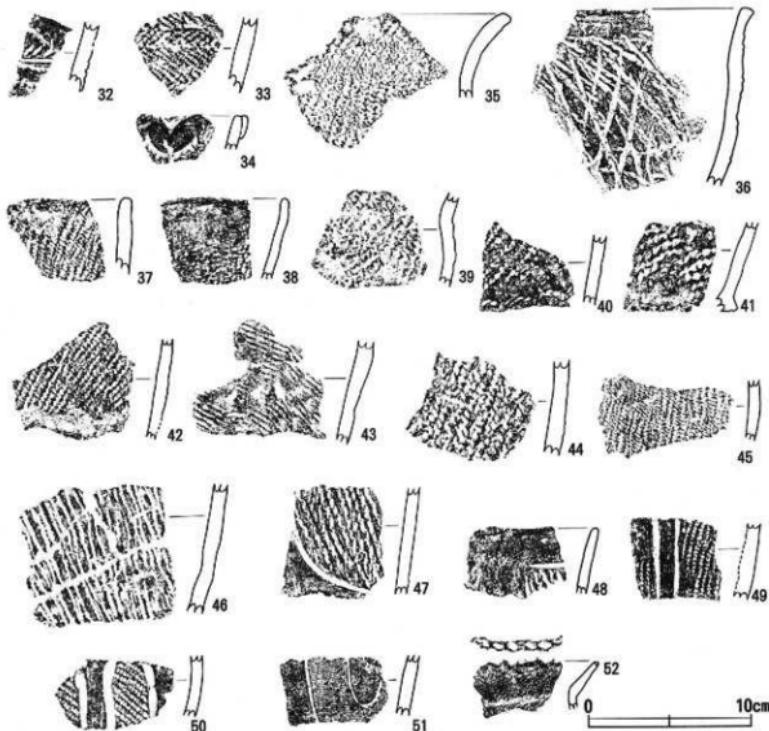
第16図 遺構内出土遺物 4 (1号井戸跡)



1号井戸跡(3)

No.	出土地点・部位	種類	直徑(cm)			備考	写真
			口径	底径	高さ		
30	1号井戸跡・底	井戸檻柱	106.7	9.6	9.4	ぼや次きか所 横面に接していた部分は比較的良好に残存	19
31	1号井戸跡・底	井戸檻柱	86.4	9.7	9.1	ぼや次きか所 横面に接していた部分は比較的良好に残存	19

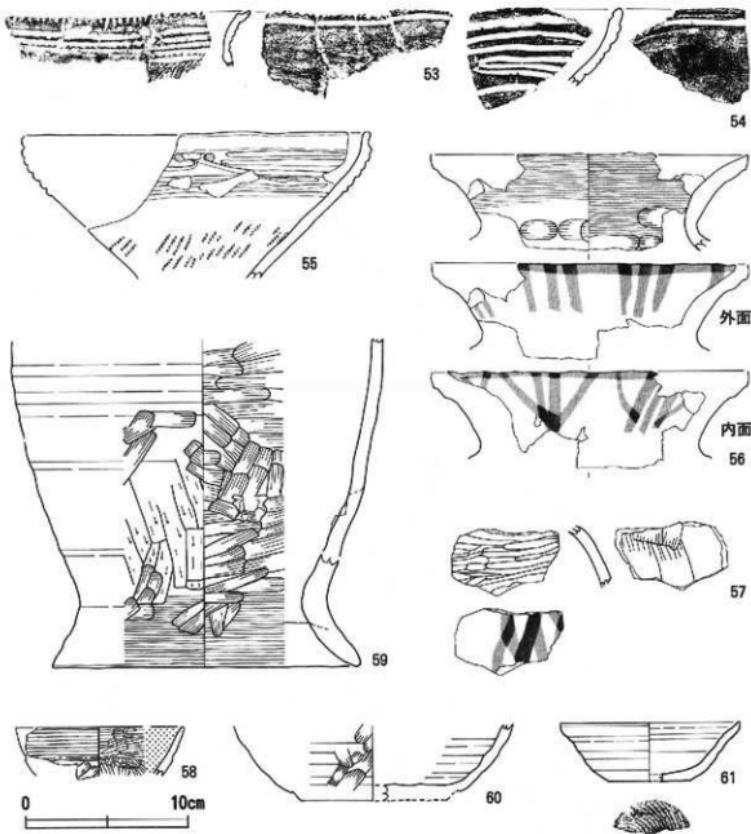
第17図 遺構内出土遺物 5 (1号井戸跡)



第5表 遺構外出土遺物観察表

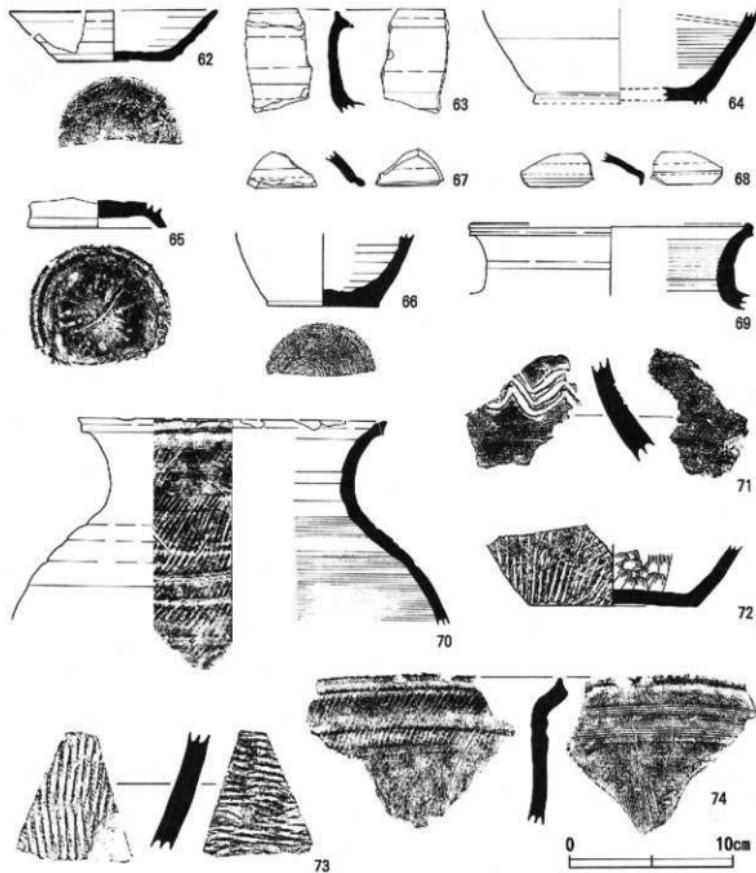
No.	出土地質・層位	形態・断面	文様・装飾等	内面	均 売	写真
32	8区雨より・櫻丘	深鉢・6cm上平		ミガキ	早期	20
33	3区南平・II	深鉢・体部	R.L.+L.R. 織繩多く含む	ナゲ	前期南面	20
34	8区-2奥より・I	深鉢・体部	小波状の断面織繩かけ	ナゲ	前期中面	20
35	2区-2・I	深鉢・口縁部	L.R縫(笠がや中縫びる)	ナゲ	前期?	20
36	2号西北面・埋土	深鉢・口縁部	網目状織り糸文 L.R. 砂粒含む	ナゲ	前期?	20
37	19号上杭・埋土	深鉢・口縁部	L.R縫	ナゲ	20	
38	2区-2・西側	深鉢・口縁部	R.L縫・口縁部上端糸文等	ナゲ	20	
39	8区中央・風呂木	深鉢・縁部	L.R縫	ナゲ、おこげ付管	20	
40	2区-1・II	深鉢・体部	L.R縫・織繩文 雲母含む	ナゲ	20	
41	2区-3・下位	深鉢・体部下端	L.R縫	ナゲ	20	
42	8区-2・櫻丘	深鉢・体部	L.R縫	ナゲ	20	
43	2区-1・II	深鉢・体部	L縫	ナゲ	中期?	20
44	21号上杭・埋土	深鉢・体部	L.R縫	ナゲ	20	
45	8区-2・水田	深鉢?・体部	L.R斜め	ナゲ	織文?発生?	20
46	2区-2・I	深鉢・体部	織文文R	ナゲ	20	
47	8区-1・I	深鉢・体部	織文文L.R.→浅い弦紋で区別→ナゲ	ミガキ	中期末尾	20
48	8区-1	深鉢・口縁部	織文文L.R.→浅い弦紋で区別→ナゲ。熱次実現	ミガキ	20	
49	10区・II	深鉢・体部	R.L斜め→弦紋で区別→ナゲ		中期後葉	20
50	3区南平・II	深鉢・体部	L.R縫・口縁部上端糸文ナゲ	ナゲ	中期後葉	20
51	1区・II	深鉢・体部	波紋・L.R斜め+ミガキ	ナゲ	中期末葉	20
52	8区・I	深鉢・口縁部	L.R縫、口縁部に糸形のキザシ	ナゲ	晚期	20

第18図 遺構外出土遺物 1 (織文土器)



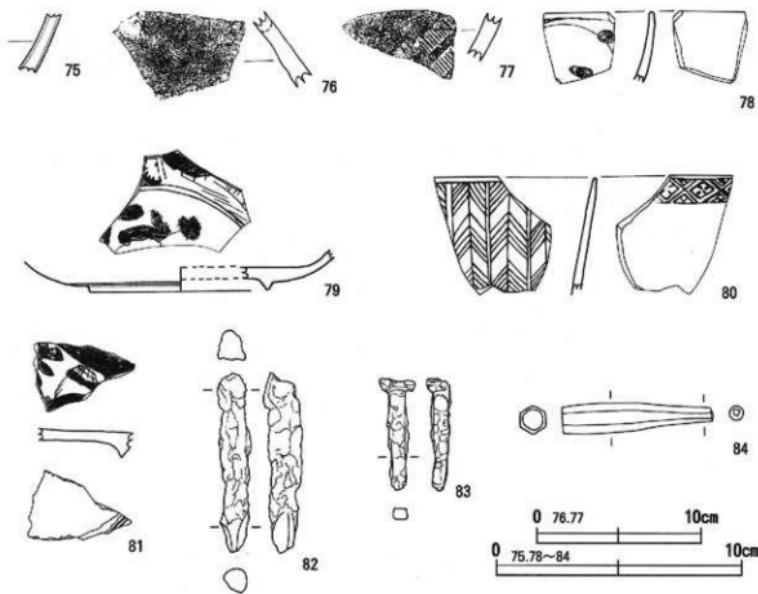
No.	出土位置・調査区分	器種・部位	文様・加工等	内面	時期	参考
53	1区住居跡	水呑・口部	口縁、口銅頭にトマト、底面に花模。(C面)内にキザミ	口縁部に沈線、テグ(光沢)	20	
54	3区南手・植葉木	器・口縁部	底面、腹部に花模、(C面)内にキザミ	口縁部に沈線、テグ(光沢)	20	
55	3区北手・II	器・全体	腹部に花模、(C面)内にキザミ	口縁部に沈線、テグ(光沢)	20	
56	3区南手・植葉木	器・底面	底面に花模、(C面)内にキザミ	外側 内側	20	
57	3区北手・II	器・全体	腹部に花模、(C面)内にキザミ	口縁部に沈線、テグ(光沢)	20	
58	出土位置・調査区分	器種・部位	外面部	内面	時期	参考
59	3区南手・植葉木	土器部・底面	口縁部 底面	口縁部 底面	19.7	20
60	3区南手・植葉木	土器部・底面	口縁部 底面	口縁部 底面	—	—
61	2区-2・櫻尾	土器部・底面	口縁部 底面	口縁部 底面	10.6	20
62	8区・前木氏塗放	土器部・底面	口縁部 底面	口縁部 底面	—	—
63	1区-1・5号漆・周辺	漆器・底面	漆器・底面	漆器・底面	18.0	20
64	1区-1・5号漆・周辺	漆器・底面	漆器・底面	漆器・底面	—	—
65	1区-1・1(1)	漆器・底面	漆器・底面	漆器・底面	—	—

第19図 遺構外出土遺物 2 (縄文土器・弥生土器・土師器・須恵系土器)



No.	山土地点・部位	遺物・部位	外観形状	内部形態	法寸 (cm)	分類・備考
62 3区・1	圓筒形・环	口縁部	口縁部	口縁部	12.4	有B且底内面にへう切り無底盤
63 1区・1(1)	圓筒形・筒状口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	-	有B一部に自然釉(黑色)
64 3区・佐ヶ木式深腹	直筒形・筒状口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	-	有B施釉あり
65 3区・中央瓶側	直筒形・筒状口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	-	有B施釉あり
66 2区・3・瓶底	直筒形・筒状口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	-	有B底部周縁余切り
67 3区・深腹・場所別	直筒形・台	口縁部	口縁部	口縁部	-	有B底内面に1条の凹痕
68 2区・2・1	直筒形・台	口縁部	口縁部	口縁部	-	有B
69 8区・北壁より・1～B	直筒形・筒口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	17.6	有B内面に自然釉(黑色)
70 8区・佐ヶ木式深腹	直筒形・筒口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	19.0	有B
71 3区・内田	直筒形・筒口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	-	有B
72 3区・1	直筒形・筒体下部・瓶底	口縁部	口縁部	口縁部	-	有B
73 1区・1(1)	直筒形・筒体下部	口縁部	口縁部	口縁部	-	有B
74 2区・1・1(1)	直筒形・筒口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	-	有B

第20図 遺構出土遺物 3 (須恵器)



No.	出土位置・層位	断面・脚柱	その他の	写真
75	8区東側・1	骨器部分・体部	中世	21
76	8区-2×1印	常滑窯・体部	押印 中世?と同一個体か	21
77	8区北邊・焼跡地	常滑窯・体部上半	押印 中世	21
78	2区-2×1	染付茶碗・口縁部	真須 近世	21
79	2区-2×1	染付皿・底羽	真須 近世	21
80	2区-1×櫛丸	染付碗口・口縁部	共箱・側面矢羽根文 編前 19C?	21
81	2区-2×1	染付皿・底羽	真須 近世	21

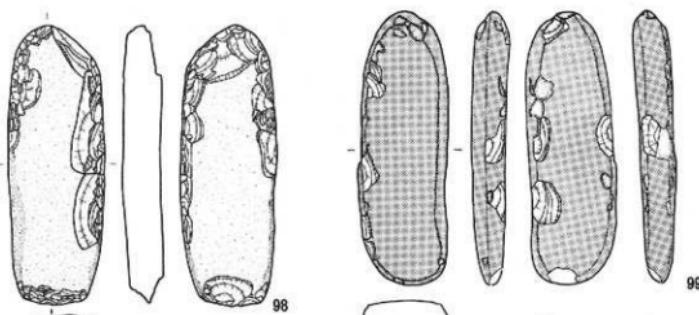
No.	出土位置・層位	断面	大きさ(cm)			参考	写真
			長さ	幅	厚さ		
82	8区中央偏東	鉄針?	7.4	1.4	1.2	17.5	21
83	3区南半1～2印	鉄針	4.6	1.5	0.5	7.7	21
84	6区・1	セラミック口	6.2	1.3	1.3	20.3 表面に経年	21

第21図 遺構外出土遺物 4 (陶磁器、金属製品)

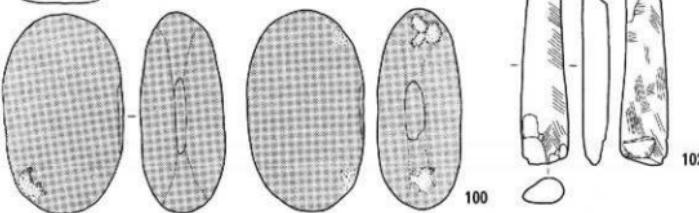


No.	出土位置・層位	器種	石材	大きさ(cm)	重さ(g)	分類・備考	
85	2区-1	石器	珪質頁岩	2.8 2.5	1.8 1.5	6.4 6.5	①イ a 断面台形
86	2区-3・I	石器	珪質頁岩	(2.1)	(1.7)	(6.6)	②イ a
87	2区-2・包含物	石器	珪質頁岩	2.8	1.6	6.4	③イ a 先端欠
88	5南北り・圓丸	石器	珪質頁岩	2.8	1.6	6.8	④ア 縫合
89	8区-1号炉	石器?	珪質頁岩	(2.7)	1.1	6.4	(4.0)
90	2区-3・包含物	石器	珪質頁岩	(4.5)	1.5	0.7	(1.3)
91	2区-3・1下	不定形	珪質頁岩	2.1	2.2	6.4	⑤測定の1辺を肉色から測定
92	8区・圓丸	不定形	珪質頁岩	(3.2)	(2.3)	(0.7)	(7.0) ⑥欠損
93	2区全境	不定形	珪質頁岩	6.0	5.8	1.1	41.6 ⑦正面面を対角測定の1辺に調整
94	2号炉P1・埋土	不定形	珪質頁岩	4.7	6.3	0.9	31.5 ⑧断片の周縁の1辺に調整
95	2号炉・埋土上部	石器	珪質頁岩	6.8	3.5	1.8	28.6 ⑨
96	2区-3南北り・I	石器	珪質頁岩	7.1	3.5	1.9	45.4 ⑩
97	2区-2・I	磨製石斧	鶴石岩	(4.1)	2.1	(0.7)	(11.1) ⑪上端欠

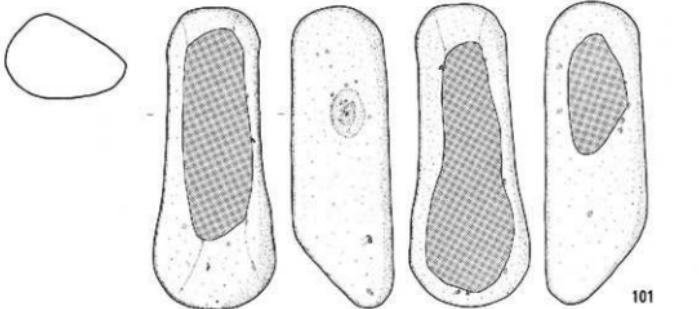
第22図 遺構外出土遺物 5 (石器)



98



100



101

0 10cm

No.	出土位置・層位	断面	石 材	大きさ (cm)			重さ (g)	分類・備考	写真
				長さ	幅	厚さ			
98	2区-2・1	断面	砂岩	17.2	6.0	2.4	407.8	(3)	22
99	2号位・3土	断面	砂岩	15.8	5.5	2.3	366.5	(3)	23
100	2号位・3土	断面	砂岩	16.4	7.0	2.4	224.0	(3) 帯に細粒	24
101	3号位	断面・端面	砂岩	16.0	6.5	6.0	1,087.7	(3) 带に細粒	25
102	10区・3上2土	断面	頁岩	19.8	2.9	2.6	562.0	(3) 端、下端欠、側面引裂	26

第23図 遺構外出土遺物 6 (石器、石製品)

### 3. 平成9年度調査のまとめ

今回の調査は、道路に添った矮小な調査区であったため、遺構の規模が把握できたものは少ない。また、同じ理由から時期を推定できる遺物も少なかった。しかし、低位段丘の縁辺という立地条件から、绳文時代、平安時代の竪穴住居跡、中世の竪穴建物跡、掘立柱建物跡など、各期にわたる遺構を検出することとなった。何分遺構数が少ないのでまとまることは言えないが、特に平安時代～中世の住居跡、竪穴建物跡の類例や、遺物の概要について述べる。

#### 【遺構】

##### (1) 住居跡について

绳文時代の住居跡1棟、平安時代の住居跡5棟、不明1棟である。そのうち平安時代の住居跡で、規模のわかるものは、4号住居跡の1棟のみである。辺の長さは2.68×2.53m、床面積は約6.8m<sup>2</sup>で、竪穴住居跡としては小型に類する。(伊藤博幸による分類(1998)では特小5～10.5m<sup>2</sup>)

##### (2) 竪穴建物跡について

今回検出されたものは2棟である。1棟は調査区外に伸びているため、全容は不明であるが、いずれも方形、または長方形の竪穴の南壁に張り出しがつく。規模は一辺の長さが3.14×2.78m、3.3mで、3m内外のようである。壁高は最も深いところで16～25cmであるが、10cm内外の部分もあり、上面を削平されている可能性が高い。柱穴は主に壁際に並び、壁溝が開けたり(2号竪穴建物跡)、小柱穴が加わる(1号竪穴建物跡)。炉を持つものと(2号竪穴建物跡)、持たないもの(1号竪穴建物跡)がある。

周辺では水沢市内の玉賀遺跡、金ヶ崎町の永徳寺遺跡で検出されている。玉賀遺跡では長軸5.7m、短軸2.9mの東壁に張り出しをもつ隅丸長方形を呈する竪穴建物跡が一棟検出され、埋土上層からてづくねとクロのかわらけ(報告では土師質皿型土器)や内耳の鉄鍋、陶器片が出土している。かわらけと鉄鍋は12世紀代に属する可能性がある。埋土上層からの出土であるため遺構の年代と結びつかないかもしれないが、建物跡もそれと大きくは異ならないのかもしれない。栄徳寺遺跡では長軸3.7m、短軸3.1mの長方形の竪穴の南壁に張り出しをもつ建物跡が検出されている。床面に炉の可能性のある焼上が検出され、青磁破片が出土した。報告者はほぼ13～14世紀を考えているようである。

佐野原遺跡検出の竪穴建物跡からは遺物は出土しなかったものの、平面形や柱穴のあり方などから中世に属すると考えられる。

##### (3) カマド状遺構について

1号カマド状遺構の燃焼部の壁や底に形成された焼土は顯著ではなかったが、検出面において円形に焼土が広がっており、焚き口から燃焼部にかけて炭の層が形成されている。当初は鍛冶炉などの可能性も考え、精査を行った。しかし、鍛造剝片、鉄滓などの関連遺物は一切出土しなかったことから、鍛冶関連の遺構の可能性は薄いと考えられる。

以上のような焼土をともなう遺構は、先に述べた金ヶ崎町永徳寺遺跡、鳥海A遺跡からも検出され、それぞれかまど状遺構、焼土遺構として報告されている。また、北上市和賀長梅の木I遺跡では、焚き口と燃焼部の掘り込みをもつ焼土遺構として報告されている。これらの遺跡の報告者はかまどとしての用途を想定しているようである。以上の遺構の年代について詳しく言及されているところは少ないが(梅の木I遺跡検出

遺構は10世紀後半と報告されている。)、遺跡の主体となる年代から10世紀後半から中世にかけてと考えられる。本遺跡の1号カマド状遺構も同様に屋外のかまどとしての用途が考えられ、竪穴建物跡との関連が想起される。

さらに、1号土坑についても、中央の焼土に対し土坑両端を焼き口と考えれば、同様の用途がある可能性がある。

### [遺 物]

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器、石器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品がある。ここではこれらのうち、平安時代の土師器と須恵器について述べる。

#### (1) 分類

分類は虜数の多く見られる壊、甕について行った。他の器種(高台付杯・蓋など)については、個数が少ないため、分類できなかった。また、小片で、器種の分類に不安のあるものは行っていない。

##### <壊>

焼成の方法によって次のように分類した。

###### ・A群・・・酸化炎焼成の土器

内面の黒色処理、ミガキの有無で以下に分類される。なお、すべてロクロが使用される。

I類・・・内面に黒色処理、ミガキが施されるもの・・・土師器(7・10・21)

この群については3点とも底部に再調整は施されていない。

II類・・・内外面ともロクロ痕以外の調整を施されないもの・・・須恵系土器(61)

###### ・B群・・・還元炎焼成の土器

須恵器を指す。底部の切り離し技法はヘラ切りと再調整があって不明なものとがある。再調整の有無で以下に分類される。

I類・・・底部に再調整が施されるもの(12・13)

II類・・・底部に再調整が施されないもの(14・62)

##### <甕>

以下のように分類した。ただし、両群とも残存度が低く、破片によって分類せざるを得ないものや、分類できなかったものもある。

###### ・A群・・・酸化炎焼成されているもの

I類・・・ロクロを使用しているもの(5・11・16)

II類・・・ロクロを使用していないもの(17・22)

###### ・B群・・・還元炎焼成されているもの(4・18・20・69・70・72・74)

##### <蓋>

###### ・B群・・・還元炎焼成されているもの(8・9・15・63・64・65・66)

#### (2) 出土率の比率

各器種における出土量の割合は、掲載遺物では壊がA群4個、B群4個では同一の割合である。甕はA群5個、B群8個で、A群がやや多い。蓋はすべてB群である。このほか高台付杯、蓋はすべて還元炎焼成

によるものである。

#### (3) 遺構別の組成と遺構の年代

本遺跡における遺構出土の遺物は数自体が少なく、また確実に遺構に伴うと考えられる土器も多くないため、確実性には欠けるが、各遺構の遺物の組成とわかる範囲での時期を推定してみたい。

<4号住居跡>確実に住居に伴うと思われるは、壺がB群、A群I類のほか還元炎焼成の高台付坏である。埋土中からはA群I類の坏、B群の壺である。出土遺物全体としては還元炎焼成のもの（須恵器）が多い。砂底の須恵器壺や小型の壺から9世紀後半～10世紀初頭の住居と考えられる。

<5号住居跡>A群I類の坏、A群I類の壺が出土した。底径の小さい△群I類の坏や小型の壺の形態から9世紀後半～末と考えられる。

<1号土坑>B群の壺が出土した。

<15号土坑>B群の壺が出土した。

<16号土坑>B群I類、B群II類の坏と、A群I類の壺、A群II類の壺が出土した。そのほか還元炎焼成の壺がある。坏の種類と器形及びA群I類の壺の器形から9世紀前半～中葉と考えられる。

<19号土坑>A群I類の坏が出土した。坏の調整や器形から9世紀後半と考えられる。

<22号土坑>A群II類の壺が出土した。

#### (4) 平安時代の瓶について

8号付近から旧地権者の佐々木氏が過去に収集した瓶(59)がある。このように酸化炎焼成で、ロクロを使用して成形し、ハの字状に開いた脚を持つ瓶は、県内では紫波郡紫波町西田東遺跡II D-1住居跡出土の2点がある。なお、須恵器では同紫波町古館駅前遺跡から1点が出土している。

体部下半の破片であるが、酸化炎焼成によること、脚部がハの字状に開くこと、ロクロを使用していることが、本遺跡出土のものと同様である。異なる点は脚部の器厚が、本遺跡出土のものの方がやや厚く、脚部の開きがやや小さいこと、本遺跡出土のものは器面調整として体部下半にケズリを施しているが、西田東遺跡のものはロクロナデのままであること、棟木受け孔が貫通していることである。

この2点はII D-1住居跡の2面ある貼床の第1面の下部より出土しており、報告者は他の出土遺物の土器の年代観から住居の年代を9世紀第4四半期～10世紀前葉とみている。また、主に群馬県下における平安次代の瓶について論じた外山政子氏による研究(1987)に照らし、外山氏の編年の3期(9世紀後半～10世紀)の所産としている。

本遺跡出土の瓶(59)は、酸化炎焼成であるが、調整、成形方法などから外山氏の言う須恵器の伝統を引き継いだ瓶に分類される。さらに体部調整がロクロナデで、体部上半、口縁部は不明であるものの、脚部の形態から鉄付きのものであった可能性(外山氏のb I③、b II③)がある。氏はこのタイプは9世紀後半代から出現し10世紀にかけて主流を占めるとしている。本遺跡出土の瓶も同様の時期に属する可能性が高い。

県内では平安時代のロクロを使用した瓶の出土例はごく少なく、分類はもちろん全體の器形がわかる資料もないのが現実である。破片の状態で、体部下端や脚部が出土しなければ、ロクロ使用の瓶として扱ってしまうこともあると思われるが、今後、なぜ少ないのかといったことも考えながら、該期の集落出土の土器に注意を払って行きたい。

## 【結 語】

以上のように佐野原遺跡は縄文時代から人々が居住していたが、主体となる年代は遺物量、遺構数から9世紀後半～10世紀初頭の平安時代と中世にあることがわかった。また、遺構外からの出土であるが、ロクロ木使用の环や赤彩球胸墜（杉本1998）の存在は前代からの集落の存在も示唆している。この種の土器については祭司に関連するとの見方があるが、杉本良氏はその分布と胆沢城創建前後の北上川中流域の集落の土器組成などから、和賀川下流の集団と結びつけ、在地首長の存在と京政権の当地方の支配形態を論じている。このような意味からも9世紀前後の佐野原遺跡の集落の成立はたいへん興味深い。

中世における当遺跡の様相は出土遺物が非常に少ないとから、年代などを推定することはできず、遺跡の性格も明らかにできなかったが、堅穴建物跡、屋外かまどのほかに掘立柱建物も伴っていた可能性がある。また、水沢段丘縁部には白井坂I・II遺跡をはじめ中世の城館跡が多く立地しており、今後それらの近接する遺跡との関連が明らかになることが期待される。

## ＜参考文献＞

- |           |   |
|-----------|---|
| 伊藤 博幸     | 1989 「陸奥国の黒色土器－岩手・宮城地域－」『東国土器研究』2号  |
|           | 1992 「胆沢城跡の土器編年」『会津大戸窯に関する問題シンポジウム資料』   |
|           | 1998 「北上盆地南部の様相」第2仙山古代城柵官衙遺跡検討会資料   |
| 岩手県教育委員会  | 1981 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X」文化財調査報告書第58集<br>「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X」文化財調査報告書第59集 |
| 岩手県埋蔵     | 1981 「金ヶ崎ハイバス関連遺跡発掘調査報告書I」文化財調査報告書第18集  |
| 文化財センター   | 1995 「西田東遺跡発掘調査報告書」文化財調査報告書第221集  |
| 全ヶ崎町教育委員会 | 1992 「永徳寺遺跡」全ヶ崎町文化財調査報告書第26集  |
| 杉本 良      | 1998 「岩手県北上盆地における鐵火集団の動態」『考古学研究』第45巻第1号   |
| 外山 政子     | 1987 「瓶について－平安時代の瓶を中心にして－」群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要4                                    |
| 内野 修      | 1998 「北上盆地北部の様相」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料』   |
| 八木 光則     | 1981 「VI. 2 志波城跡と周辺遺跡の土器様相」『志波城跡I』  |

## V 平成10年度調査

### 1. 遺構

平成10年度調査では、遺構名を、各種別毎に検出順に2号住居跡、1号土坑という名称にし、遺構名の頭に、『98-』を付し、番号は順不動で、欠番を生じている。

今回の調査では、平安時代の堅穴住居跡が1棟、土坑が5基、中世以降と思われる土坑が6基、柱穴状土坑18、柱穴状小ピット67、時期不明の焼土が1基検出された。

#### (1) 堅穴住居跡

98-1号 堅穴住居跡（第24図・写真図版24）出土遺物（第30、31図・写真図版32、33）

##### <位置>

基1（X = -93,600 Y = 27,750）の南西、2～3mに位置する。

##### <検出面>

表土除去後、褐色粘土層の上面で検出を行った。

##### <規模・形態>

東側は削平により壁は立ち上がらない。

##### <壁面>

壁溝などは見られず、ほぼ垂直に立ち上がる。

##### <床面>

概ね平坦で硬い床面を呈し、小石が多くみられる。

##### <カマド>

北、南、西壁面からは検出されなかった。東側検出面からは焼土がみられたが、住居との関係は確認できなかった。

##### <埋土>

小石を多く含む黒褐色が主体で、検出面では土器片が多くみられた。

##### <柱穴>

検出されなかった。

##### <出土遺物>

上師器の壺、甕、須恵器の壺、大甕？片などが出土している。

##### <時期>

出土遺物より平安時代（9世紀末から10世紀初頭）と思われる。

##### <重複>

新しい時期と思われる径が20cm以下の柱穴状ピットの重複がみられる。

##### <その他>

検出された堅穴の深さから、黒褐色土層から掘り込まれていたものと推定される。現在の住宅による擾乱と、埋土の同土質のため検出できなかつたのではと考える。

## (2) 土 坑

遺構名		98'-1号 土坑					遺構名		98'-2号 土坑		
國版	遺構	26	遺物				國版	遺構	26	遺物	31
写真国版	遺構	26	遺物				写真国版	遺構	26	遺物	33
位 置		X = - 93,603 Y = 27,739					位 置		X = - 93,612 Y = 27,736		
検出状況		褐色土(IV)層上位面					検出状況		褐色土(IV)層上位面		
重複関係		現建物の基礎部分によって攪乱					重複関係		南西壁面で柱穴状ピットと重複		
形 平面	楕円形?						形 平面	円形			
状 断面	皿形						状 断面	半円形			
規 開口	140cm × 180cm						規 開口	110cm × 125cm			
底 径	100cm × 130cm						底 径	30cm × 50cm			
横 深さ	14cm						横 深さ	22cm			
埋 土	褐色の礫をわずかに含む黒褐色土						埋 土	上層一黒褐色土			
底 面	ほぼ平坦でしまりがある						底 面	下層一ロームブロックを含む暗褐色土			
壁	緩やかに外傾						壁	しまりあり			
出土遺物	なし						出土遺物	須恵器片			
時 期	不明						時 期	不明			

遺構名		98'-3号 土坑					遺構名		98'-4号 土坑		
國版	遺構	25	遺物	31			國版	遺構	25	遺物	31
写真国版	遺構	25	遺物	33			写真国版	遺構	25	遺物	33
位 置		X = - 93,613 Y = 27,240					位 置		X = - 93,614 Y = 27,738		
検出状況		褐色土(IV)層上位面					検出状況		暗褐色土(III)層下位面		
重複関係		4号土坑、5号柱穴と重複					重複関係		3号土坑、19号柱穴と重複		
形 平面	楕円形						形 平面	長楕円形			
状 断面	逆台形						状 断面	椀形			
規 開口	160cm × 180cm						規 開口	100cm × 310cm			
底 径	130cm × 170cm						底 径	40cm × 250cm			
横 深さ	35cm						横 深さ	35cm			
埋 土	上一炭化物をわずかに含む黒褐色土						埋 土	褐色、赤褐色の礫をわずかに含む 黒褐色土			
底 面	下一ロームブロックを含む暗褐色土						底 面	しまりがなく、凹凸がみられる			
壁	凹凸はみられるが、ほぼ平坦						壁	やや内湾し、ほぼ垂直に立ち上がる			
出土遺物	直線的に外傾して立ち上がる						出土遺物	土師器、須恵器、磁器片			
時 期	12世紀～						時 期	12世紀～			

98-5号土坑			
遺構名	遺構	25	遺物
図版	遺構	25	遺物
位置	X = -93,613 Y = 27,731		
検出状況	暗褐色土(Ⅲ)層下位面		
重複関係	南側は擾乱をうけている		
形	平面	不明	
状	断面	半円形	
規	開口	70cm	×
	底径	30cm	×
模	深さ	20cm	
埋	土	ロームブロックや石を多く含む 黒褐色土	
底	面	丸みがあり、しまっている	
壁		やや外傾して立ち上がる	
出土遺物		なし	
時期		不明	

98-6号土坑			
遺構名	遺構	26	遺物
図版	遺構	26	遺物
位置	X = -93,621 Y = 27,730		
検出状況	暗褐色土(Ⅲ)層下位面		
重複関係	西側は調査区外にのびる		
形	平面	觸丸方形?	
状	断面	逆台形	
規	開口	90cm	×
	底径	80cm	×
模	深さ	30cm	
埋	土	しまりのない黒色土	
底	面	しまりがあり、ほぼ平坦	
壁		わずかに外傾して立ち上がる	
出土遺物		なし	
時期		不明	

98-7号-1土坑(西)			
遺構名	遺構	26	遺物
図版	遺構	27	遺物
位置	X = -93,623 Y = 27,731		
検出状況	暗褐色土(Ⅲ)層下位面		
重複関係	7号-2土坑と重複		
形	平面	円形?	
状	断面	皿形	
規	開口	80cm	×
	底径	40cm	×
模	深さ	10cm	
埋	土	上-炭化物をわずかに含む黒褐色土 下-燃土ブロック層	
底	面	丸みがあり、やや凹凸がみられる	
壁		緩やかに外傾して立ち上がる	
出土遺物		土師器・須恵器の壺、「ナラ」材の炭	
時期		平安時代(9C末~10C初)	

98-7号-2土坑(東)			
遺構名	遺構	26	遺物
図版	遺構	27	遺物
位置	X = -93,623 Y = 27,731		
検出状況	暗褐色土(Ⅲ)層下位面		
重複関係	7号-1土坑と重複		
形	平面	円形?	
状	断面	三日月形	
規	開口	100cm	×
	底径	50cm	×
模	深さ	15cm	
埋	土	燃土ブロック、炭化粒を含む黒褐色土	
底	面	丸みがあり、やや凹凸がみられる	
壁		やや外傾して立ち上がる	
出土遺物		須恵器の壺、甕	
時期		平安時代(9C末~10C初)	

98'-8号土坑				98'-9号土坑				
遺構名	遺構	27	遺物	遺構名	遺構	27	遺物	
図版	遺構	27	遺物	写真図版	遺構	27	遺物	
位置	$X = -93,626$ $Y = 27,735$				$X = -93,626$ $Y = 27,733$			
検出状況	褐色土(IV)層上位面				暗褐色土(III)層下位面			
重複関係	10号土坑と重複				10号土坑と重複、北側は擾乱			
形 平面	長楕円形				形 平面	楕円形		
状 断面	半円形				状 断面	皿形		
規 開口	60cm × 120cm				規 開口	90cm × 90cm		
底径	40cm × 90cm				底径	60cm × 80cm		
模 深さ	40cm				模 深さ	10cm		
埋 土	しまりの弱い黒褐色土				埋 土	ローム粒を含む黒褐色土		
底 面	丸みがあり、しまっている				底 面	やや凹凸があり、しまっている		
壁	やや内湾して垂直に立ち上がる				壁	緩やかに外傾して立ち上がる		
出土遺物	須恵器の大甕片				出土遺物	土師器		
時 期	平安時代				時 期	平安時代?		

98'-10号土坑				
遺構名	遺構	27	遺物	
図版	遺構	27	遺物	
写真図版	遺構	27	遺物	
位置	$X = -93,626$ $Y = 27,734$			
検出状況	暗褐色土(III)層下位面			
重複関係	8・9号土坑と重複、北側は擾乱			
形 平面	楕円形			
状 断面				
規 開口	100cm × cm			
底径	70cm × cm			
模 深さ	10cm			
埋 土	しまりの弱い黒褐色土			
底 面	凹凸はがあり、しまっている			
壁	外傾して立ち上がる			
出土遺物	なし			
時 期	平安時代?			

(3) 柱穴状土坑 (第27~28図・写真図版28~30)

#### 98'-2号柱穴

<位置>  $X = -93,601$   $Y = 27,741$

<検出面> 褐色土(IV)層上位面

<形状> 楕円形

<規模> 90cm × 110cm × 10cm

<遺物> 織文時代土器片、上師器片

<時期> 不明

#### 98'-3号柱穴

<位置>  $X = -93,611$   $Y = 27,741$

<検出面> 暗褐色土(III)層下位面

<形状> 楕円形

<規模> 40cm × 60cm × 15cm

<遺物> なし

<時期> 不明

#### 98'-4号柱穴

<位置> X = -93,611 Y = 27,740  
<検出面> 暗褐色土(Ⅲ)層下位面  
<形状> 円形  
<規模> 75cm × 80cm × 20cm  
<遺物> なし  
<時期> 12世紀以降(埋土状況より)

#### 98'-6号柱穴

<位置> X = -93,617 Y = 27,738  
<検出面> 褐色土(Ⅳ)層上位面  
<形状> 楕円形  
<規模> 65cm × 80cm × 10cm  
<遺物> 不定形石器、磁器片  
<時期> 近世~

#### 98'-8号柱穴

<位置> X = -93,619 Y = 27,738 東  
<検出面> 褐色土(Ⅳ)層上位面  
<形状> 楕円形  
<規模> 50cm × 80cm × 20cm  
<遺物> なし  
<時期> 不明

#### 98'-10号柱穴

<位置> X = -93,619 Y = 27,738 東  
<検出面> 褐色土(Ⅳ)層上位面  
<形状> 円形  
<規模> 70cm × 80cm × 25cm  
<遺物> なし  
<時期> 不明

#### 98'-5号柱穴

<位置> X = -93,612 Y = 27,740 北東  
<検出面> 暗褐色土(Ⅲ)層下位面  
<形状> 円形  
<規模> 90cm × 100cm? × 30cm  
<遺物> 須恵器片(甕)  
<時期> 12世紀以降(埋土状況より)

#### 98'-7号柱穴

<位置> X = -93,617 Y = 27,738 南  
<検出面> 褐色土(Ⅳ)層上位面  
<形状> 円形  
<規模> 70cm × 70cm × 12cm  
<遺物> なし  
<時期> 不明

#### 98'-9号柱穴

<位置> X = -93,618 Y = 27,738 南東  
<検出面> 褐色土(Ⅳ)層上位面  
<形状> 円形  
<規模> 50cm × 60cm × 10cm  
<遺物> なし  
<時期> 不明

#### 98'-11号柱穴

<位置> X = -93,620 Y = 27,737  
<検出面> 褐色土(Ⅳ)層上位面  
<形状> 円形  
<規模> 55cm × 50cm × 10cm  
<遺物> なし  
<時期> 不明

\* 形状は、平面形を記載。

\* 規模は、開口径×深さを表わす。

### 98'-12号 柱 穴

<位 置> X = -93,619 Y = 27,730 東  
<検出面> 暗褐色土(Ⅲ)層下位面  
<形 状> 楕円形?  
<規 模> 90cm × -cm × 20cm  
<遺 物> なし  
<時 期> 不明

### 98'-14号 柱 穴

<位 置> X = -93,622 Y = 27,731 南西  
<検出面> 暗褐色土(Ⅲ)層下位面  
<形 状> 楕円形(重複)  
<規 模> 75cm × 65cm × 25cm  
<遺 物> なし  
<時 期> 不明

### 98'-16号 柱 穴

<位 置> X = -93,628 Y = 27,733 北  
<検出面> 暗褐色土(Ⅲ)層下位面  
<形 状> 楕円形  
<規 模> 75cm × 65cm × 25cm  
<遺 物> なし  
<時 期> 不明

### 98'-18号 柱 穴

<位 置> X = -93,611 Y = 27,739  
<検出面> 暗褐色土(Ⅲ)層下位面  
<形 状> 楕円形  
<規 模> 70cm × 75cm × 10cm  
<遺 物> なし  
<時 期> 不明

### 98'-13号 柱 穴

<位 置> X = -93,620 Y = 27,731 北東  
<検出面> 暗褐色土(Ⅲ)層下位面  
<形 状> 楕円形  
<規 模> 50cm × 85cm × 26cm  
<遺 物> 土師・須恵器片、「ナラ」材皮炭  
<時 期> 平安時代(9C~)

### 98'-15号 柱 穴

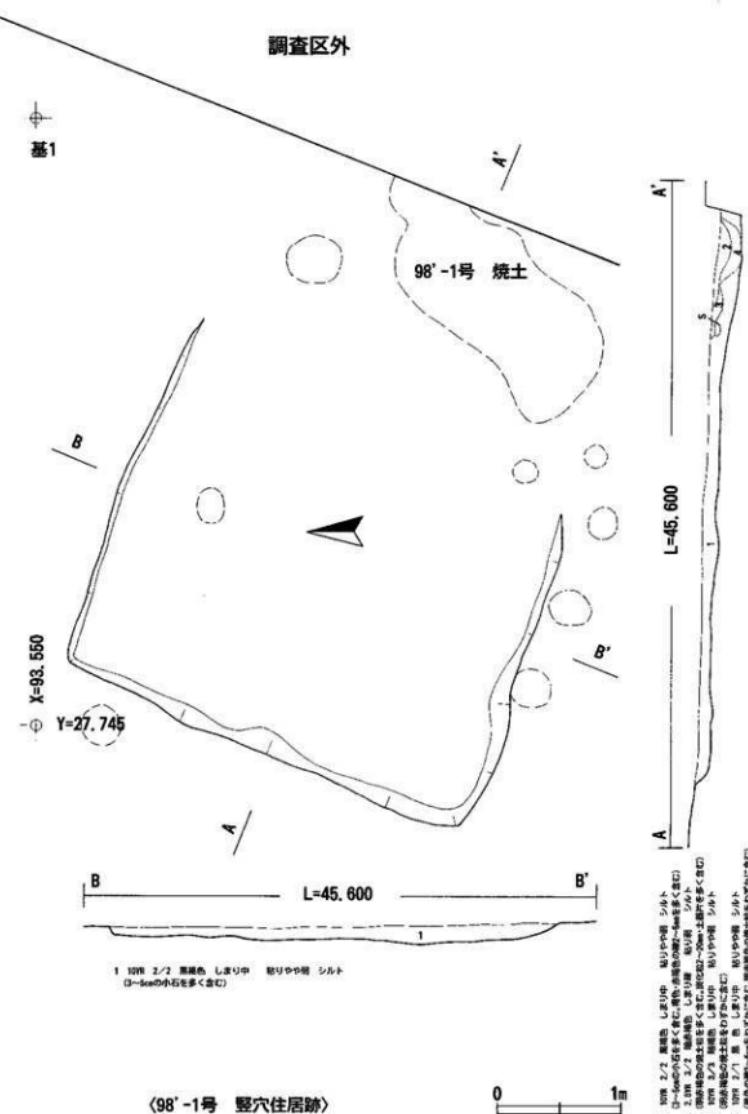
<位 置> X = -93,623 Y = 27,731 北東  
<検出面> 暗褐色土(Ⅲ)層下位面  
<形 状> 不整形  
<規 模> 50cm × 50cm × 25cm  
<遺 物> なし  
<時 期> 不明

### 98'-17号 柱 穴

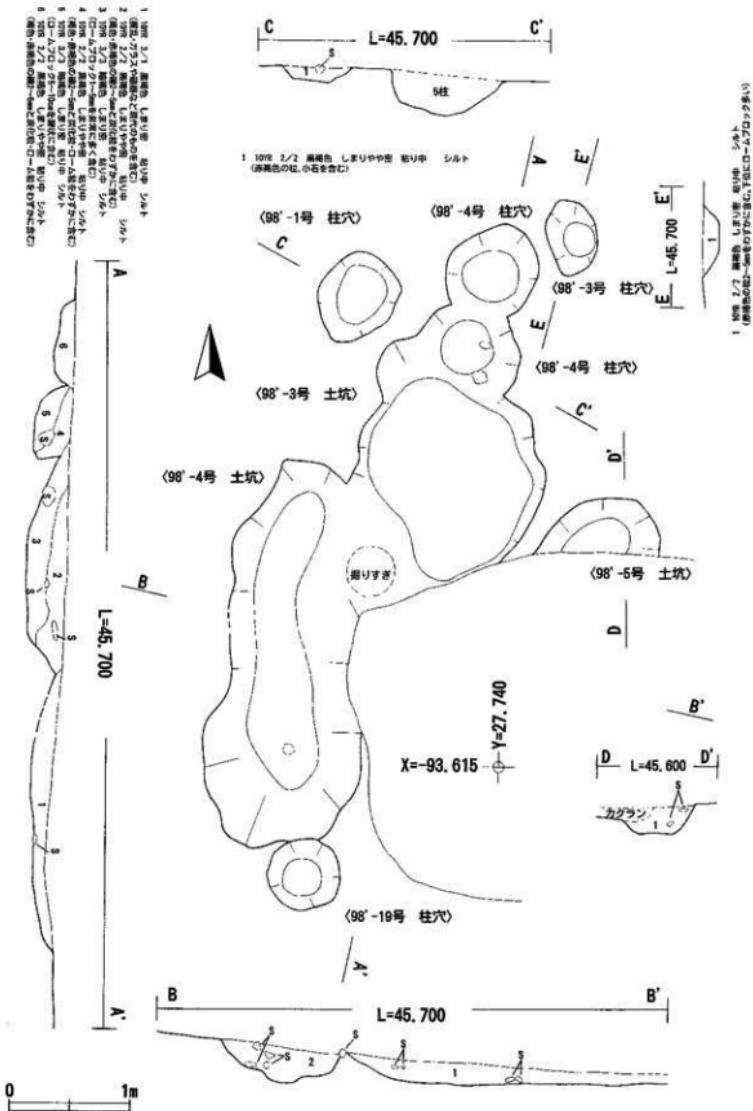
<位 置> X = -93,627 Y = 27,728 西  
<検出面> 暗褐色土(Ⅲ)層下位面  
<形 状> 圓丸方形  
<規 模> 75cm × -cm × 28cm  
<遺 物> なし  
<時 期> 不明

### 98'-19号 柱 穴

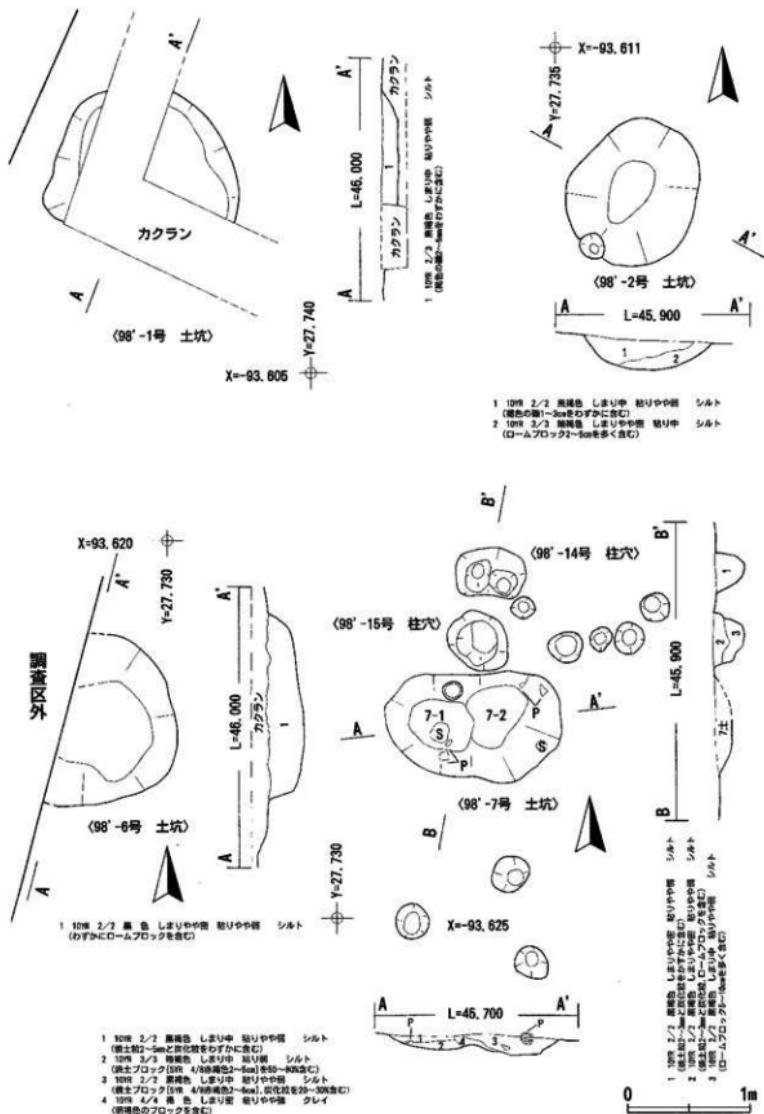
<位 置> X = -93,616 Y = 27,739 西  
<検出面> 褐色土(Ⅳ)層上位面  
<形 状> 円形  
<規 模> 60cm × 60cm × 10cm  
<遺 物> なし  
<時 期> 不明



第24図 竖穴住居跡

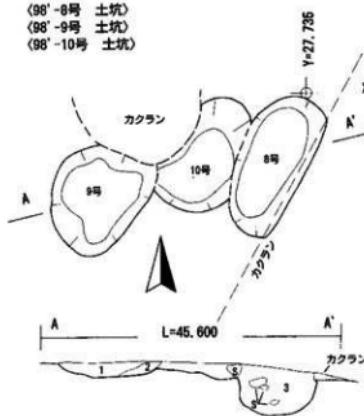


第25図 土坑・柱穴群

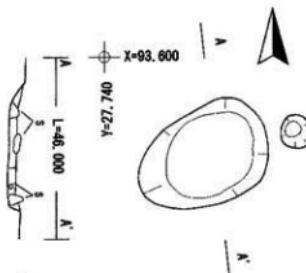


第26図 土坑

(98'-8号 土坑)  
(98'-9号 土坑)  
(98'-10号 土坑)



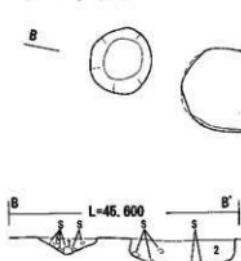
(98'-2号 柱穴)



- 1 10R 2/2 黒褐色 しまり良 粘り中 シルト  
(D-10R2-2cmを多く含む)
- 2 10R 3/4 黒褐色 しまり良 粘り中 シルト  
(D-1ムブロック-1cmを多く含む)
- 3 10R 黒褐色 しまりやや良 粘り中 シルト  
(黒色-赤褐色の粒をわずかに含む)

- 1 10R 2/2 黒褐色 しまり良 粘り中 シルト  
(ロームブロック-5cmを多く含む)

(98'-11号 柱穴)



(98'-6号 柱穴)

(98'-7号 柱穴)

(98'-8号 柱穴)

(98'-9号 柱穴)

(98'-10号 柱穴)

A L=45.600

- 1 10R 2/2 黒褐色 しまり良 粘り中 シルト  
(赤褐色の粒をわずかに含む)
- 2 10R 2/2 黒褐色 しまり良 粘り中 シルト  
(ロームブロックを含む)

3

2 1

5

3 2 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

2 3 4 5

1

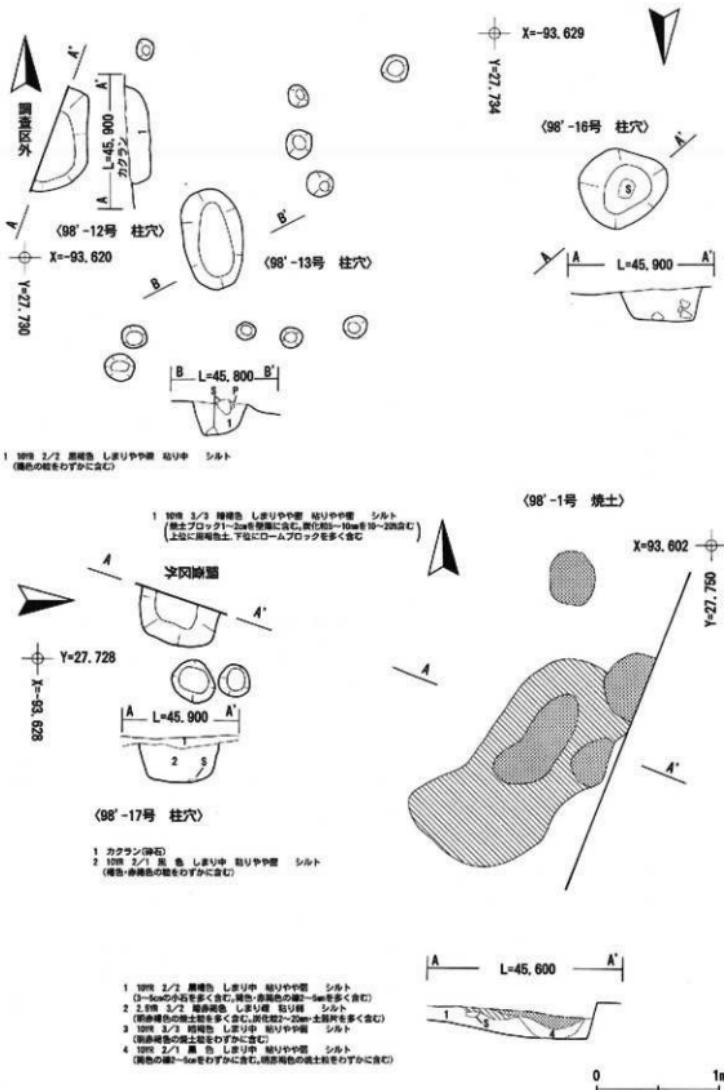
2 3 4 5

1

2 3 4 5

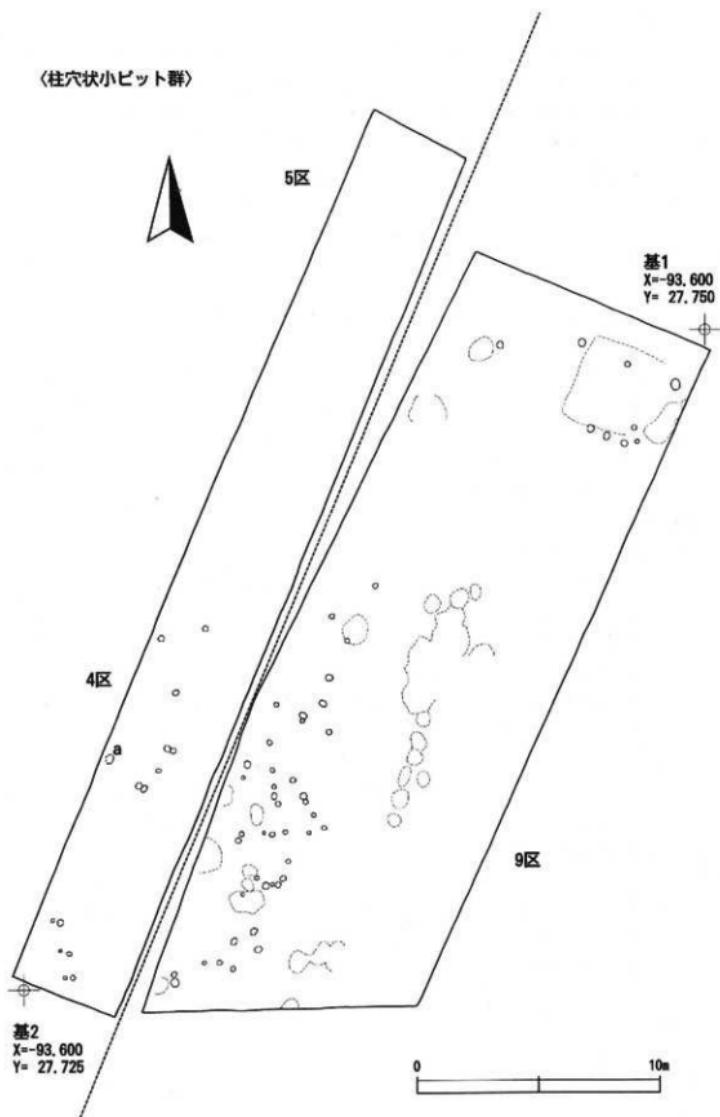
1

</



第28図 柱穴・焼土遺構

〈柱穴状小ピット群〉



第29図 柱穴状小ピット群

## 2. 出土遺物

出土した遺物は、総量で中コンテナ（規格：T-28）約1箱である。種類別にみると縄文土器片、土製品、不定形石器、礫石器、土師器、須恵器、かわらけ、陶磁器、金属製品、大型の種子である。

出土遺物の9割近くが遺構（埋土および検出面）からのものであり、1遺構中に時代・時期の異なる遺物が多く混在しており、遺構の時期に伴わないものも含めて、遺構ごとに掲載した。

### (1) 遺構内出土遺物

#### I 縄文土器

出土した縄文土器は、深鉢の胴部と台付きの鉢と思われる破片である。どちらも断片的で摩滅が激しく時期の特定は困難である。

#### II 石 器

1-不定形の剥片石器が1点と、2-火熱痕のある摩石片？が出土している。

#### III 土 師 器

A 杯 1-外面ロクロ調整、内面黒色処理されたもので、資料は少ないものの、底部は内調整されたものが主体と思われる。また、2-内面に黒色処理の痕がみられないものもある。

B 壺 1-あまり外反せず、内外面ロクロを使わない雑なナデ調整を施したものや、2-内外面ロクロ調整された口縁部で大きく外反するものなどがみられる。その中には、外面タキ形成後、ナデ調整された壺などもみられる。

#### IV 須 恵 器

A 杯 内外面ロクロ調整で底部回転糸切りのものが主体で、1-体部が直線的なものと、2-体部がやや内湾するものに分けられる。また、完全に還元炎焼成されていないものや、体部に墨書痕をもつものなどもみられる。

B 壺・壺 1-内外面にタキ日のものや、外面タキ日で内面アテ具痕の壺、2-内外面ロクロ調整された壺などがみられる。叩き具や当て具には、目の違うものが認められる。

C 蓋・鉢 内外面ロクロ形成された蓋と思われる破片や、内外面ロクロ形成された口縁付近で強く内湾する鉢と思われる破片が出土している。

#### V かわらけ

手づくねかわらけ片が1点、出土している。口縁部には2段のナデがみられ、面取りはされていないものである。器内面は、断片的かつ摩滅のため不明な点も多いが、不規則・多方向のナデと思われる。

底部外面には、不規則な指痕が浅く残っているのがわかる。

#### VI 陶 磁 器

1-常滑産と思われる陶磁壺の肩部片が1点出土している。外面には気泡状に付着した自然釉がみられ、内面には明瞭な輪づみ痕が残っている。また、2-大瀬相馬座と思われる陶磁器の口縁部破片が出土している。その他、3-白磁皿の底部破片が出土している。

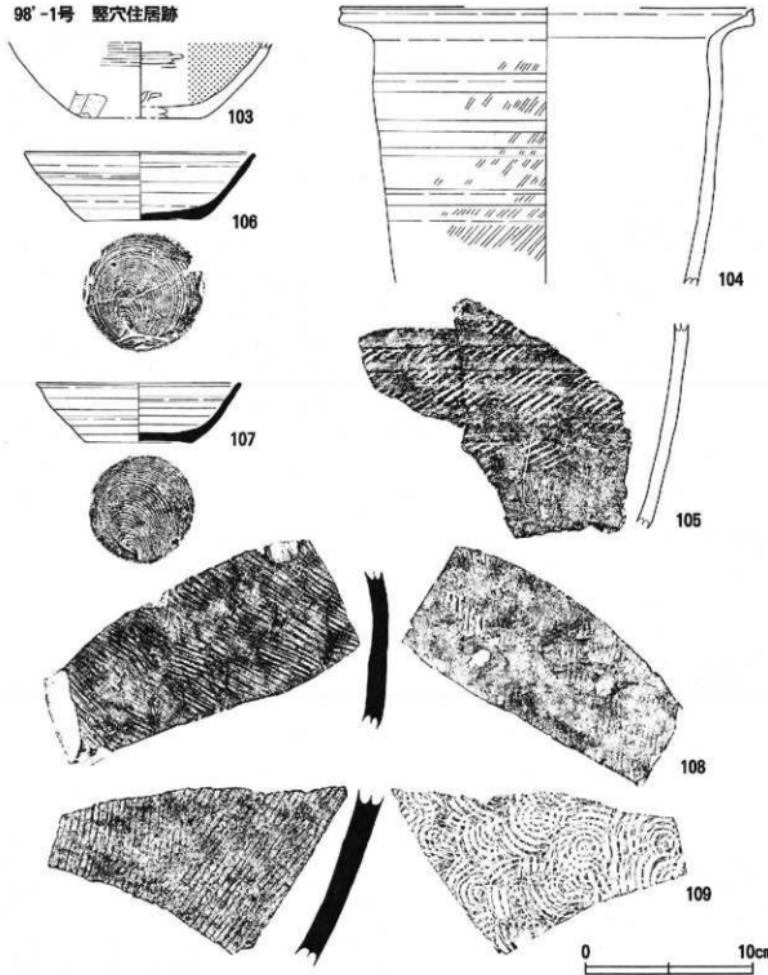
#### VII 金 属 製 品

断面が方形の釘が一点、出土している。

### (2) 遺構外出土遺物

摩滅の激しい縄文を施した深鉢片や、晩期と思われる深鉢片のほか、時期不明の円錐状の土製品、須恵器の环や、近世以降の在地産と思われるすり鉢片などが出土している。

98'-1号 穹穴住居跡

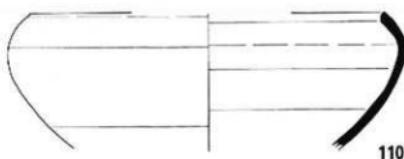


第6表 遺構内出土遺物観察表

No.	出土地点	部位	種類	岩種	部位	外面仕様	内面仕様	口径	底高	底径	備考	分類	写真
103	98'-1号住居 堆上	土器部	環	底部	ロクロ・ケズリ	無色地理	—	(4.6)	7.2	10YR 8/3浅黄褐	III A 1	32	
104	98'-1号住居 堆上部	土器部	環	口縁部	タタキ・ロクロ	ナデ	24.9	17.1	—	5YR 5/5褐色	III B 2	32	
105	98'-1号住居 堆上部	土器部	環	脚部	タタキ・ロクロ	ナデ	—	—	—	7.5YR 7.4/6において	III B 2	32	
106	98'-1号住居 堆上	土器部	環	全形	ロクロ・回転系切	ロクロ	13.7	4.2	7.0	10YR 7/2にない直線	IV A 1	32	
107	98'-1号住居 堆上部	土器部	環	全形	ロクロ・回転系切	ロクロ・板	12.2	4.6	6.4	10YR 6/2灰黃褐	IV A 1	32	
108	98'-1号住居 堆上部	土器部	環	脚部	タタキ	タタキ目	—	—	—	10YR 6/1褐色	IV B 1	32	
109	98'-1号住居 堆上部	土器部	環	脚部	タタキ	アナ孔	—	—	—	10YR 8/1褐色	IV B 1	33	

第30図 遺構内出土遺物

98'-1号 積穴住居跡

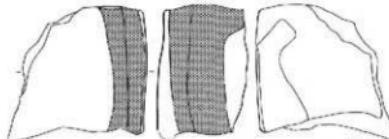
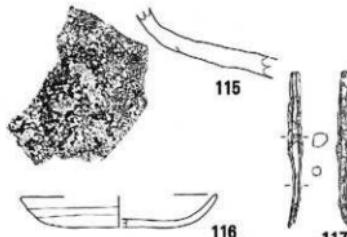


110

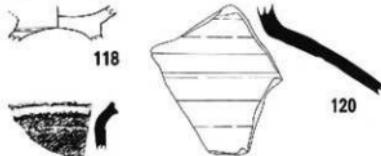
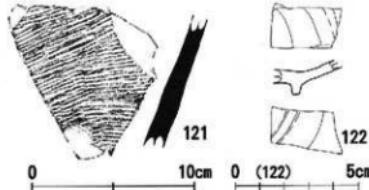


111

98'-3号 土坑

113  
114115  
116  
117

98'-4号 土坑

118  
119  
120

0 10cm 0 (122) 5cm

No.	出土地点	層位	種類	器形	部位	外面仕様	内面仕様	口径	器高	底径	備考	分類	写真
110	98'-1号土坑	検出面	須恵器	鉢	口縁部	ロクロ	ロクロ	(21.0)	(7.5)	10YR 7/1灰白	IV C	33	
111	98'-1号土坑	検出面	須恵器	豆	全形	ロクロ	ロクロ		3.9		10YR 6/2灰青	IV C	33
112	98'-2号土坑	検出	須恵器	盞	口縁部	ロクロ+輪	ロクロ				28YR 5/2灰白	IV B 2	33

No.	出土地点	層位	種類	石	質	長さcm	幅 cm	厚さcm	重量g	備考	分類	写真
113	98'-3号土坑	検出	磨石	安山岩、玄武岩		7.6	7.4	4.9	490.0	火熱痕?	II	33

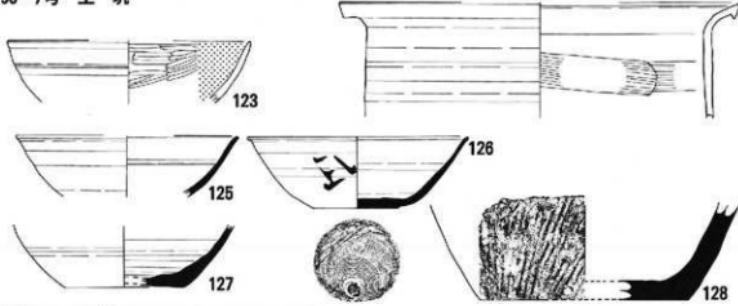
No.	出土地点	層位	種類	器形	部位	外面仕様	内面仕様	口径	器高	底径	備考	分類	写真
114	98'-3号土坑	上位	上層部	灰	口縁部	ロクロ	摩滅	(11.2)	(4.4)		7.5YR 7/4にない模	III A 2	33
115	98'-3号土坑	上位	陶器	甕	頭~斜	自然物	輪の痕				萬葉	VI 1	33
116	98'-3号土坑	上位	かわらけ	口~底	2段ナゲ	ナゲ		13.2	2.0	6.1	10YR 7/3に赤い黄斑	V	33
117	98'-3号土坑	上位	金輪器	甕							錆	III	33

No.	出土地点	層位	種類	器形	部位	外面仕様	内面仕様	口径	器高	底径	備考	分類	写真
118	98'-4号土坑	上位	上層	透杯形	底部	織文土器・厚底	側溝にかかるな沈痕				7.5YR 7/3にない模	I	33

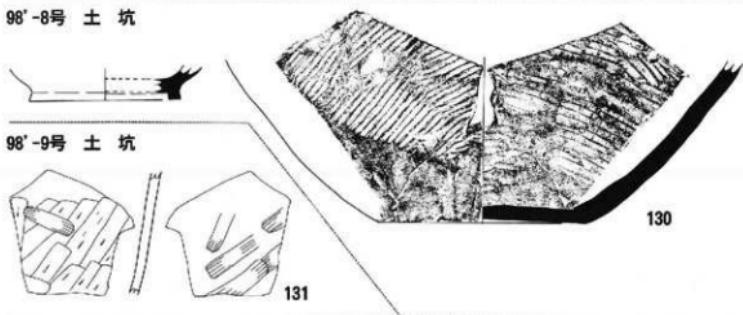
No.	出土地点	層位	種類	器形	部位	外面仕様	内面仕様	口径	器高	底径	備考	分類	写真
119	98'-4号土坑	上位	須恵器	甕	口縁部	ロクロ	ロクロ				10YR 3/1灰白	IV B 2	33
120	98'-4号土坑	上位	須恵器	甕	頭~斜	ロクロ	ロクロ				10YR 5/2灰青	IV D 2	33
121	98'-4号土坑	上位	須恵器	甕	側溝	タテキ	ナゲ				10YR 5/1灰白	IV B 1	33
122	98'-4号土坑	上位	金輪器	甕	底						白斑	VI 3	33

第31図 遺構内出土遺物 7

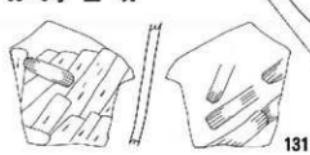
98'-7号土坑



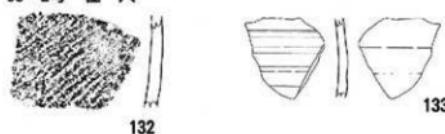
98'-8号土坑



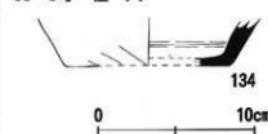
98'-9号土坑



98'-2号柱穴



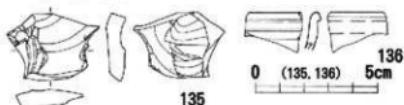
98'-5号柱穴



No.	出土地点	部位	種類	基盤	部位	外周仕様	内面仕様	口径	底高	底径	備考	分類	写真	
123	98'-1号土坑	上段	土器	环	上縁部	内側斜	内側斜	(H.2)	(3.9)	10YR 7/3にぶい黄橙	III A 1	34		
124	98'-7号土坑-2	中～下	土器	甌	口縁部	ロクロ	ナゲ	(24.9)	(7.9)	7.5YR 7/6褐	III B 2	34		
125	98'-7号土坑-1	底	土器	环	上縁部	内側斜	ロクロ	(10.8)	(3.9)	10YR 8/2黄黃	IV A 2	34		
126	98'-7号土坑	上段	土器	环	口～底	ロクロ・帶青	ロクロ	15.9	4.5	10YR 8/3淡黄綠	IV A 2	34		
127	98'-7号土坑-2	中～下	土器	甌	底部	ロクロ・凹點斜切	ロクロ	(4.0)	7.5	7.5YR 5/1褐灰	IV B 2	34		
128	98'-7号土坑	2	中～下	土器	甌	底部	タキオ	(4.2)	10YR 5/1褐色	IV B 1	34			
129	98'-8号土坑	埋土	印模	甌	底部	ロクロ	ロクロ	(2.1)	(0.0)	7.5YR 7/1灰白	IV B 2	34		
130	98'-8号土坑	埋土	印模	甌	底部	タキオ	タキオ	19.3	13.0	7.5YR 8/1褐灰	IV B 1	34		
131	98'-9号土坑	下段	土器	甌	剖面	内側斜	ナゲ			7.5YR 7/4にぶい褐	III B	34		
No.														
No.														
132	98'-2号柱穴	埋土	土器	深井	剖面	内面仕様	内面仕様	口径	底高	底径	備考	分類	写真	
132	98'-2号柱穴	埋土	土器	深井	剖面	内面仕様	内面仕様	口径	底高	底径	10YR 7/3にぶい黄橙	I	34	
No.														
133	98'-2号柱穴	埋土	土器	深井	剖面	ロクロ	ロクロ				7.5YR 6/4.1にぶい褐	II B 2	34	
134	98'-5号柱穴	埋土	土器	深井	底部						(2.0)	10YR 6/1褐灰	IV B	34

第32図 遺構内出土遺物 8

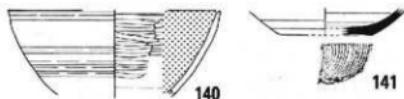
98'-6号柱穴



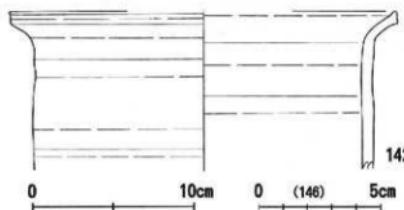
0 (135, 136) 5cm



98'-13号柱穴



0 (140) 5cm



0 (142) 5cm

98'-9号柱穴



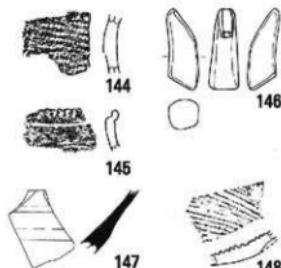
98'-10号柱穴



柱穴状小ピット a



遺構外出土遺物



No.	出土地点	層位	種類	器種	石	質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考	分類	写真
135	98'-6号柱穴	理土	不定形	頁岩	北上産地		27	37	0.7	8.3		II 1	34
136	98'-6号柱穴	埋土	瓦器	壺	口縁部						大黒粗馬	VII 2	35
137	98'-6号柱穴	埋土	灰陶	壺	肩部						6 Y R 6 / 1 頸齊火	IVB 1	35
138	98'-9号柱穴	埋土	土師器	壺	口縁部	厚底					6 Y R 6 / 1 に近い壺	III B	35
139	98'-10号柱穴	埋土	土師器	环	口縁部	クロコ					7.5 Y R 7 / 4 に近い壺	III A 1	35
140	98'-13号柱穴	埋土	土師器	环	口縁部	クロコ					7.5 Y R 7 / 4 に近い壺	III A 1	35
141	98'-13号柱穴	埋土	土師器	环	底部	クロコ					10 Y R 7 / 1 細火	IV A	35
142	98'-13号柱穴	埋土	土師器	環	口縁部	クロコ	(22.0)	(9.8)			7.5 Y R 8 / 4 深鉢	III B 2	35
143	柱穴状小ピット a	埋土	土師器	環	口縁部	ナデ					7.5 Y R 7 / 4 に近い壺	III B 1	35

第7表 遺構外出土遺物観察表

No.	出土地点	層位	種類	器種	部位	外面仕様	内面仕様	口径	断高	底径	備考	分類	写真
144	98'-1号住居東	検出面	土器	深鉢	口縁部	縫文土器・外薄・摩減・L.R・斜					10 Y R 5 / 4 に近い貴倖	I	35
145	9区南	検出面	土器	深鉢	側部	縫文土器・摩減・口斜丸	斜縫文				10 Y R 8 / 4 深鉢	I	35
146	9区南	盛土	土製品	-	-	彎曲した円錐形・穿孔あり					7.5 Y R 7 / 4 に近い壺	III B	35
No.	出土地点	層位	種類	器種	部位	外面仕様	内面仕様	口径	断高	底径	備考	分類	写真
147	9区北	表層	泥質器	環	口縁部	クロコ					10 Y R 7 / 3 に近い貴倖	IV A 2	35
148	B A 4 C	盛土	土製品	すり鉢	側部						丸形(在地、頭きしめ)	VI	35

第33図 遺構内・遺構外出土遺物

### 3. 平成10年度調査のまとめ

#### 【遺構】

##### (1) 遺跡の地形と遺構分布（第34図）

伊沢扇状地の東端、水沢段丘の縁辺に位置する当遺跡は、現在の建物や舗装道路、は場整備によって、大きく変形・地層が改変されている地域である。今回検出された遺構や、現在の地形などから、大胆に当時の地形や遺構を予想してみると、おおよそ次の図（第34図）のような分布になるのではと思われる。

##### (2) 重複する土坑・柱穴群（第35図）

遺構検出時は、多少不定形ながら1つの遺構と思われたが、精査段階で、複雑な掘り込みをしていることが判明し、多くの土坑や柱穴が重複したものか、それとも何か特別の意味をもった遺構としてとらえるべきなのか、その性質について、その類例等の検討を試みた。

その結果、林前I遺跡（水沢市教委 1996『水沢遺跡群範囲確認調査』3 林前I遺跡）に2例、また、北野IV遺跡（岩文振報告書第298集）で検出されており、重複している土坑数は6～8と多く、土坑群としてみた場合、平面形は梢円形、比較的浅く平坦に掘り込まれており、埋土は、薄くレンズ状に堆積する部分と、単層で一概に埋め戻されたと思われる部分が混在している。一方、佐野原遺跡の土坑・柱穴群は、ほぼ単一の層で、出土遺物から時代時期の隔たるもののが確認される。また、現代の擾乱もうけており、遺構の性格について全体を把握するには困難な点も多い。

結論を導き出すには不十分なもの、今回検出された土坑群は、重複したものと考えられ、その性質や、遺構形成について、他2遺跡の例との比較類推までには至らなかった。

#### 【遺物】

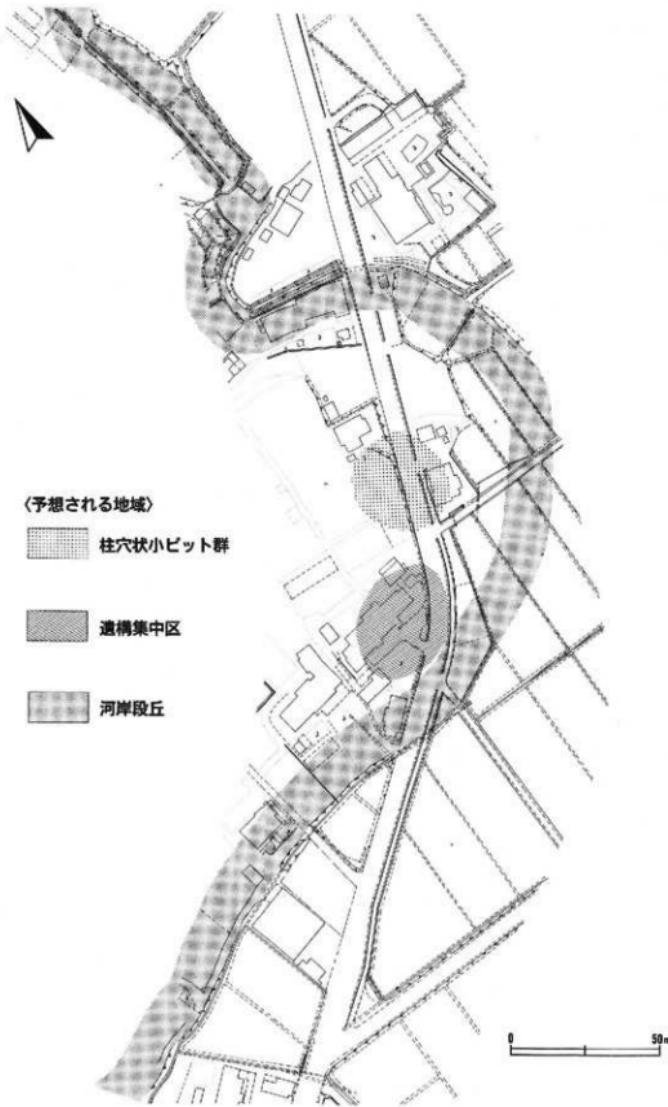
##### (1) 土器の焼成

当遺跡の出土の土師器と須恵器について焼成について着目すると、個体ごとに多少の差異がみられる。緻密な粘土を用いたものでも焼成できる「覆い焼き」による土器（土師器）や、より高溫で焼ける「天井のない窯」（煙管窯）で焼かれた上器（かわらけ）、また、陶磁器の焼成にも使われ、極高溫の「登り窯」で焼かれた器（須恵器）など、焼き方や焼かれる温度によって、種類が変わってくる。高温で焼かれるもの程、緻密で硬質であることは述べるまでもないが、当遺跡出土の須恵器についてみると、器形や調整は明らかに須恵器であるが、褐色に近い上師器の色調に似たものや、緑灰色で硬質の還元炎焼成されたものとがある。

##### (2) 3号土坑の手づくねかわらけ

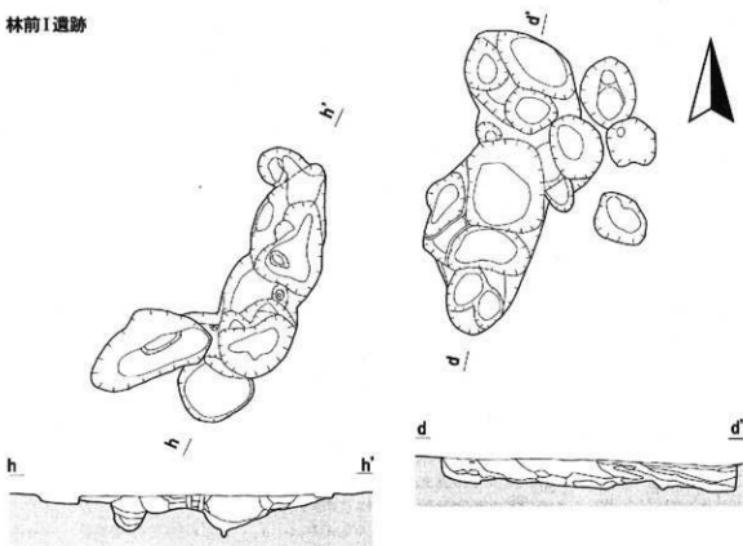
破棄された後、火熱を受けたと思われる内面が赤橙色（10R 6／6）のかわらけ片が出土している。接合によって、口縁部から底部まで残存しており、全形をうかがい知ることができる。

3号土坑からは、火熱を受けたと思われる礫石器？や、内面に黒色処理の痕がみられない上師器の杯、常滑窯と思われる陶器壺や釘などの金属製品も出土しており、平泉町出土遺物（12世紀以降）との比較が可能ではないかと思われる。

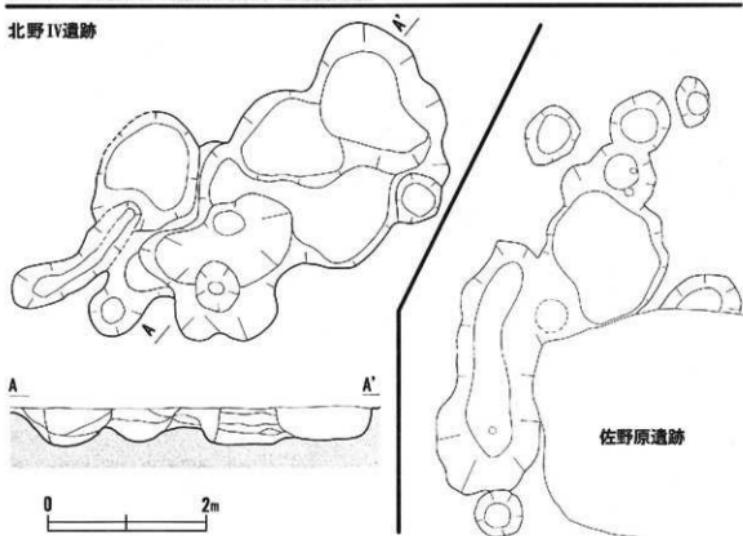


第34図 地形と遺構

林前I遺跡



北野IV遺跡



第35図 重複土坑群

<参考文献>

- |             |      |                               |                      |
|-------------|------|-------------------------------|----------------------|
| 岩手県教育委員会    | 1979 | 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 I』         | 第33集                 |
| 岩手県教育委員会    | 1979 | 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 IV』        | 第50集                 |
| 岩手県教育委員会    | 1980 | 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化調査報告書 V』       | 第54集                 |
| 岩手県教育委員会    | 1981 | 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化調査報告書 VI』      | 第60集                 |
| 岩手県教育委員会    | 1982 | 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化調査報告書 VII』     | 第72集                 |
| 岩手県教育委員会    | 1996 | 『岩手県内遺跡発掘調査報告書 2 北野IV遺跡』      | 第98号                 |
| 動岩手県文化振興事業団 | 1997 | 『白井坂 I・II 遺跡発掘調査報告書』          | 一杉沢昭太郎ほか - 第248集     |
| 岩手県立博物館     | 1982 | 『岩手の土器』                       | - 高橋 信雄ほか -          |
| 水沢市教育委員会    | 1979 | 『胆沢城跡』                        | 30次 ~ 34次 調査         |
| 水沢市教育委員会    | 1980 | 『胆沢城跡』                        | 32・35次 ~ 37次 調査      |
| 水沢市教育委員会    | 1982 | 『胆沢城跡』                        | 39次 ~ 40次 調査         |
| 水沢市教育委員会    | 1983 | 『胆沢城跡』                        | 41次 ~ 42次 調査         |
| 水沢市教育委員会    | 1984 | 『胆沢城跡』                        | 43次                  |
| 水沢市教育委員会    | 1985 | 『胆沢城跡』                        | 45次 ~ 48次 調査         |
| 水沢市教育委員会    | 1986 | 『胆沢城跡』                        | 49次 ~ 51次 調査         |
| 水沢市教育委員会    | 1987 | 『胆沢城跡』                        | 52次 ~ 53次 調査         |
| 水沢市教育委員会    | 1987 | 『胆沢城跡』                        | 52次 ~ 53次 調査         |
| 水沢市教育委員会    | 1979 | 『林前遺跡』                        | 水沢市文化財報告書 第 3集       |
| 水沢市教育委員会    | 1988 | 『水沢遺跡群範囲確認調査                  | - 林前遺跡ほか -           |
| 水沢市教育委員会    | 1989 | 『水沢遺跡群範囲確認調査                  | - 熊之堂遺跡ほか -          |
| 水沢市教育委員会    | 1991 | 『水沢遺跡群範囲確認調査                  | - 佐野宮遺跡ほか -          |
| 水沢市教育委員会    | 1993 | 『水沢遺跡群範囲確認調査                  | - 大学 I 遺跡ほか -        |
| 水沢市教育委員会    | 1995 | 『水沢遺跡群範囲確認調査                  | - 熊之堂遺跡ほか -          |
| 水沢市教育委員会    | 1996 | 『水沢遺跡群範囲確認調査                  | - 東人塚 I 遺跡ほか -       |
| 水沢市教育委員会    | 1997 | 『水沢遺跡群範囲確認調査                  | - 東人塚 II 遺跡ほか -      |
| 水沢市教育委員会    | 1998 | 『水沢遺跡群範囲確認調査                  | - 東人塚 III 遺跡ほか -     |
| 水沢市編纂委員会    | 1978 | 『水沢市史 1 原始~古代』                |                      |
| 歴史時代土器研究会   | 1978 | 『歴史時代土器の研究 I - 東日本における上器編年 -』 |                      |
| 考古学シリーズ     |      | 『[土器の知識] - 第5章 墓葬土器と刻線土器 -』   |                      |
| 伊藤 博幸       |      | 『日本土器辞典』                      | - 岩手県の10世紀の土器 -      |
| 伊藤 博幸       | 1998 | 『第24回 古代城柵官衙遺跡検討会資料』          | - 北上盆地南部の様相 -        |
| 久保田正寿       |      | 『土器の焼成 I』                     | - 土師器の焼成実験 -         |
| 酒井・伊藤       | 1995 | 『須恵器集成図録 第4巻 - 東日本編 II -』     | 雄山閣                  |
| 松木 建速       | 1996 | 『岩文瓶埋蔵文化財センター紀要 XIII』         | - 桐之御所蔵出上かわらけ分類試験 -  |
| 松木 建速       | 1994 | 『岩文瓶埋蔵文化財センター紀要 XIV』          | - 手づくねかわらけからみた個の解釈 - |
| 松木 建速       | 1995 | 『御之御所跡遺跡発掘調査報告書』              | - 分冊3 考察編 -          |
| 八木 光則       | 1993 | 『第18回 古代城柵官衙遺跡検討会資料』          | - 古代斯波郡と爾孫体の土器様相 -   |

## VI 各種分析

(1) 佐野原遺跡出土材料の樹種

1号井戸跡の縦枠材 平成9年度調査

(2) 佐野原遺跡出土材・種実の樹種

4号土坑内杭  
遺構外出土種実 平成10年度調査

## (1) 佐野原遺跡出土材の樹種

高橋 利彦（木工舎「ゆい」）

### 1. 試料

試料は3点で、平安時代以降（？）のものとされる井戸の縦枠材である。いずれの材にも井戸枠材としては用をなしていないほぞ穴が、複数開けられていることから建築材の転用と考える。

### 2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版（図版1）も作製した。なお作製したプレパラートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

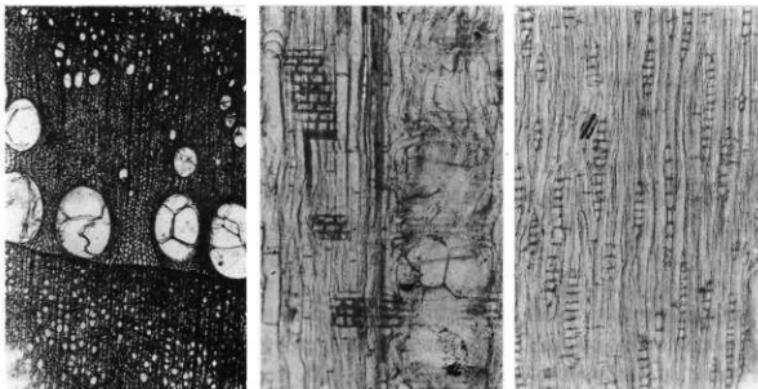
### 3. 結果

試料はいずれもクリに同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。

#### ・クリ (*Castanopsis crenata*) ブナ科 №1, 2, 3

環孔材で孔圈内部は1～4列、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では梢円形～円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った梢円形～多角形。道管は單穿穴をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では櫛状～網目状となる。放射組織は同性、単（一部2）列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽されている落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、椿木や海苔糀染などの用途が知られている。



木口

×40 枠目

×100 板目

×100

図版 1 クリ No.2

樹木の肥大成長方向は木口では画面下から上へ  
板目では左から右

## (2) 佐野原遺跡出土材・種実の樹種

高橋 利彦（木工舎「ゆい」）

### 1. 試料

試料は平安時代以降のものとされる4号土坑中から検出された杭と種実各1点である。杭は十坑の底面から出土しているが、十坑と杭の関係は不明とされている。種実は埋土の上層から検出されている。

### 2. 方法

杭材は剃刀の刃を用いて試料の木口・粙目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に材の顕微鏡写真と種実の写真図版（図版1）も作製した。なお、種実は岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに返却され、作製したプレパラートは木工舎「ゆい」に保管されている。

### 3. 結果

杭材はヤマグワに同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、科名・学名・和名は「日本の野生植物 木本I・II」（佐竹ほか 1989）にしたがい、一般的な性質などについては「木の事典 第1巻～第17巻」（平井 1979～1982）も参考にした。

#### ・ヤマグワ (*Morus australis*) クワ科

環孔材で孔眼部は多列、晚材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は横断面では梢円形、単独または2～3個が複合、小道管は横断面では多角形で複合管孔となる。道管は單穿孔をもち、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～5細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周閉状～离状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州・琉球の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、多くの園芸品種があり養蚕に利用されている。クワ属はヤマグワの他に4種が自生するが、西南日本に分布するケグワ (*M. cathayana*) を除くとその分布域はごく限られている。ヤマグワの材はやや重硬で強韌、加工はやや困難で、保存性は高い。装飾材や器具・家具材として用いられ、樹皮は和紙の原料や染料となり、果実は食用となる。

種実はモモ (*Prunus persica* パラ科) の核<sup>1)</sup>であった。炭化はしていない。

モモの核は木化しているうえに大型に目につきやすいため、種実の中では出土の報告が多く、江刺市落合Ⅱ遺跡<sup>2)</sup>（村井 1980）や永沢市石出遺跡（岩手県教育委員会 1981）出土試料でノモモ<sup>3)</sup>とされているものもあることである。

なお、モモやオニグルミの核は目につきやすいため単体で採取されることが多いが、これらが残存する堆積環境では他の種実も保存されている可能性がある。このような場合には周囲の土壤も水洗篩別（1mmメッシュ程度）することをお奨めする。

#### <注>

- 1) 通常、種（たね）と呼ばれる部分である。植物学的にはこれは種子（しゅし）ではなく、3層に分化した果皮の最内層（内果皮）が木化したものである（ちなみに果肉は次の中果皮が多肉化したもの）。眞の種子はその中にある仁（じん）と呼ばれる部分【同じサクラ属のウメ（*Prunus mume*）のいわゆる天神様や、アーモンド（*P. amygdalus*）のナツツも同じ】である。
- 2) 筆者の手元には報告書の一部のコピーしかないと断定できないが、報告書の「図版56」の「7. オニグルミ」とされているものがモモ核のようである。ちなみに、「1. ササゲ」はモクレン属（ホオノキかコブシ）、「2. ノモモ」は小型のサクラ属（エゴノキ属も含まれるか？）、「3. コムギ」の大半はクマヤナギ属、「5. サンショウ」の中にはミズキのほか少なくとも4種類以上が含まれているようである。
- 3) 植物分類学上、「ノモモ」という種類はない。モモは中国大陆原産で、日本には自生していないとされている。渡来年代はかなり古いと考えられ、静岡県登呂遺跡からも出土している（前川 1981）が、現在栽培され、食用となっている品種は、明治時代以降に中国や欧米から導入したものである。古代から各地で広く栽培されてきたものの中には半は野生化したものもあり、これを野（生の）桃=ノモモと呼ぶことがあるようで、村井氏もこの意味で使っているようである。

#### <引用文献>

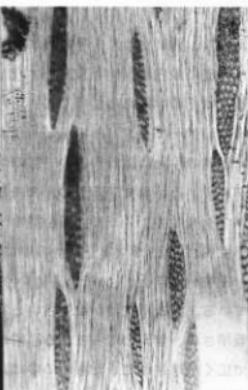
- 平井 信二 1979~1982 「木の事典 第1巻~第17巻」、かなえ書房
- 岩手県教育委員会 1981 植物遺体鑑定結果、「岩手県文化財調査報告書第61集 東北報質自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 -XII- (石田遺跡)」、岩手県教育委員会・日本道路公團、297 (同定は村井三郎氏による)
- 前川 文夫 1981 植物の名前の話、八坂書房、164pp.
- 村井 三郎 1980 落合Ⅱ遺跡出土植物遺体鑑定報告、「岩手県文化財調査報告書第50集 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 -VI-」、岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局、347~348.
- 佐竹 義輔・原 寛・瓦理 後次・冨成 忠夫（編） 1989 「日本の野生植物 本木I・II」、平凡社、321・305pp.



木口 ×40



柾目 ×100



板目 ×100

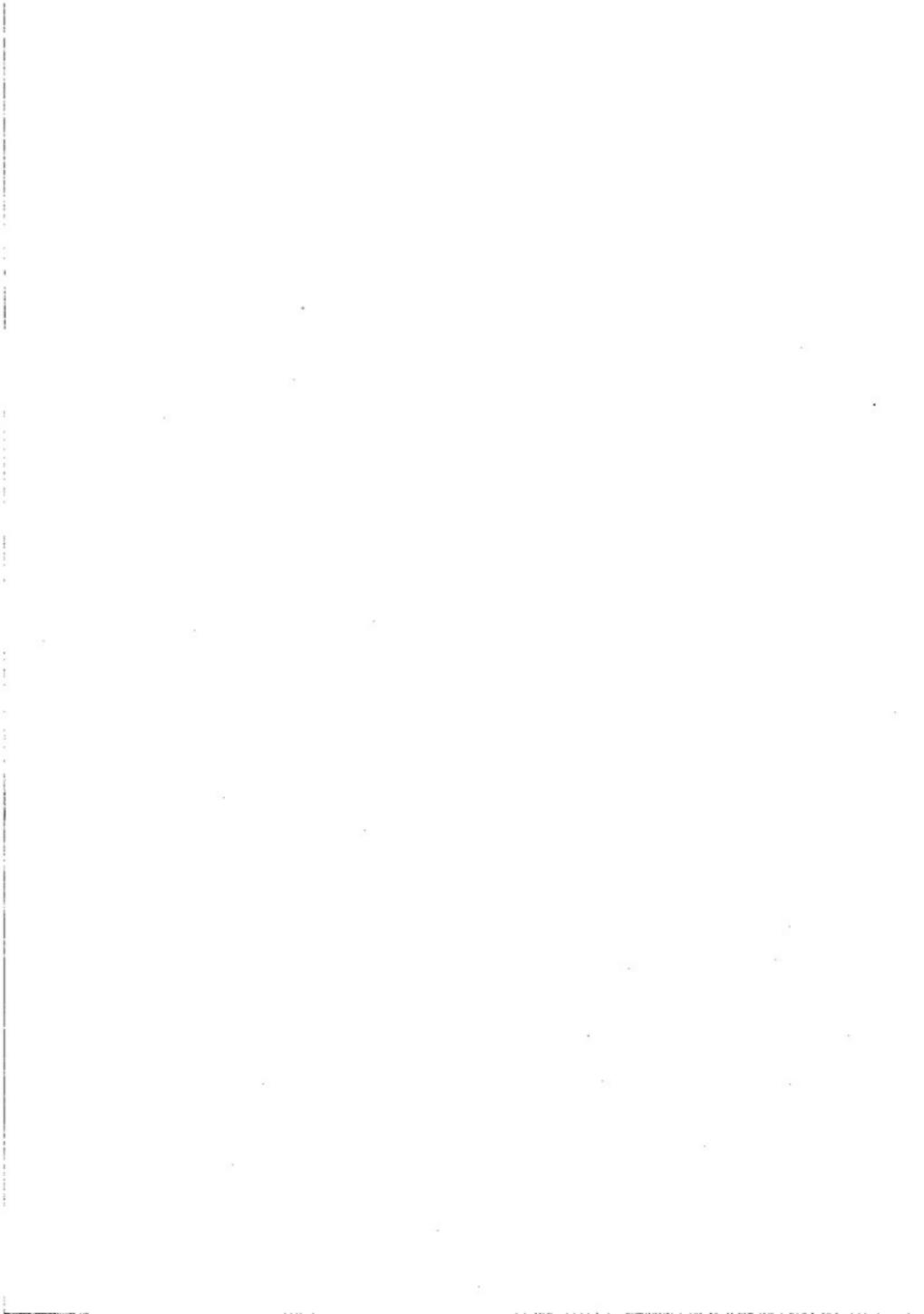
ヤマグワ 杖

樹木の肥大成長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右



モモ 核(実寸)

# 写 真 図 版





上空 西方から（航空写真）



上空から（航空写真）

写真図版 1 遺跡遠景・航空写真



1号住居跡



断面 A-B

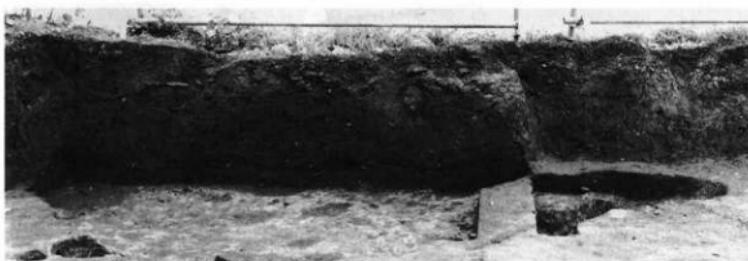


断面 C-D

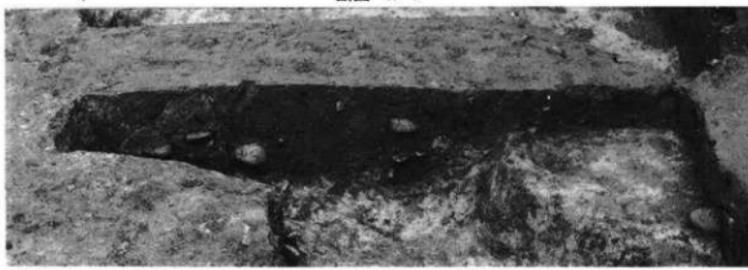
写真図版 2 1号住居跡



2号住居跡

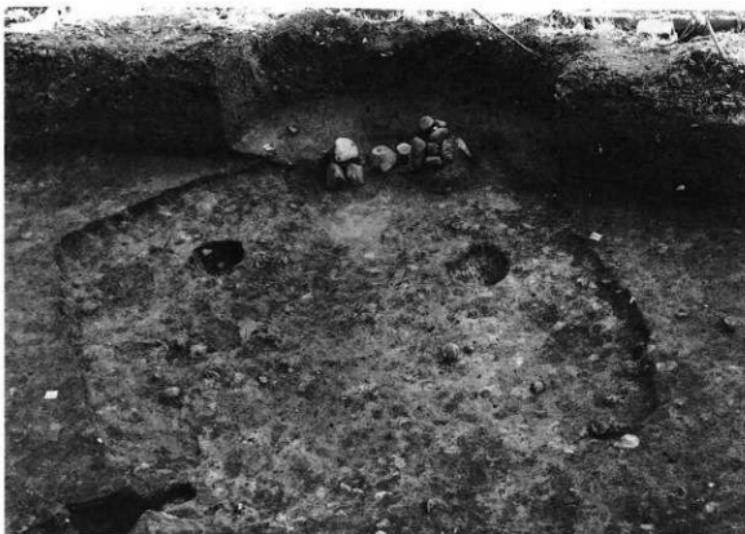


断面 A-B



断面 C-D

写真図版 3 2号住居跡



4号住居跡



断面 B-A



断面 C-D

写真図版 4 4号住居跡



4号住居跡 遺物出土状況



4号住居跡 カマド



カマド 断面 A-B

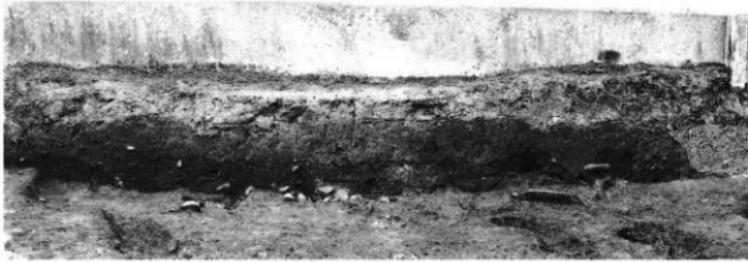


カマド 断面 C-D



5号住居跡・6号住居跡

写真図版5 4号住居跡(2)・5号住居跡・6号住居跡(1)



5号住居跡 6号住居跡 断面 A-B



6号住居跡 断面 E-F



5号住居跡 カマド 袖土

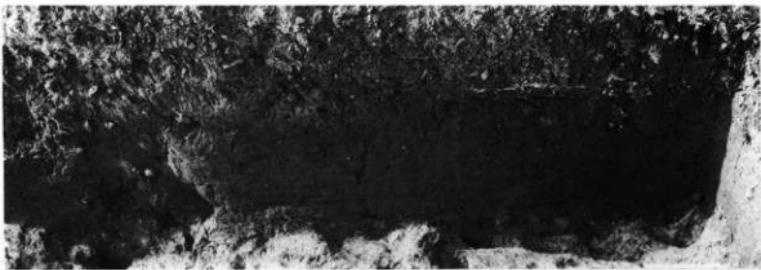


カマド 袖 断面



7号住居跡

写真図版 6 5号住居跡・6号住居跡(2)・7号住居跡(1)



7号住居跡 断面 A-A'



7号住居跡 断面 C-D



7号住居跡 P2 断面



1号竪穴建物跡 南→

写真図版 7 7号住居跡(2)・1号竪穴建物跡(1)



1号竪穴建物跡 断面

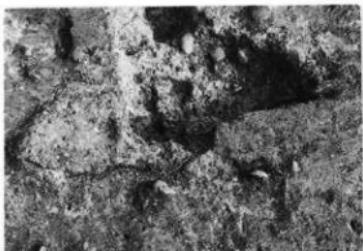


2号竪穴建物跡



断面 J-1

写真図版 8 1号竪穴建物跡(2)・2号竪穴建物跡(1)



2号竪穴建物跡 地床炉



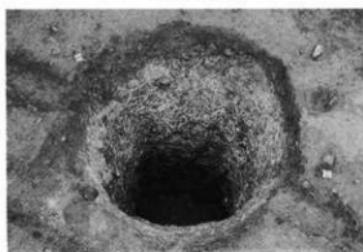
地床炉 断面



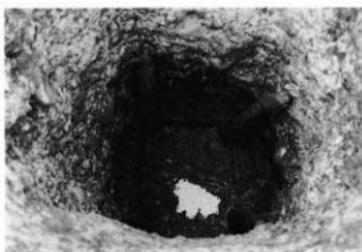
1号住居状遺構



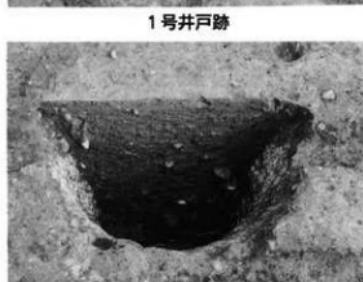
1号住居状遺構 断面



1号井戸跡



1号井戸跡 検出状況



1号井戸跡 断面



1号力マド状遺構

写真図版 9 2号竪穴建物跡(2)・住居状遺構・井戸跡・1号力マド状遺構(1)



1号カマド状遺構



1号カマド状遺構 断面



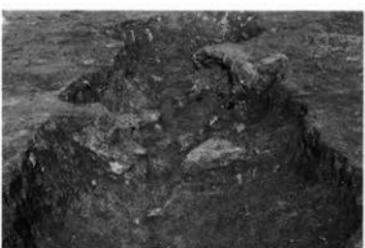
1号土坑



1号土坑 焼土形成状況



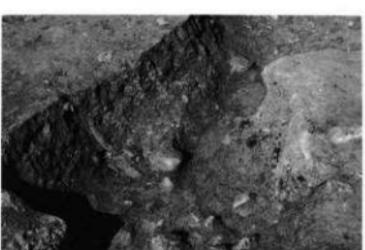
1号土坑 掘り方



焼土部分 断面 C-D



1号土坑 断面



焼土部分 断面 E-F

写真図版10 1号カマド状遺構(2)・土坑 (1号)



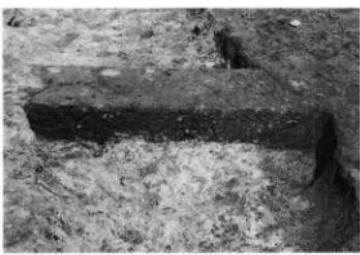
2号土坑



2号土坑 断面



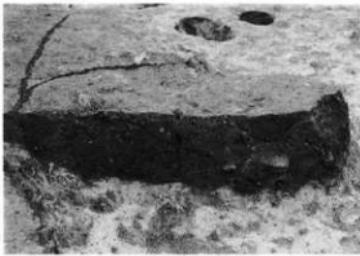
3号土坑



3号土坑 断面



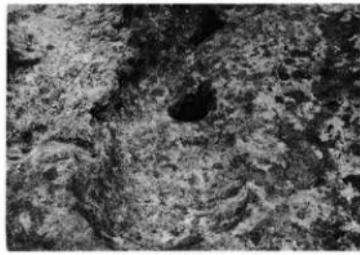
6号土坑



6号土坑 断面

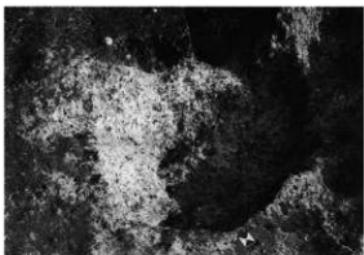


5号土坑



4号土坑

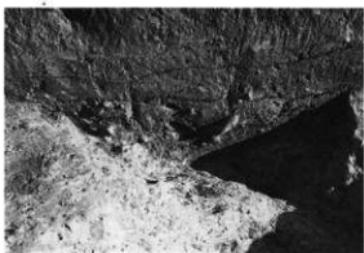
写真図版11 土坑（2号～6号）



7号土坑



7号土坑 8号土坑 断面



8号土坑 断面



10号土坑~13号土坑



9号土坑



9号土坑 10号土坑 断面 G—H



11号土坑 12号土坑 断面 A—B



13号土坑 断面 E—F

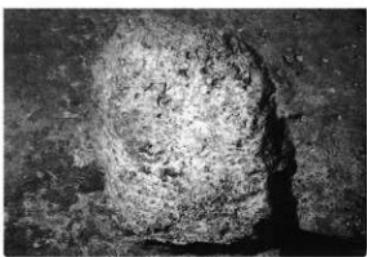
写真图版12 土坑（7号~13号）



14号土坑



14号土坑 断面



15号土坑



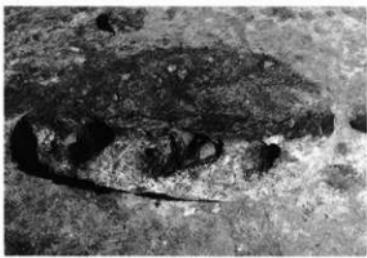
15号土坑 断面



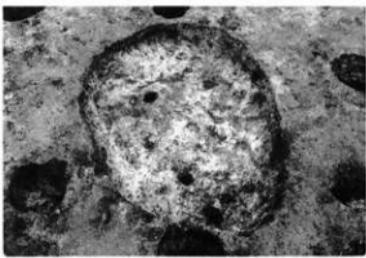
16号土坑 遗物出土状况



15号土坑 断面 A—B

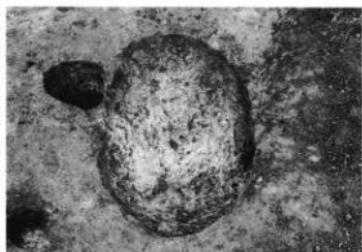


16号土坑 断面



16号土坑

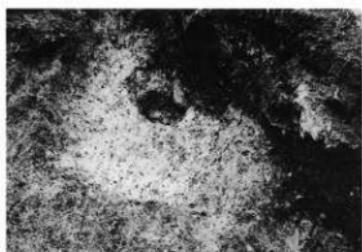
写真図版13 土坑（14号～16号）



17号土坑



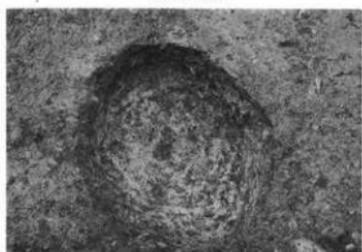
17号土坑 断面



18号土坑



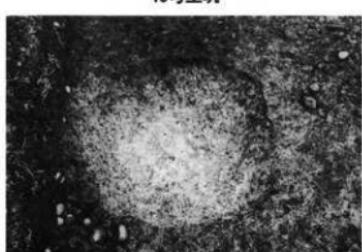
18号土坑 断面



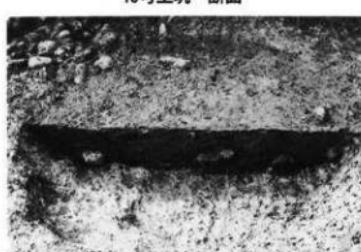
19号土坑



19号土坑 断面



20号土坑



20号土坑 断面

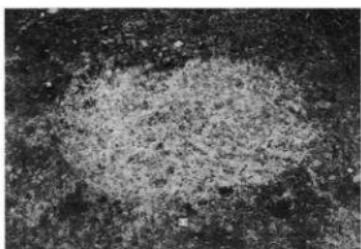
写真図版14 土坑（17号～20号）



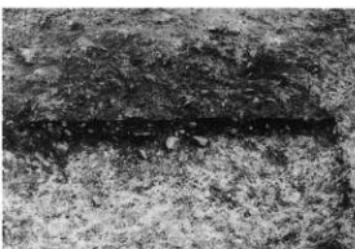
作業風景



21号土坑



22号土坑



22号土坑 断面



1号集石



1号集石 断面

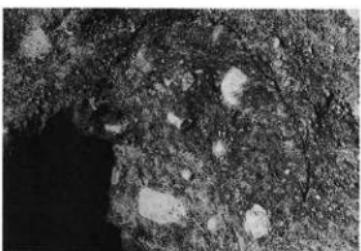


1号焼土遺構



1号焼土遺構 断面

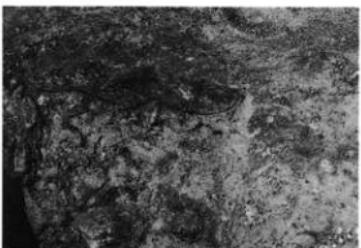
写真図版15 土坑(21号～22号)・集石・1号焼土遺構



2号焼土遺構



1号溝跡 北半 南→



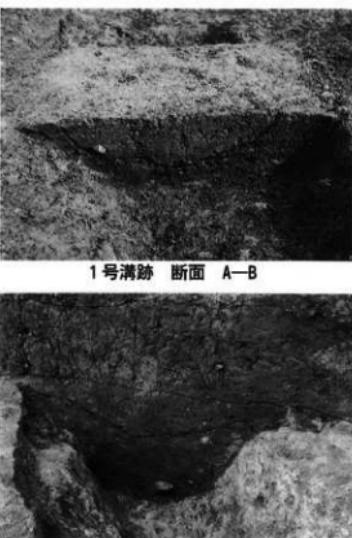
2号焼土遺構 断面



1号溝跡 南半 北→



2号溝跡



1号溝跡 断面 A—B

2号溝跡 断面

写真図版16 2号焼土遺構・溝跡



2区-2 柱穴状土坑完掘状況



3区 柱穴状土坑完掘状況

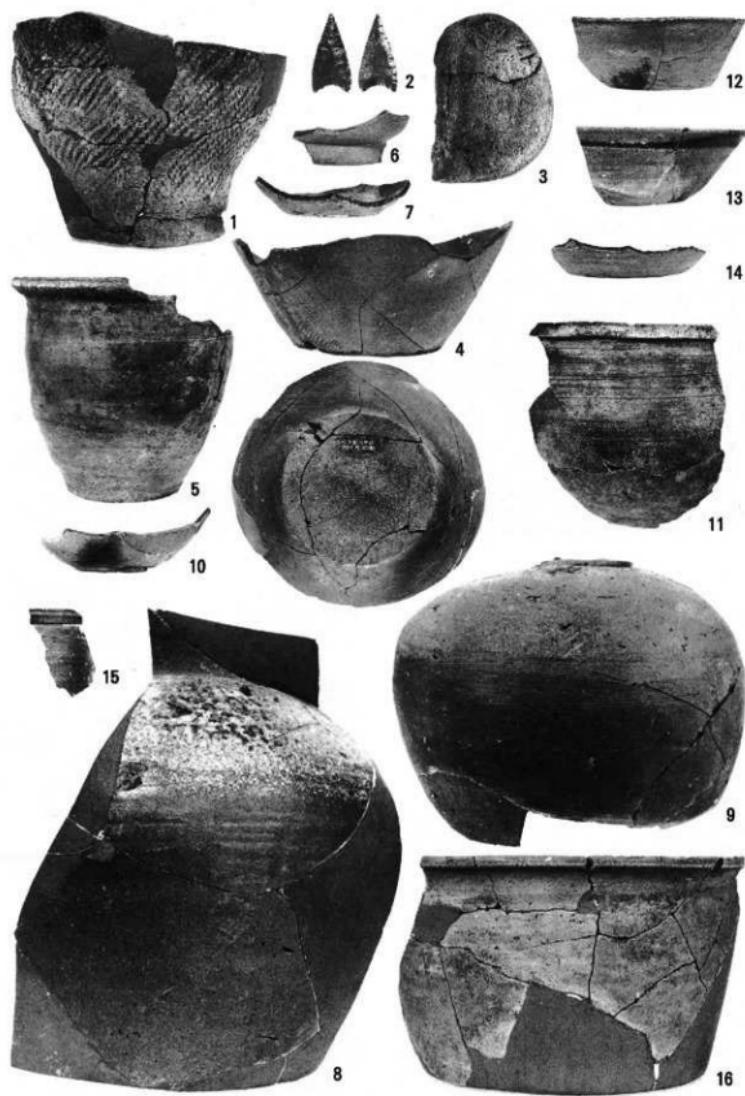


作業風景（3区）

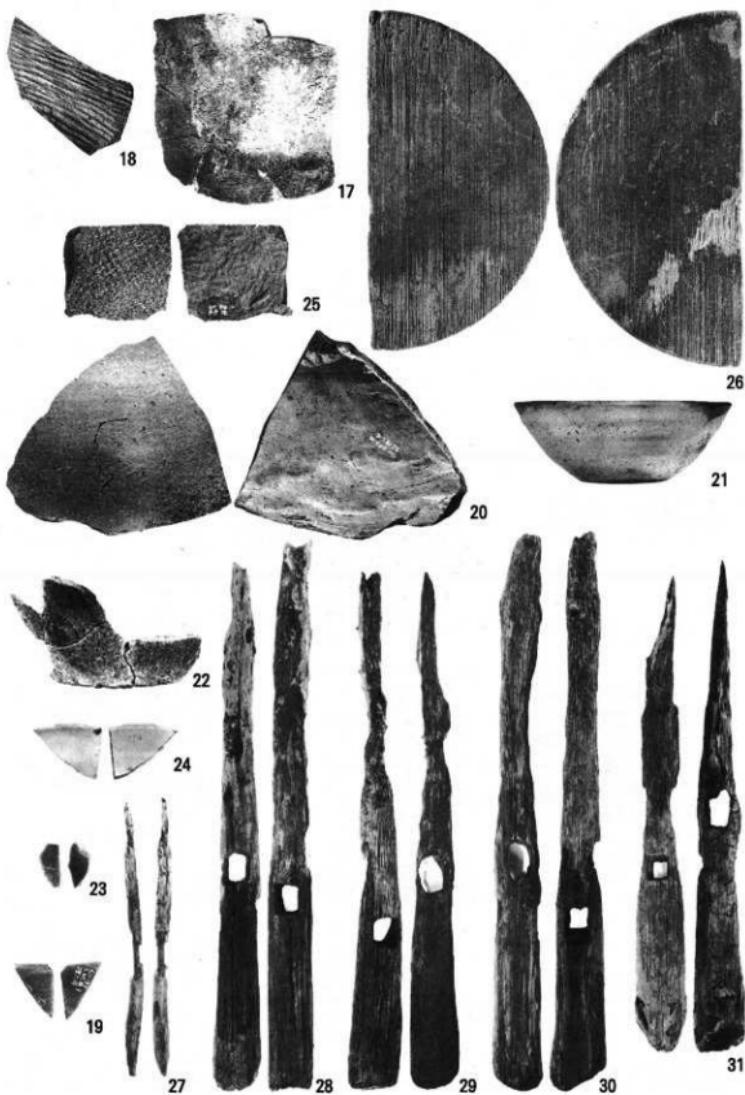


作業風景（8区）

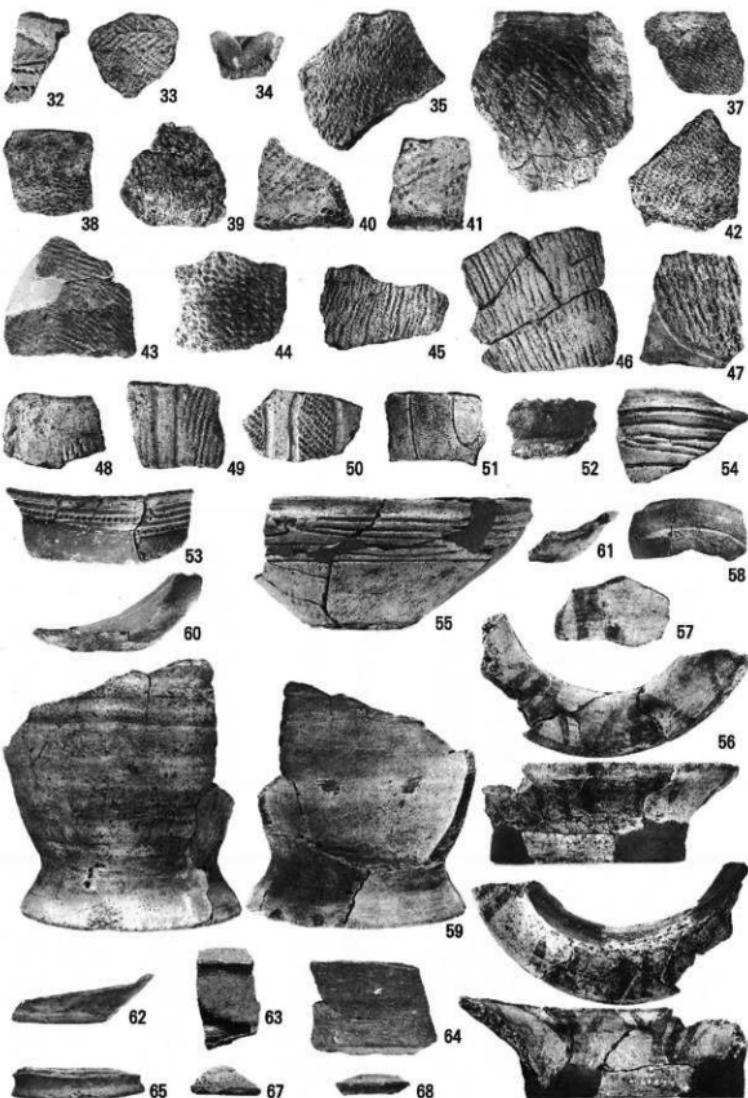
写真図版17 2区-2・3区 柱穴状土坑



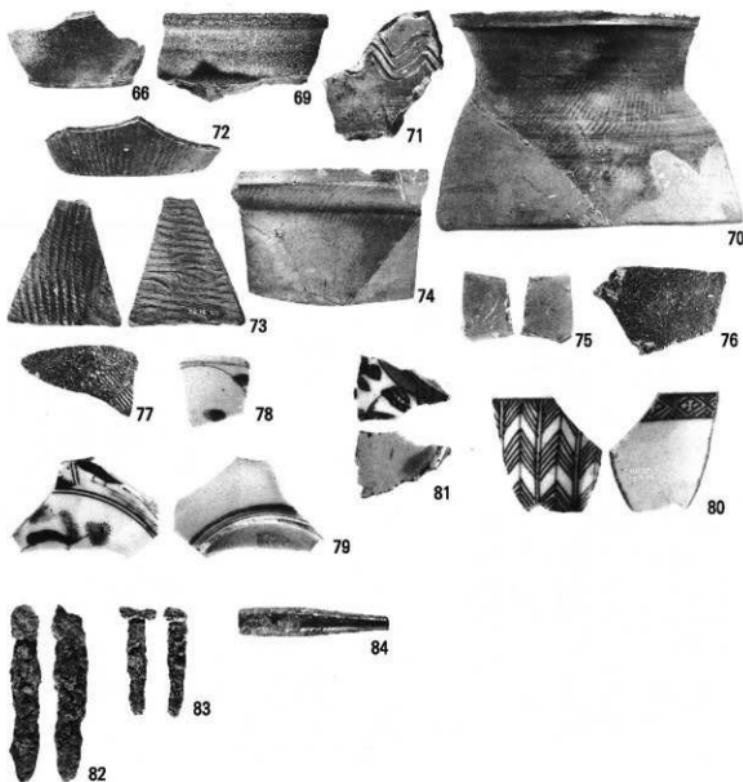
写真図版18 遺構内出土遺物 1 (遺物番号 1 ~ 16)



写真図版19 遺構内出土遺物 2 (遺物番号 17 ~ 31)



写真図版20 遺構外出土遺物 1 (遺物番号 32 ~ 68)



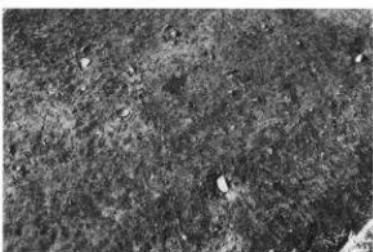
写真図版21 造構外出土遺物 2 (遺物番号 69 ~ 84)



写真図版22 遺構外出土遺物 3 (遺物番号 85 ~ 102)



完掘状況（4・5区）



遺物出土状況（9区）



基本土層（9区）



完掘状況（9区） 一南西から一

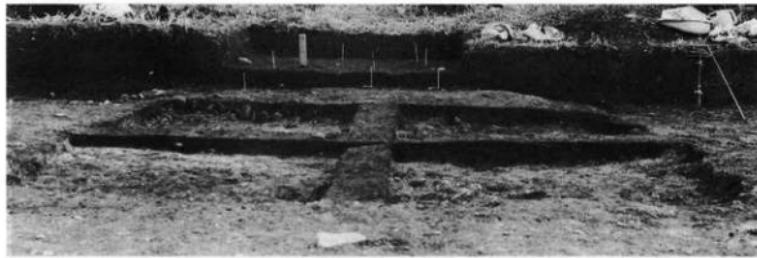
写真図版23 平成10年度 調査区全景



98'-1号竪穴住居跡

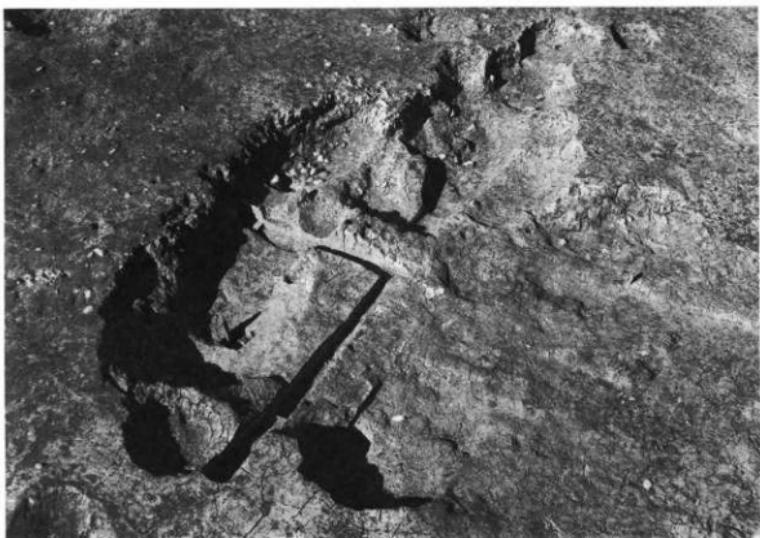


98'-1号竪穴住居跡 断面（南から）



98'-1号竪穴住居跡 断面（西から）

写真図版24 98'-1号竪穴住居跡



98'-3~5号土坑・柱穴群



土坑・柱穴群 断面（西から）



土坑・柱穴群 断面（南から）

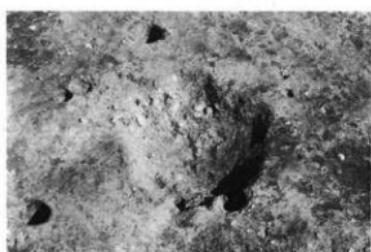
写真図版25 土坑・柱穴群



98'-1号土坑



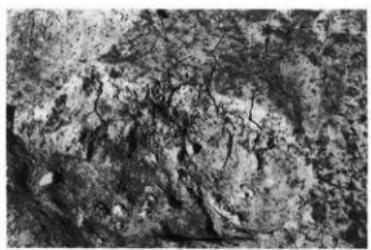
98'-3号柱穴 断面



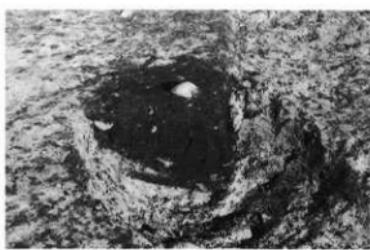
98'-2号土坑



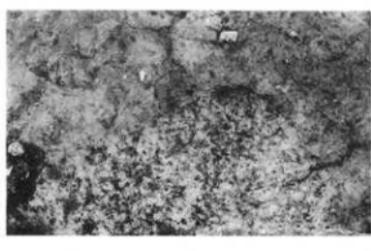
98'-2号土坑 断面



98'-5号土坑



98'-5号土坑 断面



98'-6号土坑



98'-6号土坑 断面

写真図版26 土坑 (98'-1~3・5・6号)



98'-7号土坑



98'-7号土坑 断面



98'-8~10号土坑



98'-9号土坑 断面



98'-8·10号土坑 断面

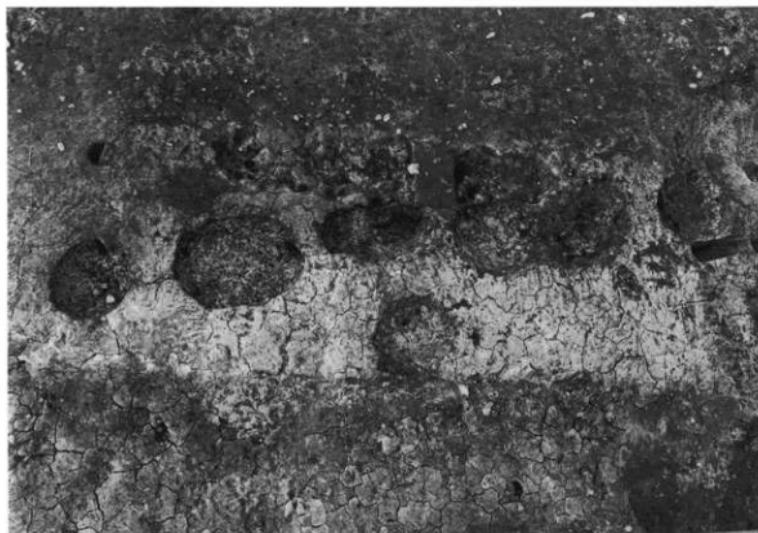
写真図版27 土坑 (98'-7~10号)



98'-2号柱穴



98'-2号柱穴 断面



98'-6~11号柱穴



98'-6·7号柱穴 断面



98'-8号柱穴 断面

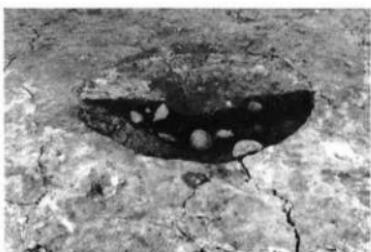
写真图版28 柱穴 (98'-2·6~11号)



98'-9号柱穴 断面



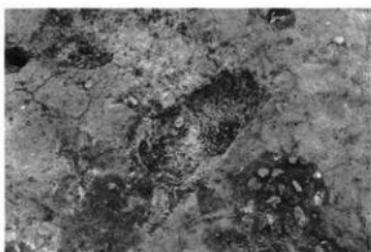
98'-10号柱穴 断面



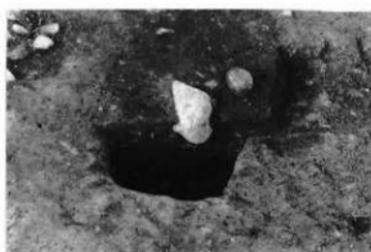
98'-11号柱穴 断面



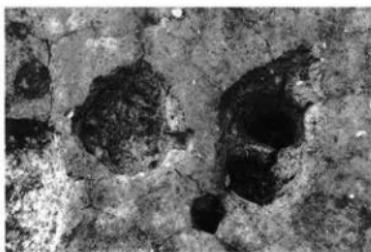
98'-12号柱穴 断面



98'-13号柱穴



98'-13号柱穴 断面

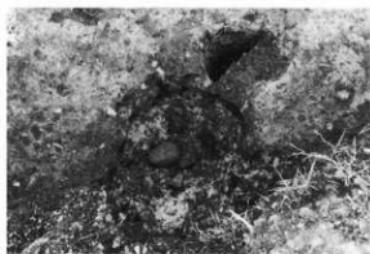


98'-14・15号柱穴



98'-14・15号柱穴 断面

写真図版29 柱穴 (98'-9~15号)



98'-16号柱穴



98'-16号柱穴 断面



98'-17号柱穴



98'-17号柱穴 断面



98'-18号柱穴



出土状况 (126)

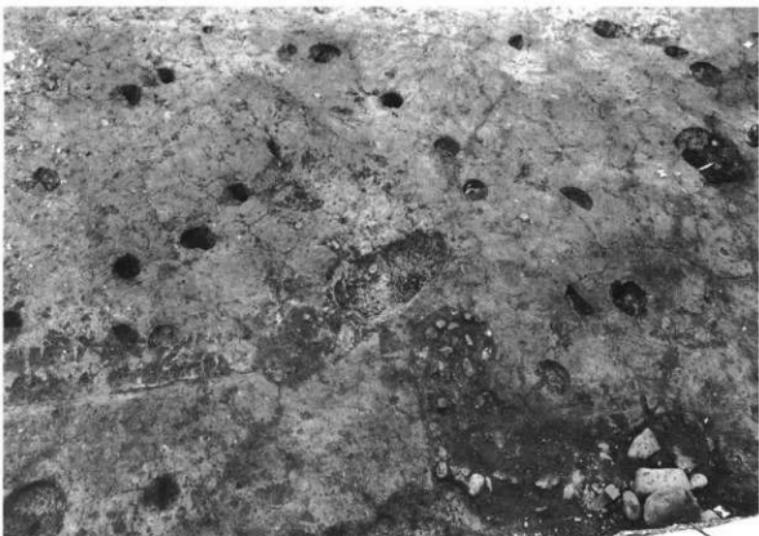


98'-1号烧土

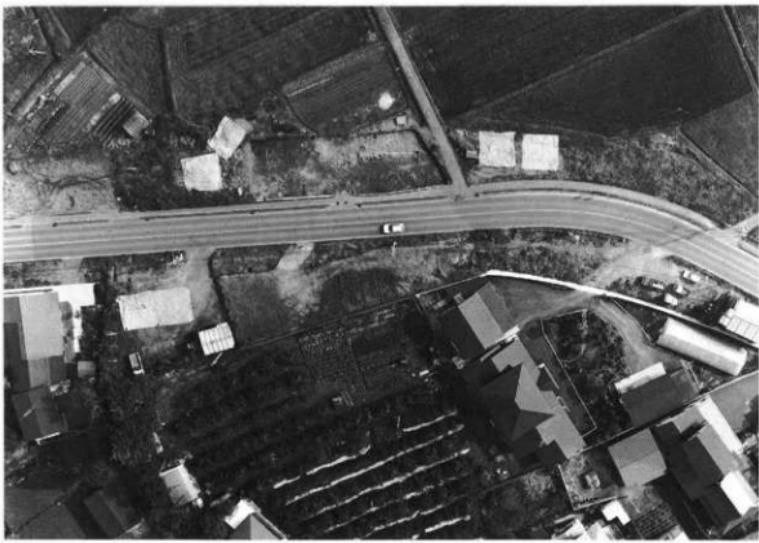


98'-1号烧土 断面

写真図版30 柱穴 (98'-16~18号)・出土状況・焼土

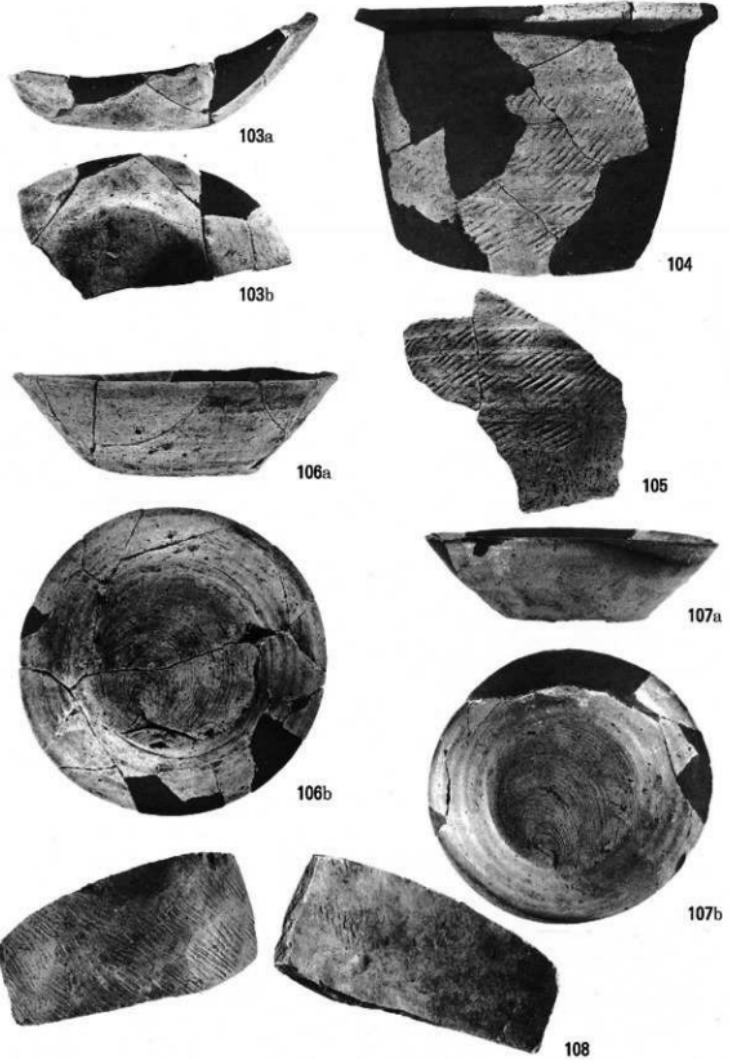


98°-12・13号柱穴・柱穴状小ピット群

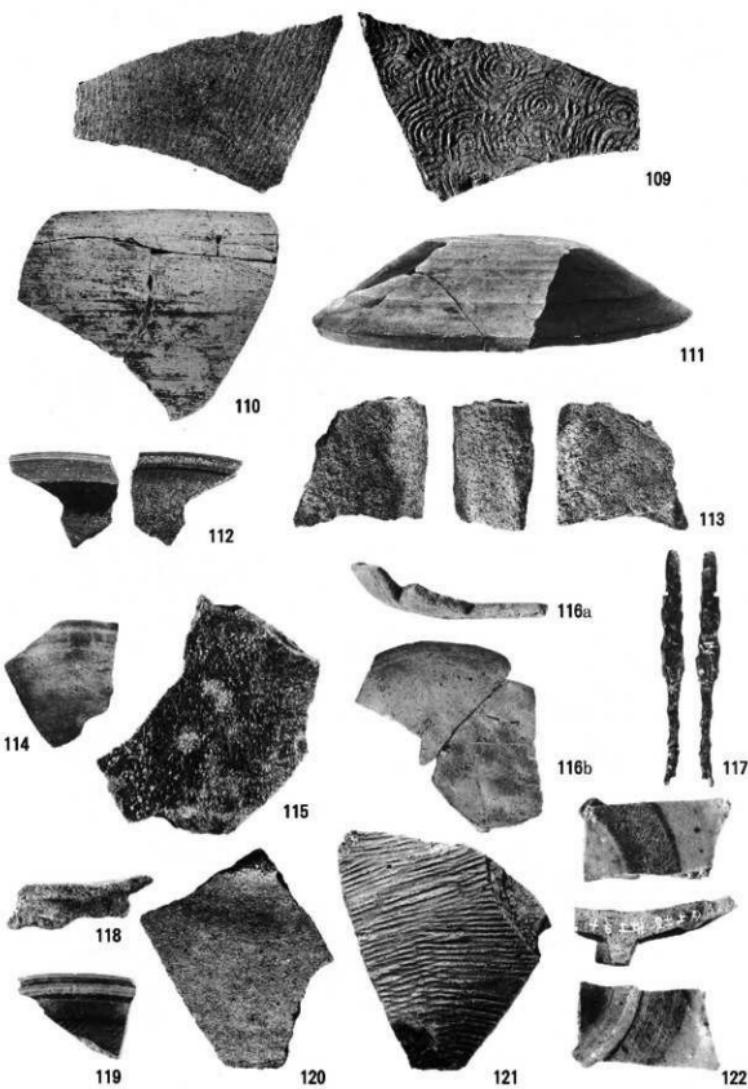


上空から（航空写真）

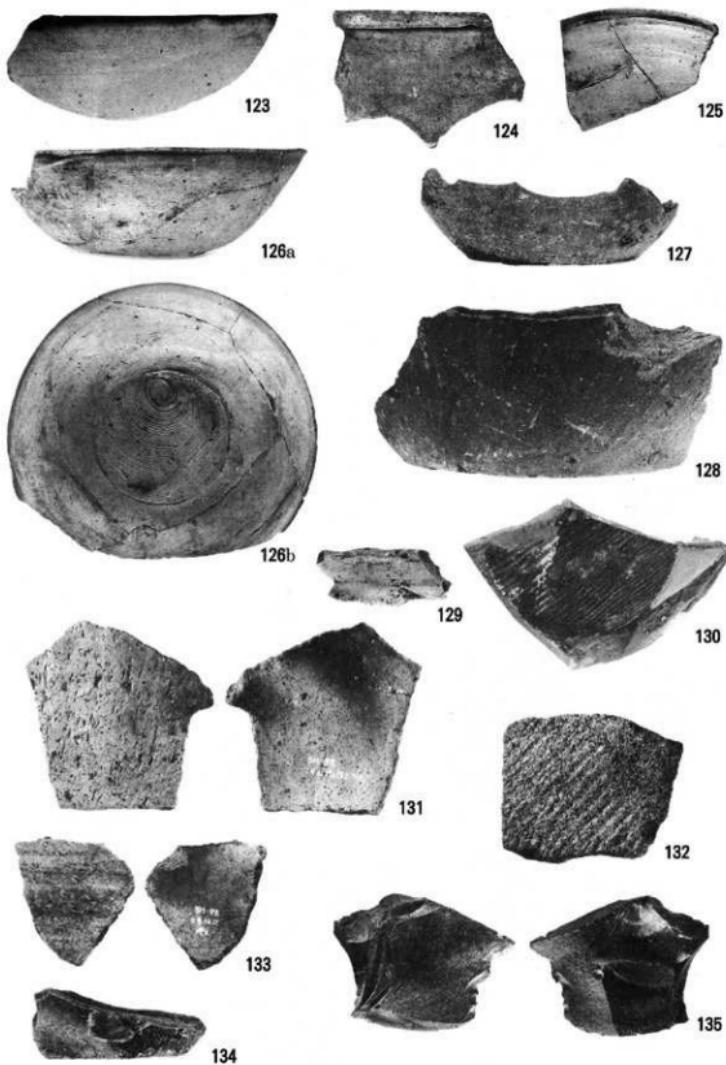
写真図版31 柱穴状小ピット・空撮



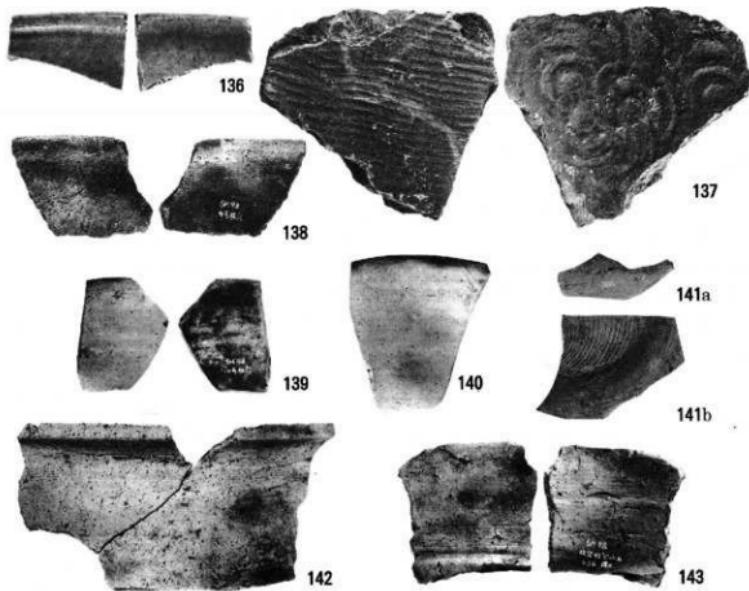
写真図版32 遺構内出土遺物 3 (遺物番号 103 ~ 108)



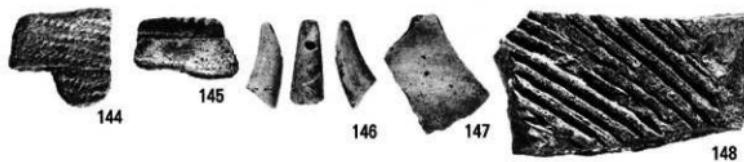
写真図版33 遺構内出土遺物 4 (遺物番号 109 ~ 122)



写真図版34 遺構内出土遺物 5 (遺物番号 123 ~ 135)



### 遺構外出土遺物



写真図版35 遺構内・遺構外出土遺物 (遺物番号 136 ~ 148)

# 報告書抄録

ふりがな	さのはらいせきちょうさほうこくしょ
書名	佐野原遺跡調査報告書
副書名	主要地方道水沢・米里線改良事業関連調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第327集
編著者名	金子佐知子・晴山雅光・高橋與右衛門
編集機関	御岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001
発行年月日	1999年11月30日

所収遺跡名	ふりがな 所在名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
			市町村	遺跡番号						
佐野原遺跡	岩手県水沢市 佐倉河字佐野原 35ほか	03207	NE16-0365	39度 9分 22秒	141度 9分 16秒	19970818~ 19971031 19981001~ 19981105	2,347m <sup>2</sup> 539m <sup>2</sup>	県道水沢 米里線改 良工事に 伴う緊急 発掘調査		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
佐野原遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 (1棟) (縄文時代前期)	縄文土器・土製品 石器・石製品					<ul style="list-style-type: none"> <li>・平安時代の腰（ハの字状に開いた脚を持つ）が出土</li> <li>・時代と遺構、遺物は対比していない。</li> </ul>	
			竪穴住居跡 (7棟)	土師器 須恵器 かわらけ						
		中世～	竪穴建物跡 (2棟) 掘立柱建物跡 (3棟) 井戸跡 (1基) 土坑 (33基) カマド状遺構 (1基) 集石 (1基) 焼土遺構 (3基) 溝跡 (2条) 柱穴状小ピット							

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第327集

## 佐野原遺跡調査報告書

主要地方道水沢・米里線改良事業関連調査

印刷 平成11年11月25日

発行 平成11年11月30日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 株式会社 五六堂印刷

〒020-0021 岩手県盛岡市中央通3-16-15

TEL (019) 654-5610

FAX (019) 651-2167

---

